
TALES OF SYMPHONIA
ラタトスクの騎士
テイルズ オブ シンフォニア
ラタトスクの騎士
世界(とき)の願い①
矢島さら
SPECIAL STORY
ファミ通文庫

矢島さら
Sara Yajima

横浜市生まれ。ゲームノベライズを中心に、ファンタジー小説やエッセイなど、幅広いジャンルの執筆を手掛ける。また、カエルを心から愛してやまない「かえる友の会」会員として、精力的に活動中。主な著書に『テイルズ オブ』シリーズ（エンターブレイン）、『まきこママの通販推理生活』（ベネッセ）、『ガーコとケロタン』（世界文化社）他多数。
http://sarah.m78.com/

株式会社バンダイナムコゲームス
奥村大悟
Daigo Okumura

『テイルズ オブ』シリーズのキャラクターデザイン（〝エターニア〟の大精霊、〝シンフォニア〟のマーテル、〝アビス〟のイオン、ミュウなど）を数多く手掛けているほか、『テイルズ オブ ザ ワールド～サモナーズ リネージ～』、『テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-』では、メインキャラクターのデザインを担当。アメリカ製のゲームが面白過ぎて、朝起きられないことが最近の悩み。



カバーイラスト　株式会社バンダイナムコゲームス 奥村大悟

テイルズ オブ シンフォニア -ラタトスクの騎士-

世界(とき)の願い①

矢島さら

ファミ通文庫


Tenebrae
Marta
Alice
Emil
Richter
Aqua
Decus



テイルズ オブ シンフォニア

TALES OF SYMPHONIA®
ラタトスクの騎士

世界(とき)の願い①

Contents



テイルズ オブ シンフォニア－ラタトスクの騎士－

世界(とき)の願い①

矢島さら

ファミ通文庫

口絵・本文イラスト　株式会社バンダイナムコゲームス　奥村大悟

プロローグ

弱い日差しが早くも傾き始めている。
ほどなく、彼が現れた。
ほんの少し首を傾げるようにして、こちらを見つめながら――。当たり前すぎて、もうすっかり慣れてしまっているその歩調にさえ、彼女は微笑(ほほえ)みながら耳を澄ませる。
樹はまだ幼い。ほんの若樹だ。それでも彼の視線に応えるように、微かな葉擦れの音をたてた。
待ち人の青年がやって来たのは、ずいぶんあとのことだった。
遅れたことを大声で詫びながら、息を弾ませて走って来る。おかげでいつもより癖が強くなったようにみえる髪に手をやり、若樹にも笑いかけた。
話は込み入ってはいたが、青年はいちいち大きく頷いてみせ、やがて彼と――そして

4

彼女と、固い約束を交わす。

風が出てきたようだ。頬に吹きつけるのは荒廃（こうはい）の気配だった。
時間がないのはいつものことだから――。
青年は今度も駆け足で旅立って行った。

若葉が風に千切れないように、彼は樹を抱くように腕を広げる。
こんなことをしても意味がない。結局は祈るしかないのだ。
きっとうまくいくだろう。

ふたりが透かし見た薄闇の先に、英雄と呼ばれた青年の後ろ姿は、もう見えなかった。

1

遙か昔――世界を支える大樹カーラーンは滅び、世界は天の意向により、二つに引き裂かれた

それから長い時間を経たある時、再生の神子（みこ）は大樹カーラーンに代わる新たな世界樹を誕生させる

そして二つの世界――シルヴァラントとテセアラも一つの世界となって生まれ変わったのであった

新時代の幕開けかと思われた

だが――

少女は息を弾ませて走ってきた。

先ほどから背後の方が騒がしい。

（私を追ってるんじゃない。きっとロイドを追跡してるんだ）

彼女は自分にそう言い聞かせた。そうでなければ両手のひらにずっしりと感じている重み——紋章を抱いた、赤く輝く宝石——を取り落としてしまいそうだった。覚悟はしていたつもりだが、心臓の鼓動が激しい。

今夜このパルマコスタで開かれた集会に紛れて、なんとか盗み出したのだ。ロイド・アーヴィングが襲撃をかけてきたのは偶然だった。

ロイドを世界再生の英雄ともてはやす者もいることを、もちろん少女は知っている。だが彼女にとって、あの男は憎むべき存在の仲間でしかない。

ふと顔を上げると、見覚えのある酒場の看板が目に入った。店の中は真っ暗だ。

（みんな逃げちゃったんだ……）

あれ以来続いている不安定な気候のせいで、パルマコスタワインの質はお粗末なものになってしまったと聞いている。それでも、まだ酔うために集まってくる男たちがいてもいい時刻だった。

少女は酒場の壁に背中を押し付ける。走り続けて火照（ほて）った体に、ひんやりとして気持ちがよかった。足元からは波の音が聞こえてきた。

（どうしよう。これから……）

なんとしても逃げ切らなければならない。彼女が再び手の中に視線を落とした、そのときだった。

「いました！」
突然、男の声が響いた。バラバラという足音は……十人近くはいるだろう。
「捕まえろ。俺はロイドを追う！」
「はっ」
少女はその青い瞳を見開くと、灯台のある方向に向かって駆け出した。

文明の進んだテセアラの人々はシルヴァラントの人々を蛮族と蔑(さげず)み
シルヴァラントの人々はこの世界を生み出した再生の神子(みこ)と彼女らを擁立するマーテル
教会を憎んだ
そしてさらに襲いかかる世界の悲鳴ときしみ——
灼熱(しゃくねつ)の砂漠に舞う白い雪——
枯れ果てた死の湖——
溶け始めた氷河、焼け落ちる森林——
それらの異変は人々の心に飛び火し一つの鬼子を生み出すに至った
虐(しいた)げられしシルヴァラント人が身を守るために組織したレジスタンス

テセアラとマーテル教会を諸悪の根源とし、抵抗運動を続けるシルヴァラント解放戦線ヴァンガードである――

エミル・キャスタニエは、手持ち無沙汰（ぶさた）にベッドに腰かけていた。思い出したように、手近に置いてあった釣竿を、指で弾いてみる。
「あーあ。よりによってなんで今日なんだよ、ヴァンガードの集会。トマスさんも行ってるのかなぁ」
隣家に住む漁師のトマスは、気のいい青年だった。ひとりっ子のエミルを本当の弟のように可愛がってくれる。今日は一緒に海釣りに行く約束をしていたのだった。
（トマスさんはテセアラ人もマーテル教も嫌いだから、絶対行ってるよな）
どちらにせよ、パルマコスタの街には子供の外出禁止令が出ている。釣りには行けなかったろう。
エミルは友達とも遊べず、散歩もできず、日がな一日家の中で過ごしたのだった。早めの夕飯を食べてしまえば、もうすることもない。
「あーあ。今夜は早く寝ちゃおうかな」
大きなあくびをしかけた、そのときだった。視界の端に、赤いものがチラついた。
（あれ？）

窓の外だ。エミルは立ち上がると、窓を開けてみた。

「空だ……。空が赤いんだ」

夜の闇の中を、街の人々が走って行くのが見下せる。悲鳴をあげ、泣き喚いている人もいた。

(なにがあったんだろう)

遠くで爆発音が響いた。窓枠に手をついたエミルが身を乗り出そうとしたとき、今度は彼の家の玄関扉を乱暴に叩く音が聞こえた。

「レイソル！　レイソル、何をしてる！」

(誰かがお父さんを呼んでる……)

「レイソル、早く逃げるんだ。ぐずぐずしてるとロイドに殺されるぞ！　ヴァンガードの集会が襲われたんだ。それだけじゃない。ロイドは我々まで巻き込んで皆殺しにするつもりらしい！」

ロイドだって、とエミルは驚いた。

「ラナ！　エミルを早く連れて来るんだ！」

今度は父親が叫ぶ。すぐに母親が階段を駆け上がってくる足音が聞こえた。

(ロイドって、あのロイド・アーヴィング？　世界再生を成し遂(な)(と)げた神子コレットのしもべのひとりだよね。どうしてロイドが……)

「エミル！　いらっしゃい！」

部屋に飛び込んできたラナに腕を摑まれ、エミルはそれ以上考えることができなくなった。

「こっちだ！　急げ！」
「え、ええ……」
夫の声に応えたラナが、スカートの裾を踏みそうになる。
港に停泊していた蒸気船がめらめらと燃えている。その左側には天を焦がすように炎を吹き上げている灯台が見てとれた。
絶え間なくあがる悲鳴、怒号——。
この世の光景とは思えない。エミルの足はすくんだ。
「エミルも早く！　このままだとロイドに殺されて……」
最愛のひとり息子を促そうとしたレイソルの口がぽかんと開いたままになる。
灯台へ続く通路の階段の上に現れた人影を、エミルは認めた。
「誰に、殺されるって？」
「ロイド・アーヴィング!?」
父親の目が恐怖に見開かれる。エミルは炎の照り返しの中に立つ若者を見上げた。
(ロイドだ！　赤い服に、ツンツンの髪……)

エミルは、かつて再生の神子とともにこの街を訪れたロイドの姿を、見たことがあった。

間近で見るロイドは、ひどく落ち着き払っているように見えた。静かな怒りが英雄を満たしているのだと、エミルは思う。

ロイドはゆっくりと両腕を交差させ、左右に差した剣を抜き放つ。

「パルマコスタは街をあげてヴァンガードに加担し、マーテル教会と神子をないがしろにした」

両の刃が怪しい光を放った。

「その罪、万死(ばんし)に値する……」

ロイドが跳んだ。着地の体勢を取りながら、ラナに斬りかかる。

「きゃあああああっ!?」

「お母さんっ！」

その場に倒れたラナに思わず駆け寄ろうとしたエミルを、レイソルが押し戻すように突き飛ばした。

「エミル！　おまえは逃げろ！　逃げて生き延びろ！」

親子を見比べたロイドが、薄い笑いを浮かべたように見えた。

「早くしろ、エミルっ！」

「……あ……、う、うん！」

背を向けたとたん、父親の絶叫が響く。そしてエミルは、自分のすぐ後ろにも空（くう）を切る気配が生まれたのを感じた。

少女にとって幸いなことに、男たちは二手に分かれた。ロイド追跡もまた厳命なのに違いない。

「待てっ！」

それでも、彼女はすぐに路地の突き当たりに追いつめられてしまった。兵士の制服に身を包んだ男たちが三、四人、じりじりと距離を詰めてくる。

少女は壁際まで後退すると、もう逃げる術（すべ）はないのだと悟った。そして、思わず手の中で輝いている宝石――ラタトスク・コアに額を摺り寄せるようにした。

「……助けて。助けて、ラタトスク！」

まばゆい光が彼女を包む。コアから発せられる輝きが自分の中に入ってくるような感覚があった。少女の意識はそのまま途切れた。

「大丈夫か?」
誰かの声が降ってきた。
ハッと我に返ると、彼女は自分が石畳の上に倒れていたことに気がついた。
(そうだ……すごい光が……)
左の額に違和感があった。押さえようとした手のひらに、赤い光が映る。光はまるで呼吸をしているかのようにゆっくりと明滅を繰り返していた。
おそるおそる視線を上げると、膝まである白い服を着た少年が、こちらを見ていた。彼の背後にはさきほどの兵士たちが倒れている。
「キミが……助けてくれたの?」
「……」
少年は応えない。大丈夫かと訊ねてきたわりには、気のなさそうな様子だった。
そのとき、細い遠吠えが聞こえてきた。
「テネブラエの声……」
少女は立ち上がり、左右につけている白い花の髪飾りをちょっと直す。額の違和感はほとんど消えていた。
「……行かないと」
急にそわそわしだした少年が背を向ける。もう少女には興味がないようだった。

「待って！　キミの名前は……！」
あわてて叫んだが、少年はそのまま闇の中に消えた。

なぜ歩いているのかわからない。
でも、行かなければならないのだ。彼はまだ燻(くすぶ)っている灯台を背に、ただ歩き続けた。
近くの建物が焼けるバチバチという音も、降り注ぐ火の粉も気にならない。
呼ばれている――。
言葉にならない言葉が少年の背を押していた。
「！」
階段を駆け降りて、彼は足を止める。渦巻く煙に浸るようにして、人がふたり倒れていたからだ。
少年は無表情のまま、その場に跪(ひざまず)いた。
男の方はもう息がない。だが、女は少年の気配に目を開いた。そしてあらぬ方向に震える手を伸ばしかけた。

「……エミル……。戻ってきたのね……」
（……エ、ミル……）
「ああ……。もうおまえの顔も見えないわ。お母さんはもう駄目……。せめておまえだけは生き延びて……」
（……お母……さん…。…エミル……）
女の右手が少年の膝を探り当てた。
「ロイドに殺される前に……逃げなさい……。ルインのフロルおばさんのところへ……はや……く……」
血の気の失せた指が、滑って落ちた。それきり動かなくなった女に、少年はそっと手を伸ばす。温かい皮膚と髪の感触——。
「……お……母さん……。お母さんっ！」
自分が誰であるのか、理解したと少年は思った。

早朝の浅い眠りを破ったのは、細く聞こえてくる遠吠えだった。

「……ん」
エミル・キャスタニエはベッドの上で耳を澄ませた。
(夢……?)
ウォォ――ン……!
だが今度ははっきりと聞こえる。エミルはハッと起き上がった。
「……今の遠吠え……。どこかで聞いたような……」
だが、どこで聞いたのか思い出せない。気のせいかもしれないと思いながら、部屋を出て階下へ降りる。部屋といっても、粗末なベッドと最低限の家具があるだけだ。それでも、半年前に突然転がり込んだ甥にひと部屋くれたのだから、感謝すべきなのかもしれなかった。
台所では、叔母がスープの鍋をかき回しているところだった。叔父のアルバはもう出かけたらしい。
「お、おはよう……ござい**ま**……す。フロルおばさん……」
ウォォ――ン……!
エミルとフロルは一瞬体を硬くする。
「あ……。今の遠吠え……」
フロルは不機嫌を隠そうともせず、
「――明け方から、シノア湖の湖底に魔物が入り込んでるのよ!」

と、エミルを睨んだ。
(あれって魔物の声なんだ……)
「す……すみません……」
「どうしてエミルが謝るの?」
どうしてと訊かれて、エミルは困ってしまう。
「あ……あの……」
嫌な子、とフロルは吐き捨てるように言った。
「いつもぐずぐずしてて、まるでラナ姉さんに似てないし。きっとレイソルの血が濃いのね」
エミルが叔父夫婦に初めて会ったのは、この家にやって来た半年前のことだった。それまで一度もラナは、ひとり息子を連れてルインを訪ねたことがなかった。子供のできない妹に気を遣ったのかもしれないし、気性の激しい義弟のアルバと折り合いがよくなかったのかもしれない。今となっては確かめようもないことだった。
「……ごめんなさい」
エミルはフロルから差し出されたスープを受け取ると、硬くなったパンと一緒にもそもそと朝食をすませた。

家の外に出ると、エミルはほっと息をつく。
アルバからはおとなしくしているよう言われているが、家にいてもやることがない。フロルの言いつけで手伝いをしたことはあるが、彼女はほんの少しの粗相――重ねた皿がずれているとか、掃除したはずの本棚に埃が残っているとか――を見つけたとたん、エミルを激しくなじるのだった。天気が悪いというだけで文句を言われたこともある。
嫌われているのは自分の行為ではなく自分自身なのだ、ということを理解するようになるまで、時間はかからなかった。
自警団の見回りでアルバが留守なのをいいことに、フロルに見つからないよう出てきたが、エミルにはとりたてて行くところはない。
と、幼い子供たちが楽しそうに駆けて行くのにすれ違った。何がおかしいのか、彼らはにぎやかな笑い声をたてている。
(いいなぁ、友達がいて。僕も欲しいな……)
そのとき、またあの遠吠えが響いてきた。
「また魔物の声……噴水広場の方から聞こえるけど……」
エミルの足は街の広場へと向く。途中、いくつかの案内板の前を通り過ぎた。かつてこの街に侵入してきた魔物たちとの戦いの記録が刻まれているものだった。
ルインはこれまで幾度もの危機を乗り越え、存続している街だと聞かされていた。今

も現実に魔物が頻繁に現れているが、過去の経験から自警団はしっかりと機能しているのだろう。
噴水広場まで来ると、エミルは微かに眉をひそめた。広場のいちばん目立つ場所に、あのロイド・アーヴィングの銅像が建っているからだ。
ロイドの像は両手に剣を構え、敵に向かって今にも駆け出して行きそうに見える。
街の住人たちはロイドの像の前を通るときには必ず立ち止まり、深々と会釈（えしゃく）するのだった。
最初にこの光景を目にしたとき、エミルは目を疑ったものだ。
(どうしてロイドの像なんかに挨拶（あいさつ）するんだ……!? あいつはパルマコスタを襲ったのに……僕のお母さんとお父さんを殺したのに！)
驚いたことに、エミルという生き証人がいるにも関わらず、ルインの住人はパルマコスタの一件がロイドの仕業（しわざ）であることを信じなかった。かつて彼らに命を救われた者が多いだけに、ロイドが英雄だと信じる気持ちが強いのだ。
(僕はだまされない……)
「ロイド……」
銅像を睨み上げ、唇を噛む。そのまま通り過ぎようとしたとき、
「おい、エミル見たぞ」
背後からいかにも意地悪そうな声がした。

「ロイドさまにおじぎしろよ」
双子の少年、ジダとモルだった。彼らはエミルを見るたびに、舌なめずりでもするように絡んでくる。
「えっ、し、したよ……」
エミルは言ったが、
「してねーよ」
「してねーよ」
ふたりに声をそろえて否定されてしまう。
(どうしよう……見られてたなんて気づかなかった)
「おまえやっぱりロイドさまが嫌いなんだろ」
「だからロイドさまが再生したこの街を壊そうとしてるんだな」
「な、何のこと……」
とぼけるなよ、とふたりはエミルの両側に立ち、逃げられないように体を寄せてきた。
「おまえが来てから、シノア湖が涸れて魔物が増えたんだ」
「おまえ、バケモノ使って街を襲わせようとしてるんだろ?」
「ち、ちがうよ……」
エミルは必死に首を振る。
「じゃあ証明しろよ」

「えっ……」
「ロイドさまの像に忠誠を誓え」
「そうすれば信じてやるよ」
なあ、と双子は頷きあった。
「さあ、誓えよ」
(忠誠を誓う、だって？　冗談じゃない！　けど……断ったらなにされるか……)
エミルは渋々ロイドの像の前に立つと、頭を下げる。
「……ロイド……さまに、忠誠を誓います……」
「聞こえませーん」
「もっと大きな声で誓え」
ジダとモルがはやし立てた。
「ロイドさまに忠誠を誓います！」
半ば自暴自棄（じぼうじき）に怒鳴ると、ジダがむっとした。
「なんだよ、おまえロイドさまのことバカにしてるのかよ。ロイドさまはこの街を救った英雄なんだぞ」
「だ、だけど」
エミルは必死に説明しようとする。
「ま、前にも言ったけど……。パルマコスタはあいつに襲われて、僕のお母さんもお父

さんもあいつに殺された……」
「そんな話、誰が信じるかよ」
モルが笑う。
「本当だよ。だから……お母さんとお父さんを殺したロイドに忠誠なんか誓えるもんか！」
「聞いたぞ」
「それが本音だな」
双子はもう笑っていなかった。エミルはじりじりと後ずさる。
「ち……違うよ……。今のは、そ、そういうんじゃ……」
「黙れ！　バケモノ！」
「成敗してやる！」
乱暴な腕に突き飛ばされ、エミルはそのまま後ろに吹っ飛んだ。
「うわあっ!?」
彼はちょうどそこに歩いてきたらしい青年に背中からぶつかると、しりもちをついてしまう。慌てて顔を上げると、にこりともしていない顔が見えた。肩まで伸びた赤い髪にふちどられた表情は、眼鏡のせいでよけい冷ややかに見えるのかもしれなかった。
（うわ、どうしよう……）
青年はエミルに手を差し伸べてから、ジダとモルに言い放った。

「……失せろ」
「……な……なんだよ」
「……失せろ！」
ひっ、と喉の奥を鳴らし、双子は一目散に逃げて行った。
「あ……あの……」
ようやく立ち上がったエミルがおずおずと口を開いたとたん、青年がハッと息を飲むのがわかった。眼光がさらに鋭さを増す。
「……おまえは!?」
「は……はい……？」
質問の意味がわからない。聞き返すべきだろうか。
(………こ、怖い)
青年は唇を動かせずにいるエミルをじっとみつめていたが、ふいにその眼光から鋭さを消す。
「……なんでもない。おまえ……もう少ししっかりしろ」
青年が歩み去ってしまうと、ようやくエミルはひと息つくことができた。だが、鼓動がまだ激しい。
「こ、怖くてお礼が言えなかった……。こんなだから僕、友達ができないのかな……」
(友達……欲しいな……。けど……僕なんか……)

――おまえ……もう少ししっかりしろ

言われたばかりの言葉が脳裏に甦った。

「……しっかりしろ、か。そうだよね。やっぱりさっきの人にちゃんとお礼……言わなきゃ」

(ありがとう、って言えばいいんだ。それだけのことだよ……)

エミルは拳をぐっと握りしめると走り出した。

橋を渡り、青年を捜す。彼はリフィル・セイジの銅像の前に立っていた。この街にはロイドだけでなく、世界再生の際に活躍した英雄たちの銅像が建てられているのだ。

銅像を見物してるなんて観光客なのかな、とエミルは思ったが、すぐにその考えを否定した。魔物の出る街でのんびりしようというのがおかしいし、そもそも観光客なら、多少なりとも楽しそうにしていそうなものだ。

「……なんだ」

エミルの気配に気づいた青年が振り返る。やはりにこりともしない。

(……う……怖い……)

「話がないなら俺から聞きたいことがある」

「……え!?　は、はい……！」

声が裏返りそうになった。

「確かエミル、だったな」

こくこくと頷いてみせると、青年は訊ねた。
「おまえ、額に赤い宝石のようなものをつけた少女を見かけなかったか？」
「……え？」
意外なことを訊ねられ、エミルはどもった。もちろん、そんな少女など見たことはない。
「あ……あの……い、いいえ……」
「何故そんなにおびえている？」
「あ……あの……」
あきれたようなため息をひとつつくと、青年は言った。
「——勇気は夢を叶える魔法」
「え？」
「昔、頭のネジのゆるんだ『人間』がほざいていた台詞（せりふ）だ。ロイドへの忠誠を拒んだとき、おまえの中には勇気がわいていたんじゃないのか？」
そうかな、とエミルは首を傾げたくなる。
「人の顔色だけを見て、こび、へつらい、逃げる奴は豚同然——いや、それ以下だ」
青年は痛烈な口調（くちょう）で言い放つと、エミルの顔を覗き込んだ。
「おまえは豚か？　それとも人間か？」
「ぼ、僕は……」

青年は、はじめから答えなど期待していなかった様子で、
「せいぜい人間であるんだな、エミル」
と言い捨て、今度は足早に歩き出す。
言葉のきつさとは裏腹に、自分への軽蔑や憐れみが感じられなかったことを、エミルは不思議に感じた。
「勇気は……夢を叶える魔法……」
勇気か、とエミルは青年の言葉を噛みしめる。
「僕はバケモノなんかじゃない……。人間だ」

広場を抜け、町長の家の前まで来ると、また遠吠えが聞こえた。
「……湖底だ。湖底の方から聞こえる」
エミルは耳を澄ます。間違いない、シノア湖の方から聞こえてくる。
「どうしよう……。気になるけど、湖底に降りるには街の外に出ないと駄目だし……勝手に外に出たらフロルおばさんに怒られるし……」
ふたたび、今度は少し焦れたような鳴き声が響いてきた。まるで、彼の呟きが聞こえてでもいるかのようだ。

「……なんだろう。呼ばれてる気がする……」
エミルはふらふらと街の出入り口にかかっている橋に向かって歩き始めた。
やがて、見張りに立っているらしい自警団の男が見えてきた。近所に住む顔見知りだ。
(駄目だ……見つかっちゃうよ)
エミルが早々に街の外に出ることを諦めかけたときだった。
「アルバ！ どうしたんだ。血相を変えて」
見張りの男が声をあげる。橋を渡って外から走り込んできたのは叔父だった。
「ア、アルバおじさん……」
「ちっ、おまえか……」
思いがけず甥っ子の姿を見つけたアルバは、不機嫌を隠そうともせずに舌打ちする。
「辛気くさい顔を見せるんじゃない！ おまえって奴は！」
「……あ……ご……ごめんなさい……」
「まったく邪魔な奴だ。おまえがロイドさまを目の敵にするから、うちがヴァンガードに加担してるんじゃないかって、後ろ指さされてるんだぞ。いいから家でおとなしくしてろ！ 帰ったら折檻してやる！」
アルバは手にしていた武器を威嚇するように振り上げてみせた。
「おまえの姿を見ると街のみんなが不愉快になるんだ！」
まあまあ、と見張りの男が割って入る。

「こんなヴァンガードかぶれのガキなんてほっとけよ、アルバ。それよりなにがあったんだ？」

アルバはハッとし、

「ああ、大変なんだ。シノア湖の湖底に見たことのない魔物が来て、自警団が何人かやられた！」

と、湖の方角を振り返った。

「な、何⁉」

「俺は応援をかき集めてくる。おまえは町長に報告してくれ！」

「わかった！」

ふたりとも、もうエミルのことを見もしない。慌てふためいて走り去った。

(な、なんか急に静かになっちゃったな……)

エミルがあたりの様子を窺おうとしたときだった。

ウォォ――――ン……！

まるで、見えているかのようなタイミングであの声が聞こえた。

「またあの遠吠え……今なら……湖底に行ける……けど……。だけど……おじさんたちに怒られるのは怖いよ……」

うじうじと項垂れる彼の脳裏に、先ほどの青年の言葉が甦る。

――人の顔色だけを見て、こび、へつらい、逃げる奴は豚同然――いや、それ以下だ

「……やっぱり、行こう。……僕は……人間だ」
エミルはようやっと顔を上げた。
湖が涸れてから、どれくらいたつのだろう。自分がこの街に来てからだと言われてはいるが、正確なところは知らなかった。ルインに来て以来、街の外に出るのは初めてのことだった。罪悪感でエミルの足は鈍りがちになる。
(どうしよう……。ここまで来ちゃったけど……)
湖底には一滴の水もない。かつて水中に繁茂していたと思われる苔はカラカラに乾き、かわりに青い草が揺れていた。下がり続ける水位になすすべもなかったのだろう、小さな船が土の上で難破船よろしく朽ちかけていた。
さらに不気味なことには、水があったときには見えなかったはずの暗い穴が、ぽっかりと口をあけているのだった。
耳を澄ましてみたが、なにも聞こえない。が、そのとき、ため息をつくエミルの目の前が急に翳った。顔を上げると、そこには熊に似た巨大な魔物が目を光らせている。
「うわぁぁぁ！」

一瞬エミルは、遠吠えの主がこの魔物なのではと考えた。
(違う……!)
とっさに護身用の剣を抜く。叔父から与えられていた安物だが、ないよりずっとましだ。だが、剣など実際に振ったこともなかった。
「つ、使い方がわからないよ……!」
唸り声をあげて迫ってくる魔物に向かって、エミルはめちゃくちゃに剣を突き出した。案の定、それはすぐに叩き落とされ、彼はドスンとしりもちをついた。
「このままじゃ、死んじゃうよ……。もう嫌だよ……!」
魔物の眼が光る。これまでかと思ったとき、
「危ない!」
湖岸の茂みの中から何かが飛び出してきた。それが武器(スピナー)を手にした少女であるとわかったのは、巨大な魔物が吹き飛ばされ、地響きをたてたあとのことだった。
湖底に危なげなく着地した少女は、エミルに手を差し伸べてくれる。今日はこれで二回目だ、と彼はさすがに情けなくなった。
「……あ」
ありがとう、と礼を言いかけ、エミルは少女が可愛らしい顔立ちをしているのに気づいた。青い瞳が美しかった。長く伸ばした髪には、白い花の飾りをつけている。
なにか言いかけた少女の表情が、ハッと険しくなる。魔物が立ち上がり、こちらに向

かってきたのだ。
「――また来た！　キミ、逃げる？　戦う？」
前を向いたままで、少女が訊ねる。
「あ……あの……」
「男ならはっきりするっ！」
――勇気は夢を叶える魔法。
青年の声がまた甦った。
――昔、頭のネジのゆるんだ『人間』がほざいていた台詞だ。
――ロイドへの忠誠を拒んだとき、おまえの中には勇気がわいていたんじゃないのか？
「た、戦う！」
「ＯＫ！」
エミルは急いで魔物に叩き落とされた剣を拾い上げた。
「……や、やあっ！」
「えいっ！」
戦うとはいっても、臨機応変に動き回ることなど出来ない。先ほどと同じようにひたすら剣を振り回すだけだ。
魔物の長い手が、再びエミルを捕らえようと伸びてくる。さっきはこれで剣を落とさ

れた。
「やめてよ！　うわぁっ！」
尻込みするエミルの横から、少女が飛び出した。
「天翔舞（てんしょうぶ）っ！」
スピナーが魔物の巨体を連続して斬った。
ヴオオオ――ッ！
魔物は苦しがって乾いた湖底をのたうち回る。
（うわ、すごい！）
エミルはとどめを刺すことも忘れて、少女の技に感心していた。
「はぁっ！」
スピナーは最後に魔物の喉を掻き切ると、魔物が動かなくなる前に、彼女の手中に収まった。

「ふう」
今度こそ魔物の息の根を止めてしまうと、マルタ・ルアルディは肩で息をついてから少年の方を振り向いた。

「ここは危ないからキミは逃げた方が……」
目が合ったと思ったとたん、ドキリとする。
「キミは！」
「……え？　な、何……？」
華奢(きゃしゃ)な体つき、金色の髪、そして明るい緑の瞳――。
「私……私のこと覚えてない？」
彼女は胸に手を当てると、少年の顔を覗き込んだ。
「……人違い？　ううん、そっくりだけどなぁ……」
(あの夜……)
少女は今では〝血の粛清(しゅくせい)〟と呼ばれる、半年前のパルマコスタ襲撃の夜を思い出していた。
(私を助けてくれたあの人……だよね？)
「な、何のこと？」
だが少年は訝(いぶか)しげに首を傾げるばかりだ。
なんでもない、とマルタは言った。記憶違いではないはずだが、相手が覚えていないのでは仕方がなかった。ぐずぐずしている暇はないのだ。
「ごめんね。とにかく早く逃げた方がいいよ。それじゃ」
「ま、待って！」

踵（きびす）を返したとたん、少年に呼び止められた。
「なに？　私、急いでるんだけど」
「た、助けてくれてありがとう。僕はエミル。あ、あの……その、キミ……」
「私はマルタ。それで？」
「ここ……あ、危ないなら……キミも逃げた方が……」
（優しい！）
頬が熱くなる。
「……危なくなったら……また……助けてくれる？」
「だ、だけど……。た、助けてくれたのは……キミ……」
「――あはは、覚えてないんだもんね」
少年が困った様子で頭を掻くのを見て、マルタは笑った。
「……ごめん、変なこと言って。私、もう行かないと。それじゃあね、エミル！」
笑いながら、ふたたびマルタと名乗った少女が駆け出そうとしたときだ。前髪が揺れ、額があらわになった。そこに、羽根のような形に弧を描いた赤い模様が見えた。ガラスのように透き通った、美しい輝き――。
「額に赤い宝石……！」
――おまえ、額に赤い宝石のようなものをつけた少女を見かけなかったか？
青年は言っていた。



もしかして、さっきの男の人が捜してたのはマルタだったのかな、とエミルは思った。
（知らせた方が……いいよね……）
マルタが走って行った方角を頭に刻みつけ——そこには洞窟の入り口のように見える暗い穴が見えたが、近づいて確かめることはせずに、彼は急いで岸へ上がった。
走りながら、アルバがフロルと湖が涸れたせいで洞窟が見つかったと話していたのを思い出した。
（あの子……洞窟の中に入ったのかな？）
街の様子に変わったところはなかった。広場に行けばまたあの双子につかまるかもしれない。それを考えると気が重かったが、幸い町長の家の窓に見覚えのある青年の姿を見つけた。彼は町長となにやら立ち話をしているところだった。
入り口に回り、ドアを細く開けて覗き込む。青年はすぐにエミルに気がついた。
「エミル……か」
「エミル。リヒター殿と知り合いだったのかね？」
意外な取り合わせに町長は驚いて、ふたりの顔を見比べる。
リヒターっていうんだ、と思いながら、エミルは家の中に入った。
「先ほどマルタの行方（ゆくえ）を訊ねようと声をかけた」
（マルタ⁉）
それならやっぱりあの少女だ。

「そうでしたか」
町長はあっさりと頷いた。
「あの……リ、リヒターさん？」
「何だ」
リヒターは眼鏡の奥からエミルを注視する。
「あの……その……額に赤い宝石をつけた……」
「マルタがいたのか⁉　どこだ⁉」
言い終わらないうちに、リヒターはエミルの肩を掴んだ。
「は、はい……えっと、あの……」
「はっきりしろ！」
「あ……あの……う」
「エミル。落ち着いて説明してごらん」
肩を揺さぶられてしどろもどろになっているエミルを、町長がゆっくりとした口調で促す。彼はエミルがこの街でどんな扱いを受けているか知っているが、ルインの長として慈悲深くふるまおうとしているようだった。
「あの……シノア湖……あの、魔物の出る……この間見つかった……」
「もういいっ！」
「……う……」

リヒターに遮られ、エミルはうなだれた。
「……町長。エミルをお借りする」
リヒターが少年を自分の方に引き寄せる。
「――エミル。マルタに会った場所まで案内を頼めるか？」
「……は……はい……」
断れるわけがない。それにもともと、マルタのことを教えるためにここに来たのだ。
エミルは頷いた。それを見るやいなや、リヒターはもうこんな場所に用はないとばかりに外に出て行く。
「強引な人だな……」
町長はさすがに眉をひそめたが、
「まあいい。エミル、案内して差し上げなさい。ただし、魔物には気をつけてな」
と、少年を送り出してくれた。
「す、すみません。お……お待たせ……しました」
エミルが外に出ると、リヒターは少し離れたところに立って待っていた。
「必要以上に謝るな。豚になりたいのなら止めないがな」
「ご、ごめんなさ……――あ……！」
あわてて口を押さえるが、もう遅い。
「ごめんなさい……」

あきれたようにリヒターがため息をついた。
「もう謝るな。――さっきは怒鳴ってすまなかった」
「リヒターさん……」
ほっと頬を緩ませかけたエミルに、だが彼は再び冷たく言い放った。
「何をぐずぐずしてる。早くマルタと会った場所へ案内しろ」
「は、はい」
あわててエミルは歩き出した。街を出て湖底へ降り、洞窟の入り口に近づくまで、自警団に止められることもなかった。
だが、洞窟の入り口には仲間を連れて戻って来たアルバがいた。エミルの姿を認めると顔色を変えて怒り出した。
「エミル！　いい加減にしろ、この疫病神（やくびょうがみ）が！」
アルバの仲間たちはわざとエミルの耳に届くように言い合った。
「ふん……。さすがヴァンガードのお仲間だな」
「甥っ子とはいえ、アルバもとんだ厄介者（やっかいもの）を引き取ったもんだよ」
「……す、すみません……」
エミルがほとんど反射的に謝りかけたとき、それまで黙っていたリヒターが口を開いた。
「エミルは俺が町長の許可を得て連れて来た。そこをどけ」

「町長が？　しかし……」
アルバは、見かけない青年――しかもこのうえなく感じが悪い――と甥の関係を量りかねているようだった。
「どけ!!」
業（ごう）を煮（に）やしたリヒターが怒鳴ると、気圧（けお）された男たちは思わず左右に分かれ、道を開けた。
「なにをぐずぐずしている。来い、エミル」
リヒターが顎をしゃくると、あわててアルバが手を伸ばして遮った。
「ま、待て！　その奥は魔物が……」
「それがどうした」
「危険だと言ってるんだ！　あんたが行くのは勝手だが、うちのエミルはおいていってもらう」
「疫病神じゃなかったのか？」
「っ」
アルバは悔しそうに言葉を飲む。
「――エミル。おまえはどうする？」
「え……？　ぼ、僕……」
エミルが口ごもると、アルバが喚いた。

「残りなさい、エミル！」
「あ……え……」
それを見たリヒターは、これ以上は時間の無駄だと思ったのだろう、
「うじうじとはっきりしない奴だな。豚ですら、自分の意志はあるもんだ」
と言い捨て、ひとりでさっさと洞窟に入って行く。
「あ……」
(マルタって子にも言われたっけ。〝男ならはっきりするっ！〟って……)
「何なんだ、あいつは！」
リヒターの背中が暗がりに消えてしまうと、アルバは舌打ちし、
「さあ、行くぞエミル」
街の方へ甥を押し戻す仕草をした。が、エミルは動かない。
「……僕、行くよ」
「エミル！」
「……行くんだ！」
叔父にこんな態度をとるのは初めてだと思いながら、彼は洞窟に駆け込んだ。とり返しのつかないことをしてしまったが、これでよかったのだという思いの方が強かった。
しばらく薄闇の中を歩いて、振り返る。誰も追いかけてはこなかった。エミルはほっとして、目の前に現れた石段を駆け降りる。降りてから、湖の底にこんなものがあるの

はどうしてだろう、と不思議に思った。
思いがけないことに、リヒターは待っていた。
「あ、あの、リヒターさん！」
青年はちらりとエミルに視線を送ると、
「――行くぞ」
と、素っ気無く言う。
「え？」
「一緒に来るんじゃないのか」
「は……はい！」
「俺の足を引っぱるなよ。自分の身は自分で守れ。――フォローぐらいはしてやる」
「はい!!」
エミルはうれしくなって、大声で返事をした。そして、反響する自分の声に驚いた。
（……それにしても、誰がこんなものを造ったんだろうな――）
ひんやりした通路のところどころにある水晶柱が発光しているおかげで、エミルはリヒターの背中を見失わずにすんでいる。洞窟は、遺跡のようにも見えるのだった。
「あのう……リヒターさんって、その……どうしてマルタを捜してるんですか」
少し歩くと、歩調が合った。エミルは思い切って訊ねてみた。
「それはおまえが生きるのに必要な情報なのか？」

リヒターは眼鏡を直しながら、わざわざ足を止めて聞き返す。
「え……あ……、そんな大層なことじゃなくて……」
「ただの好奇心なら、答えるつもりはない」
ぴしゃりと言われると、エミルはそれ以上しつこくすることなどできそうになかった。
「……すみません」
「必要以上に謝るな」
「……あ」
またやっちゃった、とエミルは身を縮める。
その様子を見ていたリヒターは腕組みをし、ほんの少し口調を和らげた。
「……俺は人間に対して高圧的過ぎるとよく言われる。あいにくと直す気はないが、別におまえに悪意がある訳じゃない」
「……あ、ありがとうございます！」
直立不動でエミルは声を張った。
「別に礼を言われることでもない」
「あ……すみません……」
ふたたび少年の肩が落ちる。
「…………」
リヒターは、はーっとため息をつき、続きを口にする。

「気持ちは言葉にすれば軽くなる。しかし言葉にしなくては伝わらない。だから最低限のことしか言いたくない――それだけだ。こんなに説明させられたのは初めてだぞ」
それでもたいしてうんざりした風でもなく、彼は再び歩き出す。
(リヒターさんって、怖いのか優しいのかよくわからないや……)
エミルもまた、水晶柱の明かりに浮かぶ青年の背中を追いかけ始めた。

(あれは……!?)
急に目の前が開けたと思うと、正面に大きな扉が見えた。扉には見たこともない紋章のようなものが刻まれている。そのときだった。
「リヒターさま！」
あたりに高い声が響き渡った。残響がエミルの鼓動を速める。
「な……なんですか、今の……」
女の声みたいだった、とエミルは思った。
「魔物の鳴き声だろう。気にするな」
「き、気になりますよ……」
(魔物だって!? だって、いまの……リヒ、タ、ー、さ、ま、って……聞こえたよ？)

「……なら、ここで待て」
「え？　リヒターさんは……」
ひとり扉に近づきかけていたリヒターが横顔を見せる。
「中に魔物がいる。おそらく強敵だ。俺が仕留めるまでおまえはここで待っていろ」
「……だ……だけど……、ぼ、僕……」
「足手まといだ。ここにいろ」
強い口調で命令されると、それ以上自己主張することはできなかった。
「……は、はい……」
リヒターが手を触れると、紋章が光った。重たげな扉が音もなく開く。彼は中へ入って行った。
ひとり残されたエミルはため息をつく。これではアルバに逆らってここまで来た意味がない。いまここに魔物が出たら、どうすればいいのだろう。
「やっぱり僕……こういうの、向いてないよ……」
がっくりと肩を落とし、地面に膝をついたときだった。
「きゃあああああっ！」
悲鳴が聞こえた。先ほどの声とは違う。
「今の、マルタ……⁉」
エミルはあわてて立ち上がる。彼女ならここにいてもおかしくなかった。

「どうしよう……僕、どうしよう……」
——……危なくなったら、また……助けてくれる？
頬を染めたマルタの顔が浮かんだ。が、
「僕、あんな子知らない……」
エミルはそれを振り払うように首を振る。本当に、記憶にないのだ。
「知らないけど……、でも、やっぱりほっとけないよ」
扉に触れる手が震えていた。エミルは息をつめ、奥の間にするりと入り込む。そして
「あっ」と声を上げそうになった。
やはり、マルタはそこにいた。だが、あろうことかリヒターが彼女に剣を突きつけている。
「額のラタトスク・コアを渡してもらおう」
「……いや」
マルタが首を振る。
（ラタトスク・コア？　なんだろう）
「ならば、額に宿ったそのラタトスクごと消滅してもらう」
じりっ、とリヒターがマルタとの距離を縮める。そして剣を振り上げた。
「やめて……やめて下さいっ！」
自分でも気づかないうちに、エミルは地面を蹴っていた。だが、ようやく数歩進んだ

だけだ。
「リヒターさん、な、何やってるんですか？」
マルタがエミルを認めて、わずかに表情を変えた。
「……扉の向こうで待てと言った筈だが？」
うるさそうにリヒターが睨む。
「マルタを捜してるって……こんな……こんなことをするためだったんですか⁉」
「そうだ」
「どうして……！」
「こいつがラタトスクを……、魔王を目覚めさせようとしているからだ」
「ま、魔王？」
エミルはぽかんとした。そんなものは子供の絵本の中にしか存在しないはずだ。
「リヒターさん、何をそんなおとぎ話みたいな……」
「我ながらバカげた言葉だと思うがな」
皮肉っぽく唇を歪め、リヒターは続けた。
「魔王というのがいちばんふさわしいから仕方がない。ラタトスクが目覚めれば、世界は滅ぶ」
「違う、誤解だよ！」
マルタが叫んだ。

「ラタトスクは魔物の王様ってだけ。世界を滅ぼす魔王なんかじゃない！」
「言葉遊びに付き合うつもりはない」
剣を構えなおすリヒターを、エミルははらはらしながら見ていた。
(な、なんだかよくわからないけどこのままじゃ……！)
彼はとっさにリヒターに肩をぶつけた。
「うっ……」
脇腹を突かれてバランスを崩した青年は、よろよろと後ずさる。エミルはそのまま彼の前に立ちはだかった。
「何をする。エミル！　そこをどけ」
「……い、嫌です」
「どけっ！」
体勢を立て直したリヒターは、怒りをあらわにした。エミルの肩がびくりと震える。
(逃げちゃダメだ。ダメなんだ！)
「……ぼ、僕は人間です！　だから、じ、自分のことは自分で決めます！」
「エミル……」
リヒターに一瞬の隙ができた。マルタはくるりと背を向け、奥へ続く扉を開ける。
「エミル！　ありがとう！」
振り向いて言いながら、洞窟の奥へと敏捷(びんしょう)に走り出す。

「おまえを斬りたくはない。どけ！」
エミルは震える両腕を広げて通せんぼをしながら、必死でリヒターの顔を見上げた。
「僕……ふたりの話はよくわからないけど……でも、こんなのダメです！　ちゃんとお互い話し合って……」
「足を引っぱるなと言った筈だがな」
リヒターもエミルを見下ろし、視線ははずさぬままで、
「——アクア！　出てこい！」
と、呼ぶ。すると、今まで誰もいないと思っていた暗がりに、ぽうっと青いものが浮かんだ。
「は〜い、リヒターさま♡」
（うわっ！　ば、化け物!?　浮いてる……！）
長く垂らした青い髪、青白い肌。身につけている服は白く、ヒレのような耳には魚形のピアス。当たり前のようにそこに浮いており、足が地についていない。いや、人間のような足先そのものがないのだった。
リヒターは、アクアを見てがたがた震え出したエミルの方に顎をしゃくってみせると、
「そいつを足止めしろ。ただし……」
やりすぎるなよ、と付け加える。そして、そのままマルタを追って行ってしまった。
すぐにアクアはエミルの前までふわりと降りてきた。

「……ば、化け物!?」
「誰が化け物よ！　人間風情がバカにして！　アタシにはセンチュリオン・アクアって名前があるんだからね！」
センチュリオン・アクアはヒステリックに言いながら顔をしかめる。そして、さっと片手をあげた。
「さー、アタシの可愛いしもべちゃん。あの子を追い出しちゃって！」
「うわっ！」
空気が激しくかき回される気配に、エミルは悲鳴をあげる。いつの間にか目の前には、大きな亀に似た魔物がいた。
（センチュリオン・アクアのしもべって、一体――？）
「うわああっ！」
考える間もなく、エミルは扉の奥まではね飛ばされた。
「痛たたた……」
したたかにしりもちをついた彼は、あわてて起き上がるとマルタとリヒターを追いかけるため、ふらふらと歩き出す。が、一歩進むたびに背中や足が痛んだ。むろん、リヒターの姿はもう見えない。
「……な、何だよ、あれ！　あんな奴に邪魔されたら、リヒターさんに追いつけないよ……」

ぶつぶつ呟いていると、やがて次の扉が見えてきた。ずいぶん深いところまで来てしまったようだ。

エミルはあの化け物と魔物が先回りでもしていたら同じことだと思いながら、扉に手をかけた。

声が聞こえたのはそのときだった。

「……契りを結ぶのです」

「……えっ⁉」

今度は男の声に聞こえる。と、大きな四足の生き物がスーッとエミルの前に移動してきた。歩いているようにも見えるが、やはり浮揚(ふよう)している。全身が真っ黒だ。黒い、襟(えり)の詰まった燕尾服(えんびふく)を纏(まと)っているように見える。

「またしゃべる化け物……っ⁉」

化け物ではありません、と彼は鷹揚(おうよう)に否定した。

「私はセンチュリオン――センチュリオン・テネブラエです」

「センチュリオン……テネブラエ……」

「今のあなたでは、扉の向こうにいる魔物は倒せない。契りを結び『ラタトスクの騎士』となるのです」

賢そうな瞳を光らせて、センチュリオン・テネブラエは続ける。

「そうすればあなたはラタトスクさまの力を借り、戦うことができる」

「……な、何言ってるの？」
（ラタトスクって……魔王、じゃなくて魔物の王様……だっけ……？）
エミルはさっぱりわけがわからないといった顔で首を傾げた。
「説明している時間はありません。このままではマルタさまが危険だ」
「だけど……そんなこといきなり化け物……じゃないのか。えっと、センチュリオンに言われても……」
ウォォ――ン……！
ふいに、テネブラエが黒い喉を見せて遠吠えをした。
「その声……僕を呼んでいた声……？」
エミルはハッとする。
「マルタさまはあなたを捜していた。命の恩人であるあなたを。あなたは騎士として選ばれたのです」
「ぼ……僕が……？」
（命の恩人って……）
マルタも同じようなことを言っていたな、とエミルは思い出す。一度たりとも彼女を助けた覚えなどないのに、だ。
「さあ、契約を！」
テネブラエが、ツッとエミルに詰め寄った。

「……や、やっぱりそんな訳のわからないの、嫌だよ」
「ならば、あなただけの力であの魔物を倒すのですね」
扉にちらりと視線を走らせ、テネブラエはエミルに背を向けようとした。
「……そ、それは……」
長い尻尾が揶揄するように揺れている。
(どうしよう。マルタを助けるためには魔物を倒さないとダメだし、そのためには騎士にならなきゃいけないんだよね……。騎士って、なにをすればいいのか全然わからないけど…)
エミルは一度ぎゅっと目を閉じてから、黒ずくめのセンチュリオンに告げた。
「……け、契約するよ……」
「承知」
最初からこうなることはわかっていたのだという表情で、テネブラエは頷いた。

2

「汝（なんじ）エミルに命ず。内なる力を解放せよ」
まっすぐにエミルを見つめるセンチュリオン・テネブラエの黒い体が、怪しく輝き出した。
「目覚めよ、『魔を狩る人』！」
エミルはまぶしさに目を開けていられない。いや、まぶしいのではない。圧倒的な何かが入ってくる。
（うぅっ……）
光から自分を庇（かば）うように屈めた体の奥底で、なにかがゆっくりと起き上がる気配があった。
（……っ!?）
それは窮屈そうに体をくねらせると怒りにも似た声をあげ、一気に爆発する。
エミルは体をのけぞらせ、覚醒（それ）を受け止めた――。

(なんだろう、この感じ……)

エミルは手のひらから肩へと視線を上げて行き、自分が見覚えのない服に身を包んでいることに驚いた。

膝まである上着。剣の鞘を内包し固定されているヒップバッグは丸い。露な肩には長いマフラーが巻かれている。

(なんとなく色合いがテネブラエに似てるみたい……騎士の服、なのかな)

「ねえ……これって魔術か何か?」

くるぶしでがっちりホールドしてある代わりに踵のない靴を見下しながら、思わず訊ねたが、テネブラエは否定しなかった。

そのとき、センチュリオン・アクアがスーッと入って来た。魔物に飛ばされたエミルの様子を見に来たのだろう。彼女はテネブラエに気づくと、キッと眦を決した。

「陰険テネブラエ! 何であんたがここにいるのよ!」

(そういえば、アクアもテネブラエと同じセンチュリオンって……)

知り合いみたいだけど、とエミルは思った。

だが、テネブラエはアクアを無視したうえ、こう言った。

「さあ、エミル。行きますよ」

アクアはカッとなって叫んだ。

「何なのよ！　やるっての!?　後悔しても知らないわよっ！」

その瞬間だった。

エミルが眉間に皺を寄せ、ぎゅっと目を閉じる。

「……後悔するのは、そっちだろ？」

傲慢とすら思える、乱暴な、強い口調――。

開いた目は赤く輝いている。

もしここにリヒターがいたら、彼が手に入れようと躍起になっているラタトスク・コアと同じ紋章を、その強い瞳の中に見ることができたろう。

「行くぞ！」

エミルは剣を抜き放ち、アクアが放った魔物――ヴォーテックス――に声をあげて襲いかかっていった。

女性の形をしたヴォーテックスは恐ろしい速さで回転しており、その形を水のように自由に変える。

エミルは剣を振るう腕に漲る力を、魔物に叩きつけた。

斬り払い、斬撃で痛めつける。

何故だろう。戦い方も知らなかったのに、いまは全く負ける気がしない。

「魔神剣！」

さらに強い力で斬りつけられた魔物は悲鳴をあげ、その形を大きく崩しながらトーチ

ソングを歌う。回復するとすぐに反撃に出たが、
「効かねえな！」
エミルは残酷な目つきで魔物をひと睨みすると、みごとなタイミングでとどめを刺した。
ヴォーテックスを倒したあと、エミルはそのまま、しばらくの間ぼう然としていた。
今の動きは明らかに自分ではない。でも、自分なのだ。
「……な、何……今の……」
エミルは、信じられないという表情で首を振った。
「ラタトスクさまの力があなたに憑依したのです」
テネブラエは事も無げに言う。
「……なんか、僕じゃないみたい……」
「ラタトスクさまの力ですから」
「わかったようなわからないような……」
体に満ち満ちていたあの力はどうだろう。恐れも迷いもない、とてつもなく強い力。確かに自分なのに、はるかに限界を超えた戦いをしていた。戦っているときの気持ちそのものが、自分ではないようだった。
「ところでアクアはどうしちゃったの？」
緑の瞳をアクアに向け、エミルは訊ねた。彼女は地面にぐったりと横たわり、まった

く動かなくなっていた。
「僕、アクアには何もしてないよ」
「センチュリオンは自分では戦いません。配下の魔物を操ります。魔物が倒れればセンチュリオンも力をそがれる。今は気を失っているだけでしょう」
「そう、よかった……。無事ならいいんだ」
命に別状はないと聞かされて、エミルはほっとした。
「さあ、エミル。マルタさまを追いかけましょう！」
テネブラエに促され、扉に駆け寄る。だが、手を触れてもびくともしない。
「あ……開かないよ……？」
「おそらくリヒターが閉じたのでしょう」
「そんな！　ど、どうしよう……」
こうしている間にも、マルタに危険が迫っているかもしれない。だが、テネブラエは冷静だった。
「……風を感じます。わずかに鼻を持ち上げるようにすると、まだどこかに通路がありそうです」
とエミルに告げる。
「ソーサラーリングの力を使って壁を調べてみてはどうでしょう。契約の証にラタトスクさまから与えられた、魔術の力が込められたリングです。ほら、あなたの指に」
「ホントだ!?」

いつの間にか指輪(リング)がはまっていることに、エミルは驚いた。
「だ、だけど、僕は人間だよ。魔術はエルフとかハーフエルフじゃないと……」
リングをためつすがめつしながら首を傾げると、
「大丈夫。それは人間でも使えますから」
あっさり言われてしまう。
「そ、そうなの？　一応……やってみるけど不安だな……」
エミルはおそるおそる部屋のあちこちにリングを向けてみた。すると、堅牢(けんろう)そのものに見えていた壁が一面だけ、するすると動く。
「壁が開いた⁉」
エミルが振り返ると、
「ここから先に進めるかもしれません。行ってみましょう」
と、テネブラエが再び促した。
「う、うん……」
（こっちはもっと暗いよ……）
エミルは壁の奥に続いている暗がりへ、怖々足を踏み入れた。
「あの……僕の服のことなんだけど……」
黙っていると恐怖に飲み込まれてしまいそうだった。エミルはなんとか話題をみつけると、テネブラエに話しかける。

「本当に魔術……」
「ああ、それはソーサラーリングと同じ、ラタトスクさまからの契約の証です」
「あ……そう、なんだ……」
それきりふっと会話が途絶える。

しばらくして突然、テネブラエが叫んだ。
「ああ、あれはウルフ！」
エミルはぎくっとして暗闇を透かし見る。たしかに魔物が一体、こちらに向かって目を光らせていた。
「ちょうどいい。契約を行いましょう」
「け、契約……？」
あんな怖いものと、とエミルは眉を寄せた。テネブラエはウルフから距離を置いたまま、
「あなたのラタトスクの騎士としての力はラタトスクさまから貸し与えられたもの。ただ、ラタトスクさまは今眠りについておられます。そのために、現段階ではあなたに与えられている力もごく弱いものです」
と言った。
「これで弱いの……？　信じられない」

さきほどの力を思い出して、エミルは首を振る。
「もともと私たちセンチュリオンは、ラタトスクさまと繋がっています。センチュリオンが力を取り戻せば、ラタトスクさまも力を取り戻すのです。それが魔物との契約になります」
要するに、魔物と契約すれば強くなるってことか、とエミルは理解した。
「でも、契約ってどうするの？」
「こうします」
言うなり、テネブラエは暗がりにいるウルフにドンと体当たりした。
ガルルルル……！
「な、なんてことするんだよ！　ほら、ウルフがすっごく怒ってるよ……」
エミルはすっかり慌ててしまう。
肉厚の舌を垂らし、低く唸りながら魔物はこちらに近づいてきた。
テネブラエは、
「契約を結ぶためには、相手より強いことを証明しなくてはいけません。ほら、来ますよ！」
と、どこか楽しそうに言うと、エミルの背中を鼻で押す。
「ええ～!?」
（い、嫌だよ……怖いよ！）

すっかり腰が引けている少年は、ぎくしゃくと魔物の前に立つ羽目になった。
しかし、ウルフを正面から見た瞬間、
「ほら、来いよ！」
ラタトスクの力がエミルを変える。
はじめは雄々しく吼えていたウルフも、何度も斬りつけられるうち、子犬のような声をあげて弱ってゆく。その体を地面に横たえるまでに、いくらも時間はかからなかった。
エミルが闇の中に左手をかざすと、ウルフを中心に置いた円陣が現れる。契約完了だった。
「うまくいきましたね、エミル」
「あ……僕……」
自分が魔物と契約したなどとはとても信じられない。
「さあ、行きましょう」
「あ、ああ、そうだったね」
エミルはあわてて歩き出した。
どうやらそこは隠し通路だったらしい。ふたりはすぐに次の部屋に出ることができた。
とたんに血の臭いがプンとエミルの鼻をつく。部屋の中ほどで苦しんでいるのは、リヒターだった。
「リヒターさん！」

エミルは駆け寄り、血まみれの青年を助け起こそうとする。が、重くて動かすことができない。
「……うぅ……」
「リヒターさん、しっかりしてください！　いったい何が……」
地面に突き刺した剣にすがり、ようやく上半身を起こすと、苦しそうにリヒターが呻いた。
「……油断……した……。……イド……が……」
「……え？」
「ロイド・アーヴィング……が……」
「ロイド？　ロイドって……あの再生の神子のしもべの!?」
エミルはハッとし、一体どういうことなのだろうとリヒターの口元を見つめる。だが青年は、
「……奴が……コアを……」
と言いかけたきり、倒れ伏した。
「リヒターさん！」
「……大丈夫。急所は外れています」
テネブラエが言う。
「リヒターさん、助かるんだね」

「ええ。放っておいても大丈夫でしょう。それよりマルタさまを追いかけなくては」
それを聞いて、エミルは首を振った。
「放っておいてもって……そんな訳にいかないよ！　せめて人を呼んで……」
リヒターがここにいる以上、マルタは無事なのではないか。だがテネブラエは、
「いけません」
と、言った。
「ロイドが現れた以上、一刻の猶予(ゆうよ)もないのです。こちらもマルタさまの命がかかっています」
(どういうこと？)
エミルが黙っていると、テネブラエはあきれたように、
「大体、この男は敵です。あなたはマルタさまを守るためにここに来たのではないのですか？」
と、訊ねた。
「そうだけど……。やっぱりこのままにはできないよ。リヒターさんは、口は悪いけどぼくのこと助けてくれた……。僕も見捨てる訳にはいかないよ」
今度はエミルも譲らない。
「テネブラエは先にマルタを追いかけて。必ず僕も行くから！」
「……後悔なさると思うのですが、仕方ありません。では、私はこれで」

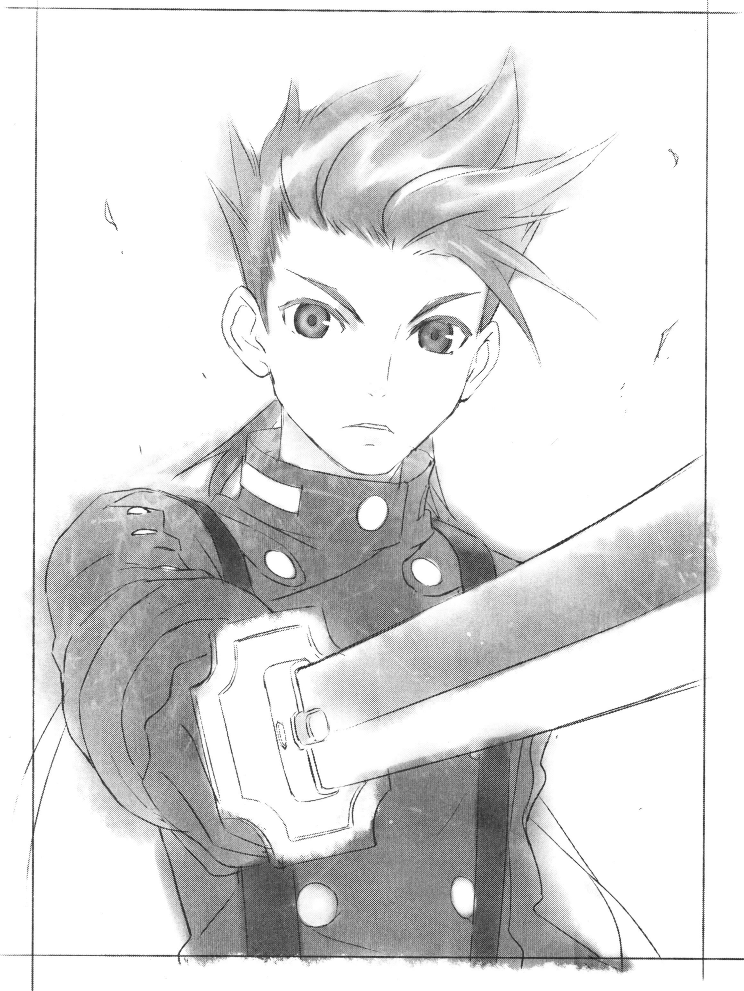
押し問答をしている時間はないと判断したのだろう。テネブラエはエミルを残して奥へ消えて行った。
「待っててくださいね、リヒターさん」
エミルは隠し通路に走りこもうとし、それから思い直して扉に触れてみる。案の定、こちら側からは難なく開くことができた。
部屋に飛び込んだとたん、ようやく回復したらしいアクアと鉢合わせする。
「……あ、アンタ！」
アクアは驚き、それからにやりとした。
「アクア！　ちょうどいいや！　今すぐ僕と一緒に来て！」
「せっかく戻ってきたアンタをみすみす行かせると思う？」
三たび魔物を呼ぼうとしているアクアを手で押さえる仕草をし、エミルは大あわてで説明する。
「そんな場合じゃないよ！　リヒターさんが、大怪我を負ったんだ。ロイドにやられて……」
「何ですって⁉　あのロイドが……」
アクアの青白い肌が、さらに青くなったように見えた。
「急所は外れてるらしいけど心配なんだ。早く助けてあげて！」
「アンタ、それをアタシに伝えるために？」

アクアは意外そうにエミルの頭のてっぺんからブーツの先までじろじろ見ていたが、
「……ふ～ん。アンタ、ちょっとカッコイイじゃない。リヒターさまの一億分の一ぐらいだけど」
と、薄く笑った。
（一億分の一？　……それってほとんど無いに等しいんじゃ……）
「……と、とにかく来て！」
エミルはアクアを手招きながら、隠し通路へと走り出した。
リヒターが倒れている部屋に飛び込むなり、
「リヒターさま！」
アクアは青年の体を調べ始めた。
「アクア、どう？　リヒターさんは……」
「大丈夫」
ほうっ、とアクアは息をつく。
「背中から一太刀浴びてるけど、倒れた原因はこれじゃなくて二年前の古傷のせいだから……」
「古傷？」
「アンタが敵じゃなければ、話してあげるけどね。とにかく、リヒターさまのことは任せて」

センチュリオン・アクアは軽々とリヒターを抱き上げると、暗がりへ消えて行った。
なかなか彼を抱き起こすことすらできなかった自分に、エミルは落ち込みそうになったが、すぐにそんなことを考えている場合ではないと思い直す。
「……よし。あとはマルタだ。ロイドのことも心配だし、急がないと！」

足元に輝く譜陣を敷いた祭壇からこぼれる光が、あたりを白く照らし出している。祭壇の奥では、宝石がゆっくりと眠っていた。
扉から走りこんだエミルは、そこで戦っているマルタから視線を移して「あっ」と声をあげた。
「……ロイド……。ロイド・アーヴィング!!」
相手があのロイド・アーヴィングだったからだ。リヒターを斬ったあとでここへ来て、マルタに出くわしたのだろう。
（ロイド……！）
いまさらながらに、ルインの銅像はよく似ている、とエミルは感じる。
マルタが跳んだ。すかさずロイドのブーツも床を蹴る。空中でスピナーと刃を合わせた両刀は、硬い音を響かせた。

マルタに続いて着地したロイドは、やっとエミルに気づいたようだった。
「誰だ？」
両刀を構えたままのロイドが視線を送る。エミルの中で、毎日あの銅像を見上げながら抱いてきたやりきれなさと怒りが、一気に甦った。
「……どうして殺したの」
掠れたその声に、
「エミル⁉」
マルタもようやく彼に気づく。
「お父さんとお母さんを……パルマコスタのみんなを……どうして殺したの‼」
エミルはキッと顔を上げた。
「え……」
マルタが口元を押さえる。が、ロイドは、ふっと息をついた。
「……また……パルマコスタ、か」
「またとは何だ！」
エミルは喚きながら剣を抜いた。
「僕はあなたを……あなたを絶対に許さないっ‼」
ロイドの剣が煌く――。



カツ、カツ――。
ブーツの音が響く。
赤い服の青年は祭壇に近づくと、腕を伸ばして白く輝く宝石をとった。
そしてそのまま出て行く。

足音が遠くなった――。

「……う……ん……」
エミルは身じろぎし、ハッと気づいた。
「……生きてる」
あわてて起き上がると、その場に座り込んでいたマルタも髪を直しながら力なく言った。
「とどめを刺されずにすんだみたい……」
そうだった、とエミルは思い出す。マルタとふたりでロイドに向かって行ったのに、まるで歯がたたなかったのだ。
そのとき、祭壇の様子を見に行ったテネブラエが、声を上げる。
「マルタさま！　ルーメンのセンチュリオン・コアが……」
弾かれたように立ち上がったマルタも、

「……ない！」
悲痛な声で叫んだ。
「ルーメンのセンチュリオン・コア……って」
からっぽの祭壇に目をやりながら、
「もしかして、ロイドが持ってったあの白い宝石のこと？」
と、エミルはふたりに訊ねた。意識は朦朧としていたが、ロイドが宝石を手にして出て行ったのを、彼は確かに見ていた。
「ロイドが持っていった⁉　ホント⁉」
「う……うん……。大事な物だったの？」
はい、と応えたのはテネブラエだった。
「ルーメンのセンチュリオン・コアは私たちの旅の重要な目的のひとつです。マルタさま、追いかけましょう」
「……その前に」
マルタは、こほんと咳払いをすると、
「ありがとう、エミル。また、助けに来てくれて嬉しい」
と、潤んだ瞳でエミルを見つめた。
「う、ううん。僕……結局役には立てなかったみたい……」
「そんなことないよ」

マルタはぶんぶんと首を振って、
「それに、私を助けるためにラタトスクの騎士になってくれたんでしょ？　私、そうなってくれたらいいなって、ずっと思ってた！」
胸の前で指を組むと、まっすぐにエミルを見上げる。
「キミに初めて会ったあの時から……」
「……え？」
いいの、とマルタはもじもじしながら頬を染めた。
「エミルにとっては大したことじゃなかったみたいだけど……私、あの時、キミが助けてくれたこと、本当に感謝してるんだ」
「あ……あの……」
またその話か、とエミルは困ってしまう。本当に何も覚えていないのだ。
だが、テネブラエに再び促されると、
「マルタさま、急ぎましょう」
「あ、そうだね」
彼女はあっさりと素に戻った。
「エミル、ここを出るまでもう少し私たちに協力してくれる？」
「う……うん……」
（マルタって変わってる子だなぁ……）

やれやれと思いながら、エミルはマルタたちと一緒に祭壇に背を向ける。
「……おかしい。扉が外から閉ざされているようです」
テネブラエが言うなり、マルタは地団太を踏みかねない勢いで、
「ホント!? やられた！　ロイドの仕業だ。きっと私たちを閉じ込めるために細工したんだよ。むかつく！」
と、まくしたてた。
センチュリオンはなにか言いたげにエミルと一瞬視線を合わせたが、すぐに鼻先を持ち上げる。
「……マルタさま。風を感じます。他にも出口があるはずです」
「ちょっと待って」
エミルは先ほどと同じようにソーサラーリングを使い、隠し通路を見つけた。
「開いた！」
「ラッキー！　これでロイドを捜せるね」
するすると動く壁に、マルタがうれしそうに笑う。
「……ただ、ルーメンの気配がほとんど感じられません。もう追いつけないかもしれませんね」
「そんなぁ……」
テネブラエの言葉に、彼女は肩を落とした。エミルは、くるくると変わるマルタの表

情を見ていたが、
「ねぇ、ルーメンのセンチュリオン・コアって、こんな風に取り合いするほど大事なの？」
と、訊ねてみる。
「そうか。唐突でびっくりだよね」
マルタは頷き、通路を歩きながら話し始めた。
「簡単に言うと、センチュリオン・コアは、ここにいるテネブラエみたいなセンチュリオンたちの卵なの。ルーメンのコアは、センチュリオン・ルーメンの卵ってこと」
「コアの状態は、センチュリオンの冬眠状態といっても差し支えありません」
テネブラエが補足する。
「でね、私の額にあるコアは、ラタトスク・コアっていって……」
「ま、魔王の卵……!?」
前髪を上げて見せたマルタから、エミルが後ずさる。
「魔王じゃないってば！」
マルタは頬を膨らませた。

隠し通路の先に光が見え始める。ほどなくエミルたちは地上に出ることができた。緑の草が生い茂り、日当たりのいい場所には花が咲いている。小鳥のさえずりさえ聞こえてくる。

「えっと……ここは？」

「なるほどね」

まぶしそうに目を細め、きょろきょろとあたりを見回すエミルとは対照的に、マルタはひとり頷いている。

「ここは、ロイドたちが世界再生で立ち寄ったマナの守護塔があった場所だよ」

（これが、マナの守護塔……）

確かに塔の跡ようなものは見えるが、ほとんど瓦礫に埋もれてしまっている。その瓦礫にも苔が生しており、元の姿を想像することもできない。

「……ってことは、ここはマーテル教会の史跡なんだね」

エミルが言うとマルタは、

「うん、そう。あちこちに隠し通路があるのも、ロイドが現れたのも、納得」

と、肩をすくめた。

「……そうか。マーテル教会にいるっていうロイドの仲間が手引きしたのか」

「多分ね」

瓦礫の上に浮かび、全方向を調べていたテネブラエが戻って来た。

「ルーメンの気配を感じられません。残念ですが、ロイドはどこかに逃げおおせたようですね」
「……仕方ないね。エミルのこともあるし、ひとまずルインに戻ろうよ。エミルもそれでいい？」
「う、うん……」
ルインと聞いて、エミルの表情は曇った。アルバに「折檻してやる」と言われたのを思い出したのだった。
(叔父さんも叔母さんも、怒ってるだろうな……帰ったら、どんな目に遭わされるんだろう)
エミルの足どりが重いのを、マルタは疲労のせいだとカン違いしたようだった。
「ねぇ、ここら辺で休憩にしない？」
いくらも歩かないうちに、エミルを気遣う。
そうだね、とエミルはほっとした。
涼しげな木陰に手頃な石を見つけて腰を降ろしたマルタから、エミルは少し距離をとって草地に座る。
「できれば、さっきの話の続きを……。僕、何が起きてるのか知りたいよ」
「わかりました」
しっぽを揺らしながら、テネブラエがエミルに向き合った。

「エミルは、神子コレットによる再生以前の世界について知識はありますか？」
「よく知らないんだけど……」
正直に告げる。そういえば、学校でもあまり昔のことは習った記憶がない。
「では手短に説明しておきますが。遙か昔、この世界を支える大樹が枯れ、世界に滅亡の危機が訪れたのです――。そこで女神マーテルと勇者ミトスが世界を二つに分けることで滅亡を阻止していました。そして新しい世界を支える世界樹が芽を出したため、再生の神子コレットが世界を再生し、ひとつに戻したのです。これが世界再生のあらましですね」
ここまで淀みなく話しきると、センチュリオン・テネブラエはやっと本題に入れるといった表情で、続けた。
「世界がふたつに分けられていた間、ラタトスクさまもコア化して眠りについておられたのです」
「それが私の額にあるこれ――ラタトスク・コア」
「魔王ラタトスクの卵……じゃ、ないんだったよね」
マルタにふたたび睨まれて、エミルは頭を掻いた。
「魔王ではありません。古(いにしえ)の大樹の精霊であり、魔物の王です」
「ラタトスクを目覚めさせるためには、そのしもべであるセンチュリオンたちを全員目覚めさせなきゃ駄目なんだって。だからセンチュリオン・コアを探して孵化(ふか)させる旅を

してるの」
なるほど、とエミルは納得しかけたが、ふと疑問が浮かんだ。
「ラタトスクが眠ったままだと問題があるの？」
それはね、とマルタが答える。
「自然界がバランスを崩して世界が滅びちゃうかもしれないんだって。ルインのシノア湖が涸れてるのなんかもラタトスクが眠ってるせいなんだよ」
「へえ。あの湖も……」
「ラタトスクの監視が消えて、センチュリオンはほとんど配下の魔物と縁が切れちゃったんだって。それで魔物が暴走して、マナのバランスを壊してるらしいんだ」
湖にも魔物がいたよな、とエミルは思い出す。ほんの少し前のことなのに、洞窟を抜けてきた今となっては、ずいぶん遠い記憶のような気がした。
「センチュリオンはラタトスクさまが眠っている間も、魔物と縁を結び、秩序を保つべきなのです」
テネブラエが口を開いた。
「なのに水のセンチュリオン・アクアはリヒターに味方して、職務を放棄している。ですから、水の災害は一向に収まらないのです」
嘆かわしい、とテネブラエはやけに威圧感のあるため息をついてみせる。アクアとはよほど相性が悪いらしい。

「その話が本当なら、争う必要ないじゃない……」
エミルが言うと、「いやいや」とテネブラエは眉をひそめた。
「ラタトスクさまのお力は強大です。センチュリオン・コアもラタトスク・コアほどではありませんが強大な力を秘めています」
「……馬鹿げた願い事を持ってる奴ほど、馬鹿な願いを叶えようとして、コアを集めてるんだよ」
マルタが桜色の唇を尖らせる。
「ロイドやリヒターもそういった輩(やから)です。マルタさまはリヒターたちからラタトスク・コアを奪ってくださいました」
「そしたら、なんだか知らない間におでこにコアがくっついちゃって。正直、困ってもいるんだけどね」
えへへ、とマルタは笑って見せた。
きっちりと区切りをつけるようにテネブラエが問う。
「ひと通り、わかりましたか？」
「う……うん……何となく……」
曖昧にエミルは頷きかけ、
(でも、リヒターさんがそんな人だなんて僕……信じられないよ……)
と、密かに思う。

それからエミルたちは瓦礫の山を迂回して、ルインの街まで歩いた。
（アクア、ちゃんとリヒターさんの治療をしてくれたかなあ）
エミルは、ときおりうっとりと彼の横顔に見とれているマルタに応えることもせず、血にまみれていたリヒターの姿を思い出していた。
街の入り口が見えるところまで来ると、エミルの目は無意識に叔父の姿を捜していた。自警団の男たちはいたが、幸い、アルバの姿はない。
「私の姿は街の中だと騒ぎを起こしかねませんので、姿を消します」
テネブラエが言う。
「そ、そうだ！　まさかテネブラエも他の魔物と一緒に街の自警団の人たちを襲ったの？」
エミルが思いついて訊ねると、
「失敬な」
センチュリオンは即座に否定した。
「誤解ですよ。あれはルーメンのコアに引き寄せられた魔物たちの仕業です。センチュリオンはコアの状態だと力の制御ができません。コアの状態では、マナのバランスを乱し、自然を狂わせる。それどころか、魔物を呼び寄せたり人を狂わせることもあります」
うんうん、とマルタが頷く。

「その意味でもロイドとかリヒターたちにコアを渡したくないんだ」
「そうか……センチュリオン・コアってやっかいだね」
エミルが言うと、
「失敬ですね」
テネブラエはもう一度言い捨て、消えた。

ルインの街まで戻ると、エミルはそっとあたりを見回した。特に変わった様子はない。叔父が待ち構えていても不思議はなかったからだ。
ほっとしている彼に、マルタが遠慮がちに訊ねる。
「ねえ、エミルってこの街に住んでるんだよね？」
「え？」
「……洞窟で、ロイドにお父さんとお母さんのこと、言ってたでしょ？」
「……ああ、そうだね……。前はパルマコスタだったけど……今は叔父さんの家にいるんだ。叔母さんが、お母さんの妹なんだよ」
「そうなんだ……」
（私を助けてくれたのは、パルマコスタだったもんね。親戚を頼ってこの街に来たん

だ)

マルタは納得する。

「でも、だったら安心した。さてと……とりあえず、おうちまで連れてってよ」

エミルはドキリとする。あのふたりにマルタを紹介することなど、できるわけがない。

(困ったな……家に来るって言い出すなんて、思ってもみなかったよ)

「……あ……う、ううん。リヒターさんのことを町長さんに報告しないと」

とっさにそう言ったが、あながちウソでもない。あの町長のことだ。エミルを心配してくれているに違いなかった。

「そうなの？　オーケー、わかった。ロイドの話も聞けるかもだし、さっそく行こう」

何の疑いも抱かず、マルタは長い髪を揺らしながらきびきび歩き出す。

「……う、うん」

あわてて後を追いかけ、エミルは思った。

(……おばさんたちに怒られてる姿、マルタには見られたくないよ)

その考えが、諦めきった毎日から旅立つ一歩だと、彼はまだ自覚しているわけではなかった。

「捜しましたぞ、マルタさま！」
突然、町長の家の陰から七、八人ほどの男たちが現れ、ふたりを取り囲んだ。彼らの制服はもうすっかり見慣れたものだ。
（ヴァ、ヴァンガード!?　なんで？）
エミルは驚いてとなりにいるマルタの横顔を見た。彼女が、
「……ホーク……」
戦闘服に身を包んだリーダーらしき男に向かい、名前をつぶやくのを聞いて、
「……誰？　知り合い？」
と、訊ねる。
逆立つ髪の下に伸びる面長な顔、尖った顎の先に少しばかりの髭(ひげ)を蓄(たくわ)えたホークという男は、マルタに向かって言った。
「ブルート総帥(そうすい)は、ラタトスク・コアを返せばあなたを許し、再びヴァンガードに迎えると仰せです」
「マルタがヴァンガードのメンバー!?」
エミルはひどく驚いた。
（それに……、マルタのことマルタさまって、呼んだよね？）

ヴァンガードの一員であるだけでなく、かなりの地位に就いているのだとしたら……。
彼女がラタトスク・コアを持ち出した話はテネブラエから聞いたが、ヴァンガード絡みならややこしい話だぞ、とエミルは思う。
マルタはまっすぐにホークを睨みつけていた。
「……ブルート総帥に伝えて。あなたが――あなたたちがやったこと、忘れたとは言わせないって」
「何のことですかな？」
ホークは眉を下げ、首を傾げてみせる。
「そうやってとぼけてれば？　でも、ラタトスク・コアは渡さない」
それを聞くやいなや、ホークの目が一気に吊り上がった。
「ならば容赦は致しませんぞ。同志たちよ、マルタさまを捕まえよ！」
「はっ！」
兵士たちがマルタに向き直る。
そのとき、テネブラエがさっと姿を現した。
「マルタさま、エミル！　ここを離れましょう！」
「だね。エミル、行こう！」
「え……ええ⁉」
マルタがスピナーを構えた手で「あっち」と指し示す。が、ヴァンガード兵に行く手

を阻まれ、エミルは進むことができない。
「ほら、エミル！」
マルタに腕を引っぱられ、ようやくヴァンガードの輪を突破する。
(な、なんで僕までこんなことになってるんだよぉ……!?)
「な、何者なの、あのホークって!?」
走りながら剣を抜く。
「え？　師団長だよ！」
マルタが叫んだ。
ホーク師団長は一体どれだけの兵を街に配備したんだろう、とエミルは恐ろしくなった。払いのければのけるほど、数が増えていくような気がするのだ。
(ダメだ。このままじゃ……)
だが、できればここで戦いたくはない。ラタトスクの力を纏ったところを知り合いに見られたくない、とエミルは思った。
エミルたちはじりじりと噴水広場へと追いつめられた。
兵士たちの先頭にはホークがいた。そのとき、彼に近づく大きな人影があったが、ホークは気づかない。
「さっさと捕まえろ！　行け……」
振り上げかけた腕が、だらんと下がった。

「な……なに……!?」

目を見開き、肩口を押さえて振り返ると、そこには甲冑(かっちゅう)を身に纏った大男が立っていた。男は手にしている巨大な槍で、ホークを背後から突いたらしい。

「ホーク!?」

マルタが叫ぶ。だが、そのときすでにヴァンガードを広場に閉じ込めるように押し寄せてきた男たちが、兵士に襲いかかっていた。奇襲を受けた兵士はバタバタと倒れて行く。

「……あんたたちはマーテル教会の！」

マルタの声に、大男が一歩前に出た。

「マーテル教会が騎士団、団長のマーグナーです」

(マーテル教会騎士団だって!?　いったいどうなっちゃってるんだよ)

エミルの頭はますます混乱する。

「ロイドさまの命により、魔王ラタトスクとセンチュリオンのコアをいただきましょう！」

「どいつもこいつも……」

マルタは唇を嚙んだ。

「おとなしく渡せばきみたちの身の安全は保障します。――ですが、断ればこの街はパルマコスタと同じ末路をたどる」

マーグナーはがっちりした体軀に見合ったダミ声で言った。
「パルマコスタと同じって……どういうこと……」
「おや、少年」
エミルが思わず漏らしたつぶやきに、彼は揶揄する口調になる。
「きみは知らないのですか？　愚かにもヴァンガードの屑どもは我がマーテル教会と神子さまを消滅せんとラタトスク・コアを使っての反乱を企てた」
「……」
エミルの肩が震えた。マルタがうつむく。
「ロイドは、ラタトスク・コアの強奪と反乱制圧の名目で罪もないパルマコスタの人々を……」
「そんな……」
震える喉からしぼり出すように、エミルは叫んだ。
「そんなことのためにお母さんたちは……っ！」
緑の瞳にうっすら悔し涙が滲む。泣いたところで家族が帰ってくるわけではないが、それでも感情が抑え切れなくなりそうだ。そのとき、
「行け、我がしもべ！」
テネブラエが、契約した魔物を召喚した。
たちまち現れたウルフは、遠吠えをひとつすると仲間を呼ぶ。彼らは果敢に騎士団兵

に向かってゆく。
「今です、マルタさま！　エミル！　とりあえず街を出ましょう」
テネブラエの声に、ふたりはマーグナーたちの隙をついて走り出した。

ヴァンガードの残兵と騎士団兵たちに追いかけられながらも、なんとか街を抜け出した。マルタは、
「……どうしよう。このままじゃ、奴ら本当にこの街を……」
と、走りこんだまばらな雑木林の中から、気遣わしげに背後を振り返った。あのダミ声が広場の方角から響いてきたのは、そのときだった。
「愚かな未開の蛮族シルヴァラント人よ、聞きなさい！」
エミルたちはハッと振り返った。
「私は偉大なるマーテル騎士団のマーグナー団長です。我らはマーテル教会を悪の枢軸と罵り世界各地で反乱をそそのかす、悪辣なヴァンガードを捕らえるために来ました。──ですが罪深いことに、このルインはヴァンガードに協力している節があるとロイド

さまから報告を受けています」

「…………」

ふたりは無言で顔を見合わせる。と、

「そこで——ヴァンガード共々、この街を神子さまへの反逆罪で裁きます！　だがその前に、きみたちにチャンスをあげましょう」

マーグナーの声のトーンが変化した。

「この街に潜んでいるマルタという娘を差し出しなさい。そうすれば、ロイドさまも許してくださるやもしれません」

人々のざわめきが伝わってくる。エミルは意を決してマルタに向き合った。

「……マルタ。おでこのコアを渡して」

「……それは……無理」

マルタは、ふるふると首を振った。

「どうして！」

エミルはその態度にカッとなってしまう。

「そもそも、マルタたちヴァンガードが勝手に反乱なんて企てるから、パルマコスタはっ!!」

マルタの表情が悲しそうに歪んだ。あわててエミルは視線をそらし、彼女の機嫌をとるように続ける。

「……ご、ごめん。だけどこのままじゃルインはめちゃくちゃにされちゃう……」
　叔父の怒りで真っ赤になった顔が脳裏に浮かんだ。
「そしたら、街の人はみんな僕のせいだって言うよ。僕がマルタを連れてきたからって
……」
　ふうっ、とマルタがため息をつく。
「……エミルの言うとおりだよ。パルマコスタのことは本当にごめんなさい」
　と、踵を返しかけた。
「マルタ、どこへ……」
「……ラタトスク・コアを引き渡してくる。テネブラエも、ごめんね」
　エミルをじっと見つめる視線をセンチュリオンに滑らせる。
　淋しげに街の方へ戻ってゆく彼女を、だがエミルは止めることができない。止めれば結局自分が責められるのだ。
　テネブラエはそんなエミルの顔を見上げていたが、
「ラタトスクの騎士、エミル。あなたはマルタさまに死ねと言ったのですよ」
　と、冷ややかに告げる。
「え？」
「マルタさまの額にあるラタトスクさまのコアは、マルタさまの体を養分にしています。コアはラタトスクさまが目覚めるまでマルタさまから離れない。それをはがすには、マ

ルタさまが死ぬしかないのです」
「そんな！」
（じゃあ、はがそうとしたら死んじゃうじゃないか！）
「マルタはそれを……」
「ご存知です」
センチュリオンはあっさりと頷いてみせる。
「あの方は、この街とあなたのため——あなたの妙な自己保身のために死ぬおつもりなのです。あなたにはそれを知っておいてもらいたかった」
「……ぼ……僕……。マルタを止めてくる！」
いても立ってもいられなくなり、エミルは走り出そうとした。
「……街の人に非難されますよ」
「……それでも止める！」
強い口調で言うと、テネブラエは、
「では、私もお供します」
と、ついてきた。

噴水広場まで戻ると、マルタの姿を目にした街の人々がさっと道を開ける。
マーグナーはロイドの像を背にして、自信たっぷりな様子で立っていた。
「……来たよ。これで満足？」
上目遣いに睨みつけると、団長の唇の端が口ひげの下で持ち上がる。
（これで……、これでいいんだよね。エミル？）
マルタは彼にぶつけられた言葉を思い出していた。
――そもそも、マルタたちヴァンガードが勝手に反乱なんて企てるから、パルマコスタはっ!!
あのときの、憎しみに満ちたエミルほど悲しいものはなかった。自分のせいであんな風になってしまう彼を見るくらいなら死んだ方がいい、とマルタは本気で感じていた。
ラタトスク・コアさえなくなればきっと何もかも変わると思ったのだが、甘かったようだ。
「ラタトスク・コアとセンチュリオン・コアはどこですか」
マーグナーが訊ねる。
「センチュリオン・コアはないけど、ラタトスク・コアは、ここ」
グローブをはめた指で額をさす。

「そんなに欲しいなら首を落として持っていけば」
「ならば、後でそうさせてもらいます。捕らえなさい！」
騎士団兵がふたり、マルタをがっちりと地面に押さえつけた。
(死にたくない……っていうより、キミに会えなくなっちゃうのがつらいよ、エミル。でも、これでいいんだよね……)
ところが、マーグナーは意外な言葉を口にした。
「さぁ、もはやこの街に用はありません。天罰を与えてやりなさい！」
マルタはぎょっとして顔を上げる。
「話が違うよ！　約束は……」
「黙りなさい。ロイドさまの命令は絶対なのです！」
団長は自分たちを遠巻きにしている人々をゆっくりと睨(ね)めつけた。
「さあ、皆の者！　奪え！　殺せ！　マーテルさまの天罰を下せ！」
「はっ！」
いっせいに武器を構えた騎士団兵たちに、街のそこここから悲鳴が上がる。
無差別に斬り殺されて倒れる者、金目のものを強奪(ごうだつ)されたうえ家に火をかけられる者――逃げ惑う街の人々の顔は恐怖にひきつり、混乱を極めた。
エミルが街に駆け込んだときには、すでにあたりには死体の山ができていた。
「……や、やめてっ！」

広場を見渡せる階段の上まで来て、彼は叫ぶ。
(マルタ——!!　よかった、間に合っ……)
ロイドの像の前にマルタの姿を見つけ、ほっとした直後だった。次の瞬間、爆発が起きた。
「うわあああっ！」
鼓膜が破けそうな音と共にエミルは飛ばされ、階段を転げ落ちる。
(……っ！)
広場にうつ伏せになったまま、彼はしばらく動けないでいた。
遠くでマルタが叫んでいるのが聞こえる気がする——そして、聞こえなくなった。
(くそ……っ)
怒りが湧き上がる。エミルの中で何かが動いた。
「——やめろって言ってるのが………」
目を閉じたまま、エミルはゆっくりと立ち上がる。そして、
「わかんねぇのかよ、この屑どもがぁっ！」
カッと両眼を見開いた。
ラタトスクの紋章が刻まれた赤く燃える瞳で、彼はマルタを両脇から押さえつけていた兵士を蹴散らした。ひとりを踏みつけ、剣の鞘を払う。それをマーグナーに向かって突きつけると、

「天罰が下るのは誰だかよぉーく教えてやるよ！」
と、怒鳴った。
団長を護ろうと、騎士団兵がいっせいにかかってくる。エミルは少しの疲れも見せずに易々と彼らを退けてしまうと、とうとうひとりきりになったマーグナーを睨めつける。
が、先にマルタを助けることは忘れなかった。
「立てよ、マルタ」
「……エ……ミル……？」
差し出された左手につかまって立ち上がりながら、マルタはおそるおそるエミルの顔を見上げる。
ふだんの彼からはとても想像できない、あまりの変わりようにただ驚くばかりだった。
(こ、これがラタトスクの、騎士――？)
以前シノア湖の湖底で、雑魚の魔物相手に腰を抜かしていた彼に手を差し伸べたことがあった。あれからいくらもたっていないというのに、立場はすっかり逆転してしまった――いや、それ以上だ。
エミルはマルタに安全な場所で待つよう告げると、改めてマーグナーに向き直った。
マーグナーも少年の変わりように狼狽しているのか、傷痕のある額をびくびくと動かしながら、無言で槍を握りなおす。
「さあ……お仕置きの時間だ。せいぜいマーテルさまに祈るんだな――」

剣を下段に構えたエミルが、地を蹴った。
「楽に死ねますようにってよぉっ！」
最初の刃がマーグナーに届く前に、しもべが現れる。ウルフたちに囲まれたマーグナーに、エミルの魔神剣が襲いかかった。間髪を入れず、走り込んで来たマルタのスピナーが、男の槍と激しくぶつかり合う。
「ううぬっ！　マーテルさまに逆らう者には死を！」
マーグナーは、上背を活かした竜牙槍を繰り出したが、エミルはすでに男の頭上にいた。
「崩蹴脚っ！」
甲冑から無防備に晒されている太い首を、エミルは容赦なく蹴り降ろした。
「……ぐぅっ……」
よろよろと前のめりによろけたが、マーグナーはまだ倒れない。エミルは歯軋りをすると、さらに攻撃を重ねる。
「――これで終わりだぁっ！」
魔王地顎陣がゴウッと炎を噴き上げた。
「うおおおぉぉぉ――っ!!」
さすがの巨体も後ろに吹き飛ぶ。広場に置かれている石のベンチに背中から激突して、ようやく止まることができた。

「な……何なんですか、きみは……」
もたれかかったままの姿勢で男が呻くと、
「何なんだは、てめぇだよ……」
息ひとつ乱していないエミルが、マーグナーの分厚い胸にドンと足を乗せる。
「なあ？　天罰ってのを与えてみろよ。この俺さまによぉ！」
彼はものすごい勢いで男を殴り始めた。
「ぐ、ぐあ……」
「聞いてんのか？」
エミルの腕は止まるどころか、ますます力を増して行く。
「……ぁ、ぁぁ……」
強烈な殺気にぼう然としたマルタはただ眺めていたが、
(このままじゃこの人、死んじゃう！)
「エミル……。——エミル、やめてっ!!」
必死で叫んだ。
その瞬間、エミルはハッとする。現実が、もうひとつの現実と重なったような奇妙な感覚——。
「あ……」
おそるおそる振り返った緑の瞳は、真っ青になっているマルタと、その横に控えてい

るテネブラエを映した。
「ゲホッゲホッ……」
マーグナーが激しく咳き込む。
「――……ぼ、僕は……」
遠巻きに見ている街の人々の目にはっきりとした恐れを認めて、エミルは混乱した。
(いったいどうなっちゃったんだ!? どうして……!)
そのまま彼は駆け出した。
これまで彼を疫病神呼ばわりしていた人々が逃げてゆく。ことあるごとに絡んでは苛めてきたジダとモルの双子――彼らはその場に残っていたが――いつもとは違い、恐怖の表情を浮かべている。
何が起こっているのか、これからどうなってしまうのか――。
やがてショックのあまり立ち尽くすエミルの背後に、控えめな足音が聞こえた。
「……ヴァンガードもマーテル騎士団も街を出ていったよ」
マルタだった。
「……町長さんが話をしたいって。来てくれる?」
やけに静かなのはみんな出て行ったからなんだなとぼんやり思いながら、エミルは素直に頷いた。

再び町長の家の前まで来ると、アルバとフロルが立ち話をしているのに出くわした。
「……エミル……」
叔母はエミルの姿を見ると、顔色を失った。
「お、おばさん……僕……」
甥から妻を守るように、アルバがフロルの前に立った。
「近づくな！　化け物！」
びくりとしてエミルの足は止まってしまう。
「ひどい！」
マルタが抗議したが、「いいよ！」と彼はそれを遮った。
「……いいんだ」
(僕にはもう、帰るところがなくなっちゃったんだな……)
エミルは黙って町長の家の扉を押した。
「エミル。わざわざすまないな」

ルインの町長は、様子の変わったエミルに対して、できるだけ特別な視線を注がないようにしているみたいだった。

「おまえに頼みたいことがある」

いきなり用件を切り出した町長にむしろほっとしながら、

「……頼みごと、ですか？」

と、エミルは訊ねる。

「そうだ。ロイドさんを捜しにいってもらえないか？」

「……そ、それって……僕を街から追放するってことですか……？」

エミルは驚いて聞き返した。すぐに町長は首を振り、

「それは違う。私は今回の事が信じられないのだよ」

と、顔を曇らせる。

「私が知っていたロイドさんは、たとえ教会の命令でも、こんな略奪(りゃくだつ)や虐殺(ぎゃくさつ)を許すような人ではなかった」

「そんなの……」

エミルはつぶやく。

「パルマコスタでおまえが経験したという話も今までは信じられなかった。だが……同じことがこの街でも起こってしまった」

町長は窓の外を通る怪我人たちを横目で見ながら、

「私は、もう何を信じたらいいのかわからない」
と、悲しげに言う。
「人は簡単に変わってしまうんです……」
(僕、みたいに――)
「そうかもしれない」
町長は否定しなかった。
「……だからこそ、なぜ彼が変わってしまったのか……なぜラタトスクとセンチュリオンのコアを求めているのか、調べて欲しいのだ」
「そうすることで、怯えて殺気立っている街の人からエミルを守るつもりなんですね」
マルタが訊ねると、詫びの言葉を口にする。
「ふがいない町長ですまない、エミル。だが、今はそうすることがおまえのためだと思うのだよ」
(町長さんは僕にひどいことを言ったことがない……。この半年、いつでもふつうに接してくれたっけ)
エミルはほんの短い間考えていたが、「わかりました」と返事をした。どうせ戻る家などないのだ。
「僕、ロイドを捜します。そして――両親の仇を討ちます」
「……わかった。私ももう、それを止めまい」

仇討ちと聞いて、町長は吐息を漏らした。
「だがエミル。こんな街でもここは今のおまえの故郷だ。ほとぼりが冷めたら必ず戻ってきておくれ。——……これも、虫のいい話だがな」
「……ご迷惑をおかけしてすみませんでした」
「エミル……」
踵を返したエミルの背中に、町長が声をかける。
「……ルインを救ってくれて、ありがとう」
「……」
せめてもの言葉だとは思う。だが、エミルは振り返らなかった。

ひとりぼっちだ。エミルは思う。
みんなにあんな自分を見せてしまったのだ。マルタさえ顔面蒼白(がんめんそうはく)になっていた。
(それでもいいや。お父さんとお母さんが死んだとき、僕はひとりになったんだから)
街の人々をこれ以上怖がらせないよう、彼は目を伏せ、小走りに街の出口へ向かう。

「エミル、待って！」
「マルタ……」
振り向くと、息をはずませたマルタが手を振っていた。エミルは足を止め、まぶしいものを見るように目を細めた。
「私とテネブラエも一緒に行く」
「えっ？」
驚いて彼女の顔をまじまじと見つめてしまう。
「私たちの旅の目的は、センチュリオン・コアを見つけ出してラタトスクを目覚めさせること。つまり、ロイドとは敵同士ってこと」
マルタの言葉に、テネブラエも空中に姿を現した。
「私たちとあなたの旅は目的が同じです。ならば協力しあう方が得策なのでは？」
「……だ、だけど……僕……」
口ごもるエミルに、マルタはさらに言葉を重ねた。
「それにキミ、ラタトスクの騎士として契約してくれたでしょ？　ラタトスクは私にくっついているんだよ」
「……うん。それはわかってるけど」
「だったら私のこと守ってくれなくちゃ」
そういうことか、とエミルはテネブラエに視線を巡らせる。

「前にも言いましたよね。マルタさまはあなたを捜していた、と。マルタさまはパルマコスタで自分を助けてくれた少年――つまりあなたにラタトスクの騎士であって欲しいと望んだ」

「……」

「お願いします。エミル……」

センチュリオン・テネブラエはきちんと前足を揃えて懇願した。

マルタが街の方にちらりと視線を走らせる。

「エミルがこんなことになったのは私のせいでもあると思う。だから……ね、エミル。一緒に行こう」

「僕……マルタのこと……本当に覚えてないんだ……。それでもいいの？」

「いいの！　私が覚えてるから」

マルタはにっこりする。

「それにエミルってすごく勇気があるから頼りになりそうだもん」

「ぼ……僕に勇気……？　僕にはそんなもの……」

あわてて首を振る少年に、マルタは、

「ううん、あるある。だって、この街で再会してから何度も私を助けてくれた」

と決め付けるように言った。

「あれは全部、勇気だと思うよ。だから……仲間になって欲しいの。まずは友達から。

ね？」

（友達――！）

すっかり忘れていた。あれほど欲しいと願っていたもの――。

「――あ、私はむしろ友達以上でもいいんだけど……」

もじもじと照れるマルタの頬が薔薇色に染まる。

――勇気は夢を叶える魔法。

リヒターの声が甦った。

「……あの人の言った通りだ」

「えっ？」

マルタが首を傾げる。

「う、ううん。なんでもないよ」

少し先で待っていたテネブラエが、やれやれという顔で、

「ふたりとも。そろそろ行きましょう」

と、促した。

先のことはわからないが、出口がないような閉ざされた暮らしから解放されたことは事実だ。

「……うん。ふたりとも、これからよろしく！」

エミルは、背筋を伸ばして大きく息を吸い込む。空気の味まで違う気がした。

3

強い風に髪飾りを飛ばされそうになり、マルタは何度も髪を押さえた。
(もう、なんなの!?　これをなくすわけにはいかないんだけどなあ)
風は一方からだけ吹きつけるのではない。思わぬ方向から襲ってきて、その都度エミルたちを困らせた。両側を山に囲まれているのにもかかわらず、さえぎるもののない山頂にいるかのようだ。
アスカードの街の入り口にさしかかったとき、ビュウッと音をたて、エミルの前で土埃が舞い上がった。
「うわっ、すごい風……」
目をごしごしこするエミルの足が鈍った。
「ほらほら!　男なら、シャキッと歩く!」
マルタがそれを横目で見ながら追い越してゆく。
「男ならって言われても……」
(目にゴミが入ったら前が見えないよ)

涙で霞(かす)んだ目をぱちぱちやっていると、いつの間にか側に寄ってきていたテネブラエが、マルタに聞こえないように言う。

「エミル。ああ見えてマルタさまはあなたを頼っているのです。大変だとは思いますが、マルタさまの前では男らしく振る舞って下さい」

男らしく、とエミルは繰り返す。自分にはなんとも似つかわしくない言葉だ。

「……できるかなぁ……」

そのとき、マルタが振り返って叫んだ。

「もう！　ふたりとも何してるの？　ロイドが来なかったか聞くんでしょ？　早く調べに行こう」

叫ぶそばから言葉が風にちぎれてゆく。

「ロイドあるところにセンチュリオン・コア有り！　とにかく町長に、ロイドが来ないか聞いてみよう！　ね？」

「う、うん……」

マルタって本当に元気だなと思いながら、エミルは頷いた。

アスカードは山あいに作られた集落だった。

かつては観光でこのアスカードを訪れる者も多かったと聞いているが、世界再生以来の異常な風は、観光客どころか、街の人間すらほとんど歩けない土地にしてしまったのだろう。

みんな山肌に横穴を掘って造った家に閉じこもるか、比較的頑丈な公共の建物に集まって、風をやりすごしているに違いなかった。その家の壁もボロボロに傷んでいる。板を打ちつけて、そのまた上から修復を施（ほどこ）している家もあった。

「なんだか……淋しい街だね」

それぞれがおかしな角度で折れてしまっているまばらな木立を眺め、エミルがぽつりと言う。

(遺跡の街っていうから、もっと建物なんかも大事にされてて、落ち着いた感じかと思ったのに)

「おかしいな。前にパパと来たときは、こんな感じじゃなかったんだけど……」

(風車がちゃんと回ってて、人がたくさんいたのに)

首をかしげ、思わず漏らした言葉に、先を歩いていたエミルが振り返った。

「そういえばマルタ。聞いたことなかったけど、家族はどうしてるの？」

「……そ、それは……」

マルタは言い淀（いいよど）み、それから目を見開いて叫んだ。

「危ない！」

「うわっ⁉」
エミルの後ろで人影が動いたのだが、後ろ向きになっていた彼は気づくのが遅れ、肩をぶつけてしまったのだ。
青い絹のような髪を長く伸ばした、細身の青年だった。
「ご、ごめんなさい！」
あわてて謝ったが、
「……いや」
ぶつかられた青年は気がなさそうに言い、マルタの傍らをじっと見つめている。
「あ……あの……」
「……いや。おもしろい生き物を飼っているな」
(え⁉)
まさかと思ったとき、マルタが割り込んできた。
「もう、エミル！　何してるの！　ごめんなさい。大丈夫ですか？」
「マルタ……。この人が……」
エミルはあわてて青年のことを伝えようとしたが、
「――この街も変わってしまったな」
彼の言葉に気をとられた。
「え？」

「あの……。アスカードのご出身なんですか？」

マルタが訊ねた。この街の出なら、変わる前の街の様子をエミルに説明してもらえるかと思ったのだ。

「遠い昔の話だ。まだここがアスカードという名ではなかった頃のな……」

青年は、ふっとため息を漏らした。

「――すまない。ここは私の故郷であると同時に我が友との思い出の地でもある」

「……そうなんですか」

マルタは殺伐（さつばつ）とした街に目をやった。

「つい、感傷（かんしょう）にふけってしまった。失礼するとしよう」

青い髪を微かな風に揺らしながら、青年は歩み去った。エミルはその背中をじっと見つめていたが、

「あの人……テネブラエに気づいてた」

と口にした。

「うそ！　そんな人初めて……」

マルタにさえ、姿を消しているセンチュリオン・テネブラエは見ることができない。

第一、本当に〝アスカード〟の名がつく前からこの街を知っているのだとしたら、大変な長生きということになってしまう。エルフやハーフエルフでも寿命はせいぜい千年というところだ。

「からかわれたのかな……。だとしたら感じ悪い」
マルタはひとりでプンプンしている。
（確かにテネブラエを見てた……おもしろい生き物、って言ってたし）
何者なんだろう、とエミルは思った。

エミルたちはしばらく街の中を歩いてみたが、あれだけ強かった風が、意外にも街の中ではほとんど止んでしまっているのだった。
「……納得いかない」
閉ざされた民家の扉の前をうろうろしながら、マルタが言う。
「えっ、何が？」
「風が弱すぎない？　この程度の風で街がボロボロになるのかな」
彼女は腕を上げ、風を手のひらで受け止めながらしきりにぶつぶつ言っている。
「うーん、もっと風が強い日もあるとか……」
エミルが首をひねって考えていると、突然、ふたりの間を目に見えない何かが通り抜けた。それは山肌にぶつかり、一気に上昇して消える。
「今の、何？」
ふたりの耳には、聞きなれない魔物のような者の声が残っている。厚い雲に覆われた

空を見回していたエミルは、そこにいくつものつむじ風が生まれたのに気づいた。そこだけ穴が空いたように雲の上が覗け、稲光が閃いているのだ。

「マルタ、見て!!」

「えっ……?」

だが彼女は頤をあげることもできなかった。恐ろしい音をたて、激しい風がうねりながら吹きつける。身を屈めるのが精一杯だ。それでも足が浮き上がりそうになる。

「きゃあっ!」

ひときわ強い風に巻かれ、マルタの体がふわりと浮かんだ。すぐ向こうはちょっとした崖になっている。もし落ちたら、ただではすまないだろう。

「マルタ!」

「エミルーっ!」

エミルは風に逆らって走ると、ぎりぎりのところでマルタの右手を両手で掴まえた。それでもなおマルタの足は空に昇って行ってしまいそうだ。

エミルは渾身の力をこめて彼女を引っぱると、なんとか地面に下ろした。そして息を弾ませたまま、近くの家の軒下に避難した。

「ああ、びっくりした。ありがとう」

「危なかったね」

エミルは言い、まだ手をつないだままなのに気づくと、あわててふりほどく。

「ご、ごめん。……そ、それよりどこか安全なところに逃げよう」
そのとき、今までどこにいたのか、テネブラエが現れた。
「ここには壁画の間と呼ばれる洞窟のような場所があります。そこなら風を避けられるのでは」
「じゃあそこに行こうよ」
(見られたかな、いまの)
そそくさとエミルが行こうとすると、
「待って」
マルタに呼び止められた。彼女はもう一度エミルとしっかり手をつなぐと、
「この方が安心♡」
と歌うように語尾を上げ、幸せそうに頰を赤らめた。

壁画の間は、アスカード遺跡の一部だった。クレイオ三世より前の時代に描かれたとされる壁画を擁(よう)した洞窟は、かつては石舞台と並んで観光の目玉のひとつだったが、いまではすっかり閑散としている。見物客はほんの数人といったところだ。洞窟の入り口は高台にあるが、中まで風が吹き込まない分、損傷は少ないようだった。
「ここなら大丈夫かな」
洞窟のいちばん奥まで来て、あたりを見回しながらようやくマルタは息をついた。

壁画を保護するための柵に取りつけられた案内板には、この壁画が当時の人々の自然と一体になった暮らしを描いたものだと説明してある。
「う……うん……」
まだ手をつないだままだった。エミルはどこをどうやって歩いてきたのかもよく覚えていない。
「どうしたのエミル？　顔、真っ赤だよ」
「あの……手……」
やっとそれだけ言うと、マルタが悲しそうな瞳でじっと見つめる。
「……もう、離さなきゃ、だめ？」
「あの……その……」
すると、彼女の表情が緩んだ。
「ふふ、冗談だよ♡　ごめん」
マルタはあっけないほど簡単に手を離した。束の間、沈黙が流れる。
「あ……あの……どうして急に風が強くなったんだろうね」
気まずい空気を押しのけるように、エミルが言った。
「ラタトスクさまがコア化して、眠りについてしまわれたからでしょう」
背後からいきなりテネブラエが出てきた。
「そ、それは根本的な原因でしょ。そうじゃなくて、突然風が強くなるのには何かきっ

かけがあるのかなって……」
「そういわれると、ここの風はまるでエミルのように変化しますね」
センチュリオンは上目遣いになると、微かに笑った。
「ど、どうせ僕はラタトスクの騎士にならなきゃただの弱虫だよ」
いじけてプイと顔をそむけるエミルに、
「そんなことないよ！」
洞窟に反響するほどの声でマルタが否定する。
「エミルは強くて優しくて最高に格好いいよ」
「……そうかな」
「そうだよ！　私の王子さまなんだから！」
マルタは力いっぱい断言した。
(なんかものすごく夢を見られているような……)
ごちそうさまです、とテネブラエは言い、耳をそばだてる。
「風が収まってきたようですよ。……ただ、風の音の代わりに人の話し声が聞こえます。何か騒ぎが起きているようです」
エミルと顔を見合わせたマルタは、
「行ってみようか。ロイドのこと、聞けるかもだし」
と、出口へ向かう。

「うん……」
今度は手をつなごうと言わなかった彼女に、エミルは淋しいような内心ほっとしたような気分で歩き出した。
壁画の間を出ると、
「ヤバ……！　アリスだ」
マルタが足を止める。
「え？」
高台から一望できる広場に、確かに人影が見える。
「ヴァンガードの幹部です。隠れましょう」
テネブラエは広場から一段高くなった道へと、ふたりを誘導した。
エミルはマルタと一緒にその場に腹ばいになり、そっと下を覗き込んでみる。五、六人のヴァンガード兵の他に、ルインで会ったホークがいた。マーグナーにやられた傷はたいしたことはなかったようだ。そして、なぜかかわいらしい格好をした色白の少女がひとり。
「え～！　コレットちゃん、まだ見つからないの？　アリス、もう疲れちゃった」
少女の、頭のてっぺんから出ているような舌足らずの声に、エミルはびくっとする。
兵士のひとりがさっと四つん這いになった。アリスという少女は、当然のように兵士の背中に細い腰を下ろし、足を組む。

「はっ、もうしばらくご辛抱を……」
ホークは跪いてそう言いかけたが、
「ぐほぉっ!?」
信じられないことに、アリスという少女に顔を思い切り打たれた。
(む、鞭で顔を……!?)
エミルはぎゅっと目をつぶる。
「うふ。疲れちゃったって言ってるの♡　口答えするなんて……」
アリスは清純そうな顔でにっこり笑いながら、
「ダ」
「メ」
「だ」
「ゾ」
と、四たび顔に鞭を当てる。肉を打つ音が響き、ホークはもう声も出せずに転がってしまう。
「そんな風に気が利かないからマルタちゃんは取り逃がすし、ルインの件もしくじっちゃうのよ」
アリスはペチ、ペチと鞭の音をさせながら立ち上がると、
「わかった？　ホーくん」

と、今度は優しく頬を撫でてやる。
「す、すみません……」
うふっ、とアリスは愛くるしい笑い声をあげる。そして、
「それじゃあ、早くコレットちゃんを見つけてね♡　私、町長のところにいるから」
と、しゃなりしゃなり歩いて行ってしまった。
アリスがいなくなってしまうと、ホークはいきなり偉そうに兵士に命令を下す。
「俺は街の外を見てくる。おまえたちは街の中をしらみつぶしに当たれ」
「はっ！」
椅子になっていた兵士を含め、全員が敬礼した。
「再生の神子は金髪の女だ。それらしいのを見かけたら片っ端から連れてこい！」
「はっ！」
「急がないとアリスさまのお仕置きで命を落とすことになるぞ！」
「はっ！」
兵士たちは右手を挙げ、
「シルヴァラントの解放のために！」
「シルヴァラントの解放のために！」
口々に言うと、散って行った。
「………」

一部始終を上から見ていたエミルは、
「い、今の女の子もヴァンガードなの？」
と、訊ねる。マルタはにこりともせず、
「ヴァンガード戦闘部隊隊長のアリス」
と答えながら立ち上がる。
「あいつ、とんでもないサドだからね。エミルも気をつけて」
(気、気をつけてって……、何に気をつければいいんだろ……)
せめてあの鞭で打たれないようにしようと心に決める。
(けど、ヴァンガードってなんだか変わった人が多いみたい……マルタには言えないけど)
エミルは密かに思った。
「しかし、これでは町長のところに行けませんね」
「なら、私たちも神子コレットを捜してみようよ」
困り顔のテネブラエにマルタが提案する。
「そうか！　確かロイドと神子はつるんでるんだよね」
「うん。ロイドのこと、聞けるかもだし。それに……」
言いかけて、マルタは微かに表情を曇らせた。
「それに？」

エミルが聞き返すと、彼女は首を振る。
「……ううん。とりあえず神子を捜そう」

アリスとかち合わないよう細心の注意を払いながら、エミルたちは神子を捜して歩いた。マルタもエミルも、神子に会ったことはない。木製の扉で閉ざされた民家の中の様子まで探るのは難しかったが、仕方がない。しらみつぶしに当たるだけだ。
壊れた風車の隣にある家まで来たときだった。山肌が崩れ、大きく切り取った窓が露出している。
こっそり中を覗きこんだマルタが息を飲み、あわててエミルを手招きした。
「見て！　金髪の女の人がいるよ」
「えっ、ホント？」
ふたりは自然、顔を寄せ合いながら囁きあう。
窓は土埃に汚れていたが、中にいる女性の髪は確かに金色に見える。彼女の横にいるのも女性のようだ。
「……やっぱりロイド、ここにも来ていないんですね」
話し声が漏れてくる。

（ロイド……⁉）

エミルはハッとした。

「お役に立てなくてすみません。神子さま、」

「そんな……。いいんです。ありがとう」

「！」

マルタがいきなり走り出す。

「あっ、ちょっと……」

エミルはあわてて彼女を追いかけると、勝手に玄関のドアを開けてしまったマルタについて中に入った。

（ロイドに神子さまって……じゃあ……！）

ふたりの気配に神子が振り向いた。

「あ……あなたが……再生の神子？」

エミルはぽかんとする。想像していたよりずっと若く、少女といっても通用しそうだ。襟元（えりもと）の、赤い輝石（きせき）のはめ込まれた首飾りが、神子の色の白さを際立たせていた。

「再生の神子。あなたに聞きたいことがあります」

マルタがエミルを押しのけるように前へ出た。

「は……はい？」

神子——コレット・ブルーネル——は、突然の侵入者を咎（とが）めることもせず、マルタの

言葉を待っているようだった。

「二年前の世界再生でシルヴァラントとテセアラに分離していたこの世界はひとつにな
った。でも、その途中で大きな樹の化け物が現れて、パルマコスタの街を破壊しました
よね」

マルタは一気にそこまで言うと、黙っているコレットに強い視線を当てる。

「あれは、あなたが世界再生から逃げ出そうとしたからだと聞きました。それは本当で
すか？」

わずかな沈黙のあと、コレットは目を伏せて頷いた。

「――はい」

マルタは、神子があっさり逃げたことを認めたのに驚いたが、すぐにまた彼女を睨み
つける。

背後の棚にぶつかったコレットは、それでも声ひとつたてない。

「……あの大暴走のとき、私のお母さんはパルマコスタにいた！」

えっ、と声を上げたのは、先ほどから様子を見守っている、藍色の髪を持ったこの家
の娘だった。

（マルタ!?）

エミルも驚いて彼女の横顔を見つめた。

「……なにが神子よ……なにが世界再生よ！　卑怯者（ひきょうもの）！」

叫びはいつか、怒りから悲しみに変わっていた。
「あなたが逃げなければ、私のお母さんは死なずにすんだのに！」
マルタは髪につけている花の飾りに手を触れる。
（私に遺されたのはこれだけ……お母さんの形見（かたみ）の髪飾りだけ……！）
「……ごめんなさい」
俯（うつむ）くコレットをもう見もせずに、マルタは外へ飛び出した。
「マルタ！」
あわてて追いかけようとエミルも表に出たところで、テネブラエが姿を現す。
「マルタさまが心配です」
「うん……。それにしてもマルタがあんなに怒るなんて……」
いつものマルタじゃないみたいだった、とエミルは思う。
（ちっとも知らなかった。お母さんのこと……）
家族のことを話したがらなかった理由がやっとわかった気がした。
「マルタさまは母上さまと故郷を失って、父上さまとおふたりで流浪（るろう）していたとか。つらい思いもされたでしょう」
「……そうだね」
エミルは頷く。そして、マルタを捜すために走り出そうとしたときだった。
「おっと」

気が急いていたためだろう、彼はそこにいた小柄な少年に気づかず、あやうくぶつかりそうになる。
「ごめんね。急いでるから――」
それだけ言い置くと、エミルは振り返らずに今度こそ駆け出した。

やがて、エミルたちは崩れかけたベンチ――元々は観光客向けに作られたものだろう――のそばでひとり佇む少女の姿を見つけた。
「マルタ……」
背後からそっと近づくと、マルタは背中を見せたまま、
「ごめんなさい。嫌なとこ見せちゃった」
と、肩を落とした。
(可愛くなかったな、さっきの私……。神子に怒鳴ったりして)
世界再生のときの苦労に想像が及ばぬわけではないのに、子供じみていた、とマルタは内心反省していた。
「……そんなことないよ」
エミルが否定する。

「僕もロイドに出会ったとき、すごく腹が立って、とても落ち着いてなんていられなかった」
湖底の洞窟での出来事を思い出し、彼は唇を噛んだ。
「神子のことは？」
マルタが訊ねる。
「……エミルは神子のこと怒ってないの？」
「え？」
なぜ彼女がそんなことを聞くのか、一瞬エミルには理解できなかった。マルタが振り向く。
「エミルもパルマコスタの生まれでしょ？　パルマコスタが樹の化け物に襲われたときエミルは……」
（ああ、そういうことか……）
「僕、そのとき、街にはいなかったから……」
「そう……なんだ……」
（……あれ……？）
エミルの胸に、すっきりしないものが残る。
ほんの数年前のことなのに、大樹暴走のとき自分がどうしていたのか思い出せないのだ。樹の化け物に襲われた街の記憶は、ない。ということは、エミル自身は街にはいな

かったと考えるのが自然だろう。
（いなかった……んだよな……）
エミルの胸中には気づかずに、
「私……神子がパルマコスタを消滅させたことが許せなくて、ヴァンガードで活動していたの」
マルタは話し出した。
「本当はわかってるんだ……。神子はきっと、大変な思いをしながらディザイアンを封じたんだって。パルマコスタのことも、たぶん何か事情があって、仕方なかったんだって……。だけどあの人は自分が逃げたって噂を認めた。そんなの……許せない……」
そのとき、ヴァンガードの兵士がひとり、つかつかとふたりに近づいてきた。
「おい、おまえたち。いま、神子と言ったな」
「えっ……？」
エミルが聞き返すと、彼はじれったそうに、
「我々はシルヴァラント解放戦線ヴァンガード」
と、腕に装着した武器を誇示するように掲げてみせる。
「シルヴァラント人をハーフエルフの如く迫害するテセアラ人とマーテル教会に正義の審判を下すレジスタンスである。我々は正義のため、シルヴァラント人でありながらテセアラに与する再生の神子を捜している。行方を知っているなら情報提供しろ」

そこまで黙って聞いていたマルタは、
「……あの神子ならとっくに街を出て行ったけど」
と、とぼけた。
「なに!?　くそ……いつの間に！」
兵士はひどくあわてて駆け出した。それを見送りながら、エミルは訊ねる。
「マルタ、いいの？」
すると彼女は、
「ヴァンガードは再生の神子をシルヴァラントを救うフリをしてテセアラに売った裏切り者として手配してるの」
と説明した。姿を現したテネブラエも言う。
「そうですね。プロパガンダのため処刑されるかもしれません」
エミルは、少しずつ見えてくるヴァンガードの顔に驚いていた。
「ヴァンガードってそこまで過激だったんだ……」
「神子は……許せないけど、でもいまのヴァンガードはもっと許せない」
「それって、昔のヴァンガードはいまとは違ってたってこと？」
エミルの問いに、マルタは、
「ブルート総帥（そうすい）が変わっちゃったから……」
と、どこか淋しそうに答えた。

「おふたりとも、よろしいですか？　ヴァンガードがうろついている以上、長居は無用だと思いますが……」

あたりの気配をうかがっていたテネブラエが、言葉をはさむ。

「あ、そ、そうだね」

「……変な話して、ごめん。ロイドもここへは来てないって話だし、パルマコスタまで足をのばそうか」

気持ちを切り替えるようにマルタが提案する。

「うん、わかった。じゃあ行こう」

アスカードの街の出口へ向かおうとしたときだった。

「ちょっと待てよ！」

「な、なに？」

あれっ、とエミルは目をしばたたいた。

(この子、さっき僕とぶつかりそうになった……)

神子がいた家の前で会った少年だった。

「おまえたちだな。神子さまに乱暴したのは」

少年はエミルとマルタを上目遣いに見据える。

「隠しても無駄だぞ。俺は見たんだ！　おまえたちが神子さまを突き飛ばしたのを！ひどいじゃないか！」

小さな手で指さされて、マルタはむっとした。
「……先にひどいことをしたのは神子の方じゃない。世界再生のためにパルマコスタを見捨てて！」
少年はエミルを押しのけてマルタに詰め寄る。
「なにも知らないくせに！　神子さまに謝れ！」
そのとき、一陣の風が吹きぬけて行った。エミルの耳に、またあの声が響いた。
「ねえ、いま、なにか聞こえなかった？　魔物の声みたいな……」
「邪魔するな！」
少年がエミルに向かって怒鳴ったときだった。突然のつむじ風が、彼の軽い体を地面からもぎ取るように巻き上げた。
「うわあああああっ！」
少年は手をばたつかせながら、どんどん上昇して行く。
「――た、助けなきゃ！」
マルタはアリスを避けていることも忘れて、少年を追った。
エミルは少年を見失わないようにその場に留まる。やがて、つむじ風は気まぐれのように消え、少年は落下した。
「マルタ！　あそこ！」
エミルは大きく腕を振って少年が落ちた場所を知らせる。なんと彼は谷間にかけられ

た石の橋の残骸にぶら下がっていた。以前はむろん向こう側まで繋がっていた橋が、途中から崩落してしまったらしい。
マルタは息を弾ませて橋まで辿り着く。耳元で風が鳴った。
（このまま行ったら私も飛ばされちゃう）
彼女は腹ばいになり、かろうじて残っている石の端まで匍匐前進した。幸いなことに、視線の先にはまだ石にかかっている少年の指が見える。
ほっと安堵の息をつきながら少年を覗き込むと、怒った顔が見上げている。
「な……なんだよ……。笑いに来たのかよ」
だが、さすがに先ほどの迫力はもうない。
「バカ言わないの！　とにかく動かないで。いま、助けるから」
マルタは少年を叱りつけ、小さな手を握ろうとする。が、そのときタイミング悪く、ビュウッと横風が吹きつけた。
「うわぁ!?」
少年が滑らせた手を危ないところでマルタが掴まえる。だが、次の風がまるで振り子のように少年を揺らした。手を離すまいとするマルタは、彼に引っぱられて石の際までずるずると移動する。このままではふたりが落ちるのは時間の問題だろう。
「エミル！　テネブラエ！　手伝って！」
マルタが叫ぶ。

「承知」
すぐにテネブラエは浮上した。
(こ、怖いけど……行かなきゃ……)
エミルは、センチュリオンのように空間を移動できない自分を恨みながら、おそるおそる足を踏み出そうとする。
「あっ!?」
突然、よく似た鳥のような二体の魔物が現れ、エミルたちの行く手を阻んだ。
「うふふ。そうは行かないんだな♡」
頂上に近い通路に立っているのは、あのアリスだった。
「あ……きみは……サドの……」
ムッとしたアリスが鞭を鳴らしながら命じた。
「——ホーくん！　やっちゃって」
「うわっ!?」
エミルは後頭部に鈍い痛みを感じ、前のめりに倒れた。背後からホークが殴ったのだった。
「コレットちゃんを捜してたら、思わぬ掘り出し物って感じ♡」
アリスはうきうきと石橋を渡ってゆく。
「デクスには悪いけど、ラタトスク・コアは私が回収しちゃおっと♪」

そしてマルタのところまで来ると、彼女のブーツを踏んだり脚を蹴ったりし始めた。
「……や、やめて！」
エミルはズキズキする頭を振り、立ち上がる。
「あら、しぶとい♪」
アリスは微笑みながら、マルタをさらに痛めつけた。さすがに度が過ぎると思ったのだろう、ホークが声をかける。
「アリスさま！　マルタさまを殺してはブルート総帥が……」
「えー？」
アリスはマルタのふくらはぎをぐりぐりと踏みながら、小首をかしげる。
「だって風に吹き飛ばされて落ちて死んじゃうんだもん♪　事故なんだから総帥も許してくれるわよ♡」
マルタはそれまで必死に歯を食いしばっていたが、アリスが本気だと知るや、かろうじて手首を摑んでいる少年の重みが耐え難いものになった。
「も……もう……だ……め……」
（お、落ち……る……！　ごめんね……）
心の中で少年に謝ったときだった。
「エンジェルフェザー！」
光輪（チャクラム）が三つ、輝きをこぼしながらアリスに襲いかかる。彼女がひるんだ隙に、マルタ

と少年を抱いて舞い上がったのは天使の羽根を持つコレットだった。神子はゆっくりとエミルの前に着地する。

「再生の神子……！」

エミルは、コレットの背中に生えている羽根を間近に見て、目をぱちくりさせた。あわてたのはマルタだった。

「な、なんで来ちゃったの？　それとも知らなかった訳？　あなた、ヴァンガードに狙われてるんだよ」

「知ってるよ。でもほっとけないもん」

すぐ後ろでアリスの従えた魔物が鼻息を荒くしているというのに、コレットはにっこり笑う。

「あーん、アリスちゃんってば超ラッキー。コレットちゃんとマルタちゃん、一緒に捕まえちゃおっと」

めげないアリスが鞭を振って喜ぶ。その目が残酷に吊り上がった。

「ホーくん！　タロー！　ジロー！　やっちゃって！」

アリスの魔物、エルシーのタローとレイシーのジロー、そしてホークがエミルたちを取り囲む。

（戦うときは騎士になるんだ。マルタを護(まも)るラタトスクの騎士に――）

エミルはもう自分が自分でなくなるような戦いをしても、動揺するまいと決めた。

スピナーを構えるマルタの横で、

「えいっ！」

コレットがチャクラムを放つ。光輪がまっすぐタローに向かって飛んだ。兎（ラビット）に似た魔物は甲高（かんだか）い悲鳴をあげて転げ回る。

「じゃあ、私はこっち！」

天翔舞（てんしょうぶ）のスピナーがジローの豊かな毛皮を続けざまに斬り裂いた。だが、それだけでは倒れない。

ホークは両手に装着した武器を振り上げ、初めからエミルに狙いを定めていた。マーグナーとの戦いを目にしていた彼は、相手にとって不足なしと思っているようだった。が、ラタトスクモードになったエミルは、体に漲（みなぎ）る力を抑えようともせず、ヴァンガードの師団長を攻撃する。息つく暇も与えず、斬り上げ、斬撃で吹き飛ばし、顔色ひとつ変えずに叩きのめした。

「燕舞斬（えんぶざん）っ！」

マルタのスピナーがレイシーを宙に放り出す。エミルはすかさず長い跳躍を決めると、魔物に鋭い一刀を浴びせた。

吹き荒れる風の中、やきもきしながら一部始終を見守っていたアリスは、味方が次々倒れるさまに、

「もうっ！　なにやってるのよ～！　ドジ！」

悔しそうに味方をなじる。そして、
「サブロー！　退くよ！」
近くに浮かんでいたティリーのサブローに乗って飛び去った。

「みんな、だいじょぶ？」
コレットは少年、そしてエミルとマルタを順番に見ながら訊ねた。
「は……はい……」
「神子さま、ありがとう」
エミルと少年はすぐに返事をしたが、マルタは何かを考えているのか、黙ったままだ。
「ううん。怪我がないならよかった。それじゃね」
コレットは微笑み、手を振って歩き出す。それから思い出したようにマルタのところまで戻ってきた。
「……謝っても許されないことだけど、でも、本当にごめんなさい」
それでもマルタは応えない。
コレットの姿が見えなくなってしまうと、少年はマルタたちを睨みつけた。風に飛ばされる前の話を続けるつもりらしい。
「……おまえたちは知らないだろうけど、神子さまは、自分の命と引き替えに世界を守

ろうとしてくれた人なんだぞ！」

「……」

エミルは思わず頷きかけてしまった。コレットに助けられたいま、少年の言葉は理解できる。まっすぐ心に響いてくる。

「俺だってパルマコスタで父ちゃん死んじゃったけど……でも、神子さまにあたるのは筋違いだ！」

そう言い捨て、少年はもう一度ふたりを睨むと、駆けて行ってしまった。

空は薄暗く、風の音だけが耳につく。

「あ、あの……マルタ。ヴァンガードがいなくなった隙に僕たちも……」

沈黙に耐えられなくなったエミルが言いかけると、

「――ごめん。もう一度、神子に会いたい」

マルタが遮（さえぎ）った。

「マルタ……」

「私……まだ助けてもらったお礼、言ってないから……。わがまま言ってごめんなさい。でもお願い！」

(きっとマルタもコレットのこと……)

エミルは、ふっと微笑んだ。

「……僕もお礼言ってないよ。だから一緒に神子を追いかけよう」

「エミル……ありがとう」
うれしそうに、やっとマルタは笑ってみせた。

コレットは町長の家で見つかった。
彼女を最初に見かけた家で聞いてみると、アイーシャと名乗った藍色の髪の娘が、
「神子さまならずいぶん前に町長の家に向かわれたはずですよ」
と教えてくれたのだ。きっと途中で自分たちの危機に気づいて助けてくれたのだろう、とエミルは思った。
コレットは明るく燃える暖炉の前で、町長を待っているところだった。
マルタはほんの少しの躊躇いのあと、
「さっきは……ありがとう」
と、神子に礼を述べる。エミルもあわてて従った。
「僕もお礼言ってなかったから……。ありがとうございました」
「わざわざそれを？　嬉しい！　私はコレット。あなたたちは？」
コレットは、マルタの顔を覗き込む。
「……え……マ、マルタ……だけど」

「あ、僕はエミル……」
「マルタにエミル、だね。じゃあこれでお友達だね」
コレットがうれしそうに言うと、
「じょ、冗談でしょ！」
とんでもないという顔でマルタが抗議した。
「……そ、そっか……。残念だな……」
コレットは落胆（らくたん）して肩を落とす。
こうしてみると、再生の神子もふつうの少女のようだった。くるくるとよく表情が変わるのを、エミルもマルタも意外な思いで見つめる。
そのとき、白髪頭の男性が部屋に入って来た。年恰好からして、町長だろう。
「あの……神子さま……」
「あ、はい。石舞台のことは任せてください、これからみてきますから」
町長に向き直り、コレットは頼もしげに言った。
「石舞台？」
エミルが聞き返す。
(アスカードの観光の目玉っていう、あれだよね？)
たしか中に入れないように、入り口には板が打ちつけてあった気がする、とエミルは記憶を手繰（たぐ）り寄（よ）せた。

「あ、えっとね。この街突風がすごいでしょ？　他の地域はそんなことないの。だから原因は石舞台にあるのかなって」
　コレットがふたりにそう説明すると、
「以前あそこに風の精霊を名乗る魔物が出現したことがある。神子さまはそれが関係しているかもしれないとお考えなのだよ」
　町長もつけ加える。マルタの眉が険しくなった。
「そんなことしてたらまたヴァンガードが戻ってくるよ」
「だけど……世界再生の後、あちこちで異変が起きてるでしょ。この街の異変もそう」
　空の色とか風とかだな、とエミルは思う。
「……私、再生の神子だから――ううん、そうじゃなかったとしても、やれることはやりたいの」
「世界を救った人ってすごいな……」
　思わずエミルがそう漏らすと、
「どうして？」
　コレットは意外そうに目を丸くする。
「エミルもマルタもさっきの男の子を助けようとしたじゃない。同じことだよ」
　マルタは神子の顔をじっと見つめていたが、思い切ったように言った。
「……友達にはなれないけど、手伝うことはできると思う」

「え？」
コレットが首をかしげる。マルタはエミルに向かって、
「私、この人に助けられたんだもん。借りは返す」
と、生真面目な表情になる。決してコレットへの好意からではないと言い訳しているのだった。
「なら、僕も手伝うよ。マルタは……はじめて僕の仲間になってくれた人だから」
それを聞いて、マルタは安心したようにあらためてコレットに言った。
「あなたが嫌だって言ってもついて行くけど……」
「――ううん！　大歓迎だよ！　ふたりともありがとう」
コレットは胸の前で指を組み、心の底からうれしそうににっこり笑った。

長い石段は、ところどころ崩れ落ちてしまっていた。
（危険だから観光客が入れないようにしてあったんだな）
エミルは納得しながら頂上に設けられている石舞台まで登る。
舞台は四角く、中央には円陣が描かれていた。もとは風の精霊に捧げる生贄（いけにえ）の儀式に使われていたのだという。そのためか、四隅には――一体は完全に壊れてしまっていた

が——風の精霊が空を飛ぶさまを表したという石のオブジェが建てられていた。
「見たところ、変わった様子はないね」
三人でひと通りあたりを見渡したあと、エミルは言った。
石舞台にぶつかる風が、下よりは多少大きく鳴っているくらいだ。雲の流れも空の色も変わらない。
「ふたりが連れている精霊さんならわからないかな？」
コレットが、思いついたように振り返った。
「精霊？」
マルタが聞き返す。すると、テネブラエが姿を現した。
「私のことでしょうか」
「あ、ワンちゃん！　そうだよ、ワンちゃんのこと」
はしゃぐコレットに、テネブラエは渋い顔になる。
「わ、私は犬でも精霊でもありません。センチュリオン・テネブラエと、お呼びください」
「じゃあテネブちゃん。なにか変わったことはないの？」
「……い、いえ、特には……」
そう返事をしてから、言わずらはいられないといった口調でぶつぶつとつけ加える。
「……しかしテネブちゃんというのは……」

コレットはにこにこしているだけだ。
「コレットって動じないね……」
「ホントだね……」
エミルとマルタは小声で囁きあった。
テネブラエから、変わったことはないと言われたこともあり、
「うーん。石舞台は関係ないのかな」
舞台の端にいたコレットはエミルたちの方へ戻りかけた。そして、
「きゃっ⁉」
なにもないところでバランスを崩し、マルタを押し倒す形で転んでしまう。次の瞬間、ふたりの体すれすれのところを、何かが飛んで過ぎた。
「うわっ⁉　いまのは何⁉」
エミルが驚いて叫ぶ。
「魔物⁉」
「でも消えちゃったよ」
マルタとコレットは一緒に立ち上がりながら空を仰ぐ。テネブラエが鋭く叫んだ。
「エミル！　上です！」
激しい翼の音と共に、鳥に似た魔物が旋回（せんかい）しながら降りてきた。その体は大きく、炎にも似た皮膜に包まれている。

「う、うん！」

エミルは魔物を睨みつけると、剣を抜いた。

「いやぁっ！　えいっ！」

何度も斬りつけようとするが、そのたびに跳ね返されてしまう。魔物は鋭い声で鳴き、しばらくエミルたちを威嚇していたが、やがてどこかへ飛び去った。

「なんなの、あれ……。町長が言ってた風の精霊とかいうやつ？」

エミルは魔物が消えて行った空の果てを眺めながら、腰の鞘に剣を収めた。

「ここにいた風の精霊は偽者だったよ。その偽者も倒したはずだけど……」

コレットは言い、とても大変だったなあ、と思い出す。

(偽者ツァトグを倒してくれたのはロイド……。あのころは、毎日ずっと一緒だったのに……)

「とにかく、突風の原因はあいつが関係してるっぽいね。なんとかしなきゃ……」

マルタの言葉に、コレットはハッと我に返った。

「でも、あいつ全然攻撃が効かなかったよ」

エミルが困り顔になると、テネブラエは、

「飛竜を探しましょう」

と、助け舟を出す。

「飛竜？」

「先ほどの怪鳥インセインの天敵です」
インセインっていうのか、とエミルは思う。手にはまだ、攻撃が効かなかった怪鳥の手強さが、感触としてはっきり残っていた。
「インセインはバリアのような皮膜で守られています。皮膜を崩せるのは飛竜の爪だけです」
「飛竜なら」
テネブラエの説明を聞いていたコレットが顔をあげる。
「私、心当たりがある。前にハイマで飛竜使いのおじさんに会ったの。案内するよ」
だが、エミルは早速二の足を踏んだ。
「ハイマって……冒険者の人がいっぱいいて怖いところなんだよね？」
「だいじょぶ。みんないい人ばっかりだったよ」
コレットはにこにこしながら首を振る。
「……ねぇ、神子さま」
その笑顔に引き込まれるように、マルタはコレットに声をかけた。
「よければコレットって呼んで欲しいな」
躊躇（ちゅうちょ）したのはほんの僅かの時間だけだった。
「……コレット。ありがとう」
いったん舌に乗せてしまうと、その名は自然な響きでマルタの唇から流れ出る。

「石舞台で怪鳥から助けてくれたでしょ」
「あ……あれは転んじゃっただけで……」
あわてて手をひらひらさせるコレットに、
「……ふふふ、コレットって変なの」
マルタが微笑む。
「そうかな」
「そうだよ」
ふたりは顔を見合わせて、笑い出した。
「そっか、ごめんね」
「ふふ……あははは！」
ひとしきり笑い合ってから、マルタはさっぱりした顔で振り向くと、あっけにとられた顔でいるエミルと、テネブラエに言う。
「じゃあ、ふたりとも、ハイマに行こう」
「う、うん……」
あんなにコレットを憎んでたのに、とエミルは不思議だった。
(女の子ってよくわかんないや……)
仲良く肩を並べて歩き出したマルタとコレットの背中に目をやって、彼は頭を掻いた。

ハイマに近づくにつれ、土が赤味を帯びてくる。

頭上にはアスカードよりはずっと青い空が広がっていたが、かつて世界中の冒険者が一度は訪れ、集う街として名高かったハイマの街も、すっかり様変わりしてしまっていた。

「うわ……魔物だらけだよ!?」

街に入るなり、低く唸っている魔物に遭遇し、エミルは顔色を変えた。岩陰や朽ちた家屋の中はもちろん、よく見ると営業中の宿屋のまわりにまで彼らはうろついているのだった。

「前に来たときはこんなじゃなかったのに……。街の人はどうしてるのかな」

マルタが心配する。

「……世界再生のせいかもしれない。なんとかしないと」

唇を噛むコレットを気遣い、

「と、とにかく飛竜使いのおじさんを捜そうよ」

エミルは怖々、山の斜面を登った。

コレットの話によると、以前は頂上の断崖絶壁から竜に乗り、救いの塔まで行くことができたという。

「前はこの辺りに、飛竜使いのおじさんが……」

魔物がうろつく頂上を見渡し、コレットはかつて飛竜がつながれていた場所を示す。

エミルはそれもろくに目に入らないらしい。

「うわ……ここも、魔物だらけだよ……」

「そだね。あのおじさん、無事だといいんだけど……」

コレットが心配そうに言ったときだった。一体の魔物が、ぬっと現れた。

「おじさんよりいまはこっちがピンチかも」

マルタがつぶやく。

「でも、なにこれ……小悪魔？」

「に、しては巨大だね……」

（あんまり怖そうじゃないけど……こういうのがきっと実は怖いんだな）

エミルは、体より頭が大きそうな魔物――スキロポリオン――を見て、そう思う。手にしている牛刀(ぎゅうとう)のような剣もなかなか立派だ。

「あぎゃあっ」

スキロポリオンがいきなり飛び上がる。エミルは瞬時にラタトスクモードに変わると、穿孔破(せんこうは)で魔物を斬り上げ、バランスを崩して落ちてきたところを深々と突いた。

「ぎゃあ」
「飛燕流舞っ！」
次はマルタが蹴り上げ、コレットのチャクラムが斬りつける。
「ぎゃあ」
「ぎゃあぎゃあうるせぇよ！」
エミルは赤土の上を回り込んでジャンプを決めると、崩蹴脚でスキロポリオンの後頭部を思い切り蹴った。隙をついて飛びかかったウルフに、魔物がなにか叫びながら短い腕をぶんぶんと振り上げる。エミルはその剣を叩き落とすと、いま一度魔物を空中へ蹴り上げ、間髪をいれずに斬り下ろした。
耳を塞ぎたくなるような声をあげて、スキロポリオンはドシーンと倒れた——。

「……結局、飛竜はいなかったね。逃げちゃったのかな……」
マルタは、ふうっとため息をついた。
しばらくあたりを捜し——宿屋でも聞いてみたのだが、わからないと言われた——とうとう飛竜使いは見つからなかった。せっかくハイマまで来たというのにムダ足だったのだ。

「も、もしかして、ここの魔物たちに食べられちゃったとか……」
ぶるっとエミルが身を震わせた。と、
「聞こえる……」
コレットが中空を見つめながらつぶやく。
「え？　なにが？」
「飛竜の……飛ぶ音……」
「え？　なにも聞こえないけど……」
マルタが肩をすくめたとき、
「ほら！」
コレットが空を指さした。
世界再生の旅での天使化にともない敏感さを増して行った耳は、誰よりも早く翼の音を聞きつけていたのだった。
エミルとマルタは驚いて、こちらへぐんぐん近づいてくる生き物を見上げた。
「あれが飛竜……！」
白い体に翼と長い尾を持ち、ちょうど雲から顔を出した太陽を遮るように飛んできた飛竜は、エミルたちの頭上をゆっくり旋回した後、静かに着地した。
まだほんの子供なのだろう。丸い目をくりくりさせながら、テネブラエの方に顔を寄せる。言葉ではない言葉で、何か話しているらしい。

「……仇をとってくれてありがとうと言っています」

テネブラエが通訳した。

「仇？」

誰のだろう、とエミルは首を傾げた。

「まさか飛竜使いのおじさんが……！」

コレットは「どうしよう」と、口元に手をあてる。

「いえ……。飛竜使いは無事逃げおおせたようです。仇というのは、彼女の父親が先ほどのスキロポリオンに食われた件のようですね」

「この仔のお父さまが……」

コレットは絶句する。

やっぱり食われたんじゃないか、とエミルはあらためて恐怖を覚えた。

飛竜の仔はなおもテネブラエに向かって、気持ちを伝えているようだった。

「お礼に、なにか協力できることはないかと言っています。幼体でもインセインには天敵になりますが」

どうしますか、とテネブラエがエミルを見上げる。エミルは遠慮がちに言った。

「……子供なのに戦わせるのはかわいそうかもしれないけど、頼めるなら……」

気が咎めるが、他に方法はないのだ。

エミルたちは、テネブラエと飛竜のやりとりをじっと見守った。すぐに、



「承知してくれました」
と、テネブラエが告げる。
「よかった！　ありがとう、飛竜さん」
マルタはほっとして、飛竜の仔に歩み寄る。そして、そっと首のあたりを撫でてやった。幼い飛竜はおとなしくしている。
(エミルと一緒にこれに乗って空を飛んだら、楽しいだろうなあ！　乗りたいなあ……。エミルも私と同じこと考えてたりして！)
しかし当のエミルは、
「それじゃあアスカードへ戻ろう！　もうこんな怖いトコ、こりごりだよ……」
と、先頭きって山を下って行く。
「……………」
「マルタ。ぼーっとして、どうかしたの？」
コレットが戻って来て顔を覗き込んだ。マルタは、
「え……な、なんでもないよ。ぼーっとなんかしてないって！」
と、自分もすたすた行ってしまう。
すると、テネブラエがにやりとした。
「ぼーっと、というよりは、ぼー然と、という感じでしたがね」
「え？　テネブちゃんて、すごいね！　マルタの気持ちがわかっちゃうんだ。さすがは

マルタのワンちゃんだね」
「!! さ、先に行っていてください。私は少々飛竜と打ち合わせを」
「わかったよ、テネブちゃん」
コレットも下って行ってしまうと、テネブラエは深いため息をつく。
キィキィ、と飛竜が鳴いた。
「やれやれ。子供に慰められたくはありませんが、気持ちだけは貰っておきます」
テネブラエは言い、いまの高尚なダジャレが理解されなかったのはなぜだろう、と真剣に考えた。

「皆さん、石舞台に行く前に私から提案があるのですが」
アスカードの入り口まで戻って来ると、テネブラエが足を止めた。
「なにかな、ワンちゃん」
コレットがにっこりする。
「センチュリオンです。センチュリオン・テネブラエ」

「あ、そうだった。ごめんね、テネブちゃん」
「……」
テネブラエは諦め、話題を変える。
「……インセインに真正面からぶつかっても、飛竜の幼体では、的確なダメージを与えるのは難しいでしょう」
「え!? じゃあどうするの？」
エミルは嫌な予感を感じながら、急き込んで訊ねた。
「囮でインセインを引きつけておく間に背後から幼体をぶつけます」
「お、囮って、そんなの誰がやるの？ ぼ、僕は嫌……」
あわてて言いかけるのを、
「私がやる！」
「私がやるよ」
マルタとコレットが同時に遮った。
「ううん。コレットはどんくさいから私がやる」
「ど、どんくさくなんてないもん。私、すごく丈夫だし」
「私がやる」
「ううん、私がやる」
これでは収拾がつかない。うっかりエミルは叫んでしまった。

「も、もういいよ！　僕がやるよ！　女の子が囮になって、僕が隠れるなんておかしいじゃない……」
「やめた方がいいのでは……」
テネブラエが、こそっとつぶやく。
「ぼ、僕だってやだけど仕方ないじゃん……」
唇を尖らせたときだった。マルタが瞳を潤ませ、頬を染めて言った。
「エミル……。私のためにありがとう！　エミルはやっぱり私の王子様だね！」
「エミルならできるよ。だいじょぶ。自信を持って！」
あれだけ自分がやることにこだわっていたはずのコレットにも、あっさり励まされてしまう。
「……」
(なんで僕のときはおとなしく引き下がるのさ……)
エミルはがっくり肩を落とし、大変なことになったぞ、と身震いした。

「では、エミル。説明した通り、石舞台に上がってぎりぎりまでインセインを引きつけてください」

テネブラエがエミルを石舞台の上へと促した。
「ここぞというタイミングで合図をお願いします」
「……わかってるよ」
エミルは重たい気持ちで石舞台の中央に立った。風にあたると、足ががくがく震える。
（あーあ、何でこんなことになっちゃったんだろう。このままインセインが現れないでくれますように……って、それじゃこの街が困っちゃうし……）
うじうじ考えていると、聞き覚えのある力強い翼の音が聞こえてきた。
（き、来た！）
皮膜をまとったインセインだ。円陣の上にいるエミルを狙ってまっすぐ飛んでくる。
（こ、怖い……。でもぎりぎりまで引きつけないと……）
翼の音が大きくなる。それでもエミルには自分の鼓動の方が大きく聞こえる気がした。
腹を据えてギリギリまで待とうと決めた彼は、
（あ、あ、合図……！）
次の作業を忘れそうになる。鋭い嘴（くちばし）が視界いっぱいに膨張した。
（合図しなきゃ！）
「テネブラエ！　飛竜の仔を！」
拳をぐっと握りしめると、テネブラエに向かって叫んだ。
あと一瞬遅かったら、インセインにやられていたかもしれない。

「我がしもべよ！　行きなさい！」

魔物の背後の空に、飛竜の仔の群れが現れた。あの仔が兄弟や仲間を連れてきたのだろう、幼い仔が七、八頭、インセインの背後から襲いかかる。

キィキィキィ――――ッ！

まだ柔らかさの残る爪が魔物の皮膜を引き破るまで、時間はかからなかった。

「インセインの皮膜は消えました。今です！」

テネブラエの声を聞くや、エミルはラタトスクモードにかわる。

皮膜を破られたインセインは気が立っているようだった。矢のような速さのリレントレスアサルトが、コレットに迫る。

「危ないっ！」

マルタが叫ぶより早く、エミルはコレットの前に出ると手にした剣を斜め上に払い上げた。

ギャアア――――ッ！

不気味な声を上げていったん上昇した怪鳥は、今度はエミルめがけてレックスレスアサルトでまっすぐに襲いかかる。

「はっ、そんなの効かねぇよっ！」

エミルは横へかわすと見せかけて、そのまま穿孔破でインセインの胸を突く。翼のバランスが崩れた隙に、マルタのスピナーが空を斬った。

ギャアア――ッ！
「エミル！　こいつ、まっすぐしか攻撃してこないよ！」
「ああ？」
エミルは、再び浮上して力をためているインセインを上目遣いに睨みつける。と、怪鳥の体が回転を始めた。
「そんなことは……」
スクリュードライバーで降りてくるインセインをエミルは、
「わかってんだよぉっ！　――魔神閃光断（まじんせんこうだん）っ!!」
空中で上下に翻弄し、最後に石舞台の上に斬り落とす。円陣に激突したインセインはそのまま動かなくなった――。
剣を鞘に収めるのと同じタイミングで、エミルの内にいつもの自分が戻ってきた。
「エミル！　あんな凶暴そうなやつ相手によくタイミングとれたね。やっぱりエミルってかっこいい！」
マルタが駆け寄ってくる。
「これで突風は収まるんだね。エミル、お疲れさま」
コレットもエミルを労（ねぎら）った。
「そんな……」
ふたりにほめられ、エミルは頭を掻いて照れる。

「でもおかしいですね。インセインは本来あまり好戦的ではないのです」
テネブラエだけが浮かない顔だ。
「皮膜を傷つけられれば逃げるかと思っていましたが……」
そのとき、コレットが叫んだ。
「……待って！　なにか……くる！」
「うわぁ――――！」
巨大な怪鳥が石舞台目がけて急降下してくる。エミルたちは危ういところで舞台の前まで退避した。
「な、なにが起きたの？」
「インセインは倒したのに……」
エミルとマルタが口ぐちに言う。そのとき、あの飛竜の仔がテネブラエに近寄った。
「――待ってください。飛竜の幼体がなにか言っています」
ふむ、とテネブラエは頷き、飛竜の言葉を通訳した。
「……石舞台に呼ばれているような気がする……？」
「どういうこと？」
コレットが訊ねる。
「なにかが石舞台の奥にいて、魔物たちを呼び寄せているようです。私に感知できないのは、おそらく私の支配外の属性を持つ魔物たちに向けられているからでしょう」

うーん、とマルタが首をひねった。
「石舞台の奥、か。だけど見たところホントにただの舞台みたいだけど……」
そういえば、とコレットが顔をあげる。
「アイーシャのお兄さんが石舞台に詳しかったはずだよ。聞いてみようよ」
「あの家の女の人だね、アイーシャって。そうしよう」
並んで歩き出すふたりの歩調が、いつの間にかぴたりと合っている。
「あのふたり、すっかり仲良くなったみたい」
エミルが感心したように微笑む。
「事件の事に必死で仇だということを忘れているのでしょう。いいではありませんか」
テネブラエはゆったりと尻尾を振った。
「うん……そうだね。確かにパルマコスタのことはあるけど、でも、コレットはいい人だもんね」
エミルにとっても、もちろん仲良くしてくれる方がいいに決まっている。ふたりに急かされないうちにと、彼もあわてて歩き出した。

4

アイーシャの家に戻ってみると、彼女の兄ライナーが戻っていた。彼の友人であるハーレイも一緒だ。

「神子（みこ）さま！」

妹と同じ藍色の髪を持ったライナーは、コレットをひと目見るなり、感激の声を上げた。

「ライナーさん、お久しぶりです」

コレットも笑顔になる。

「街の暴風について調べてくださっているとか。生贄（いけにえ）事件のときといい、いつもご迷惑ばかりですみません」

「生贄事件？」

マルタが聞きとがめた。生贄は伝説上の話だと思っていたからだ。すると、

「以前、私が偽の風の精霊に生贄にされそうになったことがあって、神子さまに助けていただいたんです」

と、アイーシャが説明する。

「町長が言ってた事件だね」

エミルはアスカードの町長の話を思い出し、マルタと頷きあった。

懐かしいな、とライナーがしみじみ言った。

「あのときは、ロイドさんにもお世話になりました。ブレイカーを、止めていただいたり……」

「あの女教師に蹴られたりな」

ハーフエルフのハーレイが顔をしかめて笑う。ハーレイはライナーの親友だ。ハーフエルフと人間というだけでなく、学究肌のライナーとは性格も正反対なのだが、何故かウマが合う。ライナーは、アイーシャが生贄に選ばれたのはハーフエルフなどとつるんでいるせいだと陰口を叩かれたときにも、まったく動じなかった。ただし、石舞台を爆破するためのブレイカーをハーレイが作ったときには、やめさせようとはしたが。

「そういや、ロイドは元気にしているのか？　いろいろ悪い噂（うわさ）も聞くが、誤解なんだろ？」

屈託（くったく）のない口調（くちょう）で、ハーレイが訊ねた。

（ロイド……）

唇を噛むエミルの横で、コレットが口を開いた。

「ロイドはいま行方不明（ゆくえふめい）なんです。でもロイドは悪いことをしたりしません」

「……嘘だ！」

思わずエミルは声を荒らげる。

「僕の家族はロイドに殺されたんだ！」

アイーシャたちがハッとエミルに注目する。コレットも同じだった。

「……エミル……」

気まずい雰囲気のなか、

「やれやれ。穏やかじゃないな」

ハーレイが聞こえよがしのため息をつく。石舞台さえなくなればアイーシャが生贄にならなくてすむという、どこか単純思考の彼は、自分の発言がこの雰囲気の原因を作ったことには気づいていないようだった。

そのとき、アイーシャが助け舟を出す。

「あ、あの、なにかご用があっていらしたんですよね」

「あ、はい。石舞台についてお聞きしたいんです」

コレットは、ほっとした表情で話題を変えた。

「石舞台ですか」

遺跡に詳しいライナーが身を乗り出した。

「みなさん、おかけになってください。何もありませんが、お茶くらいいれますから」

アイーシャは笑顔で台所に入ってゆく。

「……エミル……」
マルタにそっと背中を押され、エミルは、
「……う、うん……」
のろのろと椅子に腰かけた。
大切な話を聞く前に感情的になってしまったのはまずかった、と思う。だが、こんなにもロイドを懐かしがる人がいることを、彼はどうしても許すことができないのだった。
やがて、コレットの話を聞いたライナーは、
「石舞台の奥……というと地下ですよね。確かに調査では、地下に何らかの施設があるのではと考えられていますが」
と言った。
「ねぇ、兄さん。巫女の儀式を行ったらどうかしら」
お茶のカップを配りながら、アイーシャが提案する。ハーレイは首をひねり、
「巫女の儀式は確か風の精霊を呼び出す儀式だろ」
と、さっそくぐびりとカップを傾けた。
「あれには扉を開くという意味があるそうよ。私、儀式を行います」
「何言ってるんだ」
とんでもないという表情で、ハーレイが言う。
「あそこにはいま、怪鳥とやらがいるんだろ。危険だ」

「なら、儀式の作法を教えてください」
マルタの言葉に、アイーシャたちの視線が集まった。
「私がやってみます。私なら自分の身ぐらい守れるし」
「……わかりました」
かつて生贄に選ばれた娘は頷いた。
「作法はまだ覚えていると思います。今からお教えしますね」
あんまりむずかしくないといいんだけど、とマルタが密かに考えていると、
「よろしくお願いします」
「大丈夫ですよ」
と、彼女の心を読んだようにアイーシャが笑った。
「以前私のかわりになってくださった女性は、一度説明しただけですぐに覚えてしまいましたから」
「なーんだ、そうですか。よかった」
たいしたことないんだ、とマルタはほっとする。そして、準備が整うまで宿屋で待つというエミルとコレットのふたりに、思いきり嫉妬の視線を送った。

「ねぇ、エミル。聞いてもいい？」

アイーシャの家を出ると、コレットが話しかけてきた。止んだと思っていた風が、また少し強くなっている。

「な、なに……!?」

（ロイドのことかな……）

エミルはどきりとした。

（僕、最近ちょっとこらえ性がなくなってきてるのかも……これもラタトスクの影響なのかなぁ）

「エミルもなにかの『まにあ』なの？」

「へっ？」

意外な言葉に、エミルはまぬけな声を出してしまう。

（まにあ、って……？）

「だってね。エミルって戦いになると人が変わるでしょ。私の知っている人で、遺跡マニアの人がやっぱりそんな感じなの。だから……」

「その人のことはわからないけど。僕の場合は……テネブラエの話だと、ラタトスクの力が憑依しているからららしいよ」

戦いマニアじゃないよな、とエミルは苦笑する。
「えっと、ラタトスクってなに？」
初めて聞く言葉に、コレットはきょとんとした。
「あ……そうか。どうしようテネブラエ……」
どこまで話していいものか、エミルにはわからなかった。コレットは神子だが、ロイドは彼女のしもべなのだ。
「今まで疑問に思われなかった方が不思議なくらいです。私たちの旅のお話をして差し上げては？」
テネブラエの判断に、エミルは、
「う、うん……」
と曖昧（あいまい）な返事をした。そして、自分がコレットをまだ完全に信じていないことに気づくと、とても嫌な気分になった。
「では宿屋でお話ししましょう。長い物語ですから……。さあ」
テネブラエはそう言うと、コレットを促した。

「全ての始まりは、大樹カーラーンが枯れたことです」

掃除のゆきとどいた清潔な小部屋で、テネブラエが話し始めた。ライナーがひと足先に宿の手配をしておいてくれたのだ。

「ラタトスクさまは、大樹カーラーンで繋がれた異界の扉を守る守護者でした。つまり、大樹の守護者——精霊です」

精霊、とベッドに腰かけたコレットがつぶやく。

「ラタトスクさまは、我々センチュリオンを使って、魔物たちにマナを運ばせ、大樹や世界のバランスを整えておられました——古代大戦が起きて、樹が枯れるまでは」

「確か古代大戦でマナを生む大樹が枯れて、マナが枯渇しかけたから、世界が滅びそうになったんだよね」

エミルが言う。

「それで勇者ミトスがマーテルさまの力を借りて世界をふたつに分けたんだっけ」

コレットは頷き、

「……う、うん。ミトスは世界を守るためにそうしたの。でも、長い時間がたつうちに、新しいマナを生む樹が生まれることがわかったんだ。それで……いろいろあって、新しい樹が生まれたから世界をひとつに戻すことになったの。それが……世界再生……」

と、かつての旅へ想いを巡らせるように、遠い目をした。

「ラタトスクさまは、その間コア化して眠っていました。私たちエイト・センチュリオンもです」

テネブラエが続ける。
「そして世界が再生され、私たちはようやく目覚めのときを迎えました。ですが、ヴァンガードの連中がラタトスクさまの力を悪用しようと考えた……」
そのとき、部屋のドアが音もなく開いた。
「――だから、それを邪魔しようとするために、私がラタトスク・コアを盗み出して逃げて来たの」
「マルタ！」
エミルは、部屋に入ってきたマルタを見やった。
「コレットに説明してたの？」
「う……うん。まずかったかな」
心配になって、エミルは頭を掻いた。が、すぐにマルタは、
「ううん、そんなことない」
と、首を振る。
「コレットは確かに……お母さんの仇だけど……でも悪い人じゃないって、十分わかってるから」
「マルタ……」
感激するコレットに、マルタは微笑みかける。
（よかった……。マルタはコレットを信じてるんだ）

エミルは、コレットが自分たちの情報をロイドに流すのではないかと、ちらりとでも考えた自分が恥ずかしかった。
（でも、ロイドを信じる日が来るとはとても思えないけどね……）
「では続きをお話しします。私たちはラタトスクさまを目覚めさせようと……」
話を続けようとしたテネブラエを、
「そうか」
今度はコレットが遮った。
「エミルたちはラタトスクさんを目覚めさせるために、センチュリオン・コアを探してるんだね」
そして、思い出したようにつぶやく。
「ラタトスクさんは、『まにあ』じゃなかったんだ」
「まにあ……？」
なにそれ、とマルタがつぶやく。エミルは、
「あははは……こっちの話……」
と、笑ってごまかした。
（コレットは僕たちの旅の話というより、ラタトスクが『まにあ』かどうかに興味があったみたい……）
本当に憎めない神子だよな、とエミルは思う。だが、コレットは今度は真剣に考えだ

したようだった。
「……でも、ラタトスクさんは目覚めたらどうするのかな？」
「異常気象を収めて、世界のバランスを整えてくれるんでしょ」
当然のことのようにマルタが答える。
「うん……、だけどいまの世界樹にはマーテルさまがいるから……」
コレットは、いまもあの場所で涼やかに葉を揺らしているであろう若樹を想った。
「……あ！　そうか、守護する樹がないんだ……」
気づいたエミルは、どうしたものかと考え込んでしまう。
「マーテルさまとふたりで守ればいいんじゃない？」
マルタが言うと、コレットはぱちんと手を叩く。
「そだね。みんなで仲良く守ればいいんだよね」
あははは、と少女ふたりが笑い出す。
「……」
すると、何度も話を遮られすっかり無視されていたテネブラエが、咳払いをひとつして、
「ところでマルタさま。儀式の準備は……」
と、水を向けた。
「ばっちり。いつでも準備ＯＫだよ」

マルタはみんなの前でアイーシャに習った作法の動作をしてみせようとしたが、
「……あれ？　なんかどんどん忘れそう……」
と、心許(こころもと)ないことを言う。
エミルたちは石舞台へ急ぐことにした。

石舞台に近づくと、上空にインセインが現れた。
エミルたちは飛竜の仔(こ)を使って、前と同じように怪鳥を退ける。魔物をひきつける何かがあるのだから仕方がなかったが、儀式を邪魔されるのは困る。
「マルタさま、新手(あらて)が来る前に儀式を」
テネブラエが珍しく早口になって、マルタを促した。
「うん」
杖を手にしたマルタが石舞台に上がる。
(新手が来る前というより、テネブラエはマルタが儀式の手順を忘れないうちにって思ったんじゃないかな……)
エミルは密かにそう思いながら、マルタを見上げた。
舞台の上に描かれた円陣の中央から、決められた方角に歩き、跪(ひざまず)いて杖を置く。立ち

上がって、今度は円陣の一部を杖で示す。その都度円陣は光を放った。
マルタは数回、場所を変えながら同じ動きをした。
「あれが巫女の儀式……」
神秘的な光に包まれたマルタを見ながら、エミルがつぶやくと、
「うん。以前は私たちの仲間だったリフィルって人がやったの」
と、コレットが言う。
「……仲間……」
（ロイドの仲間か……）
エミルの胸がざわつく。リフィルがどんな人物なのか知りたいという気持ちと、自分には関係ないのだという強い感情がせめぎあった。
ロイドの仲間など、無条件に憎悪の対象であるに決まっている——コレットに出会ってから、エミルは自信を持ってそうは言えなくなっている自分を感じていた。
舞台の中央に跪いていたマルタが、立ち上がった。強い光が円陣から立ち昇る。
そのとき、マルタの額が光の中にあってひときわ明るく輝いた。
「あっ！」
エミルは声をあげた。いつの間にか円陣の中に、文様を抱いたもうひとつの模様が描かれていたからだ。
石舞台へ上がって調べてみると、どうやらそこから地下に入れるようだった。

「どうして？　前はこんな入り口、なかったのに……」
コレットも足元を見つめ、驚きを隠せない。エミルは、
「いま、マルタの額にあるラタトスク・コアが光ったよね。なにか関係あるのかな」
と、テネブラエに訊ねる。
「ラタトスク・コアが反応するということは、ここにセンチュリオン・コアが存在するということです。儀式とコアの反応、両方がこの石舞台に作用したのかもしれません」
大役を終えたマルタは上気した頬で、
「なんでもいいよ。ここにセンチュリオン・コアがあるなら、ついでにそれもいただいちゃおう」
と笑う。
「なんだか盗むみたいな言い方だなぁ……」
横目でマルタを見ながらエミルが言うのに、
「ふふ、そだね」
コレットが笑った。

石舞台に描かれた入り口に立つと、エミルたちの目の前がフッと暗くなった。地下に

ある、ライナー言うところの施設に移動したのだった。

通路には石畳が敷かれている。明かりは壁に等間隔に描かれた模様——石舞台と円陣を模したような——から滲み出る光だけで、歩くのには不自由しなかった。

(これは……遺跡?)

あたりを見回しながら、エミルはシノア湖の湖底にあった洞窟を思い出していた。

マルタはそんなことは考えていないのか、ずんずん奥へと石畳を歩いてゆく。

「マルタ。ずいぶんスッキリした顔してるね」

ふたりが並んだとき、エミルはそう声をかけてみた。

「だってもう儀式やらなくていいんだもん。私、ああいう細かいこと覚えるの、超苦手なんだ」

アイーシャから教わったときのことを思い出したのか、マルタはため息をつく。

「前にやった人が一回で覚えたなんて、あれ絶対ウソだよ。私なんか三十回聞いても怪しかったもん」

「でも、ちゃんと覚えてたじゃない」

「だけどもう忘れちゃった」

さらっと言って、マルタは笑った。

(テネブラエの読みは正しかったな……)

エミルは苦笑した。

やがて、石畳の通路に突き当たりが見え、左右へ分岐する場所へ出た。彼らがどちらへ進もうか迷っていると、
「センチュリオン・コアの気配です」
テネブラエが言った。
「どうやらこれは風のセンチュリオン……、センチュリオン・ウェントスですね」
「ラッキー♪」
マルタが飛び上がる。
「ウェントスの気配があるってことは、まだロイドに取られてないってことだよね」
えっ、と声をあげたのはコレットだった。
「……ロイド？　——どうしてロイドが出てくるの？」
薄明かりの中でも、彼女が蒼ざめているのがわかる。
「そうだ。コレットにはルインが襲われた話してないんだった……」
マルタはエミルと顔を見合わせる。
「どういうこと？　私、ロイドを捜してるの。お願い、教えて！」
コレットの必死な様子に、
「……う、うん……。実は……」
エミルは、これまでの出来事をかいつまんで話した。
「ロイド……」

肩を落としたコレットは俯き、いまにも泣きそうに見えた。
「いなくなっちゃったと思ったら、センチュリオン・コアを集めてたなんて……」
「いなくなったって……どうして？」
マルタが訊ねる。
「……私たち、一緒に旅してたの。でも、半年前に急にいなくなって……」
「ああ、それでアイーシャさんのところで訊いてたんだね」
マルタは納得して頷いた。
（あのときコレット、『やっぱりロイド、ここにも来ていないんですね』って言ってた。きっとあちこち捜して歩いてるんだ……）
コレットは「うん」と小さく答えたきり、じっと黙り込んでしまった。

あれは、エクスフィア回収の旅の途中だった。
一日歩き回り、たいした成果も上げられずに宿へ戻ってみると、受付にロイド宛ての手紙が届いていた。
（ロイドはひとりで手紙を読んでた……私は、誰からの、どんな手紙なのかを訊ねなかった……。だって、まさかその夜のうちにロイドが私を置いてどこかへ行っちゃうなんて思わなかったから！）

朝になると、ロイドはいなくなっていた。コレットへの伝言はなく、宿の裏につないでおいたノイシュ——ロイドが犬だと言い張っていた古代の生物——も一緒に消えていたのだ。
すぐにイセリアの村に戻るべきだったと、あとからコレットは後悔したものだ。ロイドは急用でちょっと出かけただけですぐ戻って来ると思い、数日を宿屋で無駄に過ごしてしまったのだから。
イセリアのロイドの家を訪ねたコレットが目にしたものは、ロイドが急に戻ってきて彼の父親に預けていったというノイシュの姿だった——。

「ロイドはコレットの仲間だったんでしょ？　本当に何も聞いてないの？」
エミルの声に、コレットはハッと我に返った。
「……うん。それにロイドがふたりを攻撃したり、マーテル教会のみんなに命令してルインを襲わせたり……信じられないよ……」
「私たち、嘘はついてないよ」
マルタが言うと、
「うん……。わかってる。だから……よけいに……」
コレットはまた俯いてしまう。

「考えていても結論は出ませんよ、コレットさん」
テネブラエが声をかけた。
「いま私たちは、街の暴風を収めるためにここにいるのです」
「……ねぇコレット。私たちが信じられないなら……」
マルタが言いかけると、
「……ううん。違うの。そうじゃない」
と、コレットは否定する。
「ふたりのこともロイドのことも信じたいの……でもテネブちゃんの言う通りかも。いまやるべきことは、街の人たちのためにここを調べることだもんね。ロイドのことはこの後でちゃんと考えればいいんだよね……」
彼女は懸命に自分を励まし、明るくいようと努めているように見えた。
(僕たちのことを信じたいって……!?)
エミルは驚いた。
「……コレットは僕たちも信じてくれるの？　ロイドの仲間なのに？」
「だって、ふたりは私の友達だよ。友達のことは信じるよ」
事もなげにコレットが頷く。
「友達……でいいの？　僕なんかが？」
「どうして？　エミルとマルタだから友達でいたいんだよ」

「あ……ありがとう……」

（……また友達ができた……！　信じられない）

エミルは、自分がコレットを信じなかったことなど棚に上げ、うれしくて震えそうになった。が、マルタのわざと尖らせた声にびくっとする。

「私はまだ友達だなんて認めてないよ」

「あ、そうだった。でもいいの。私はマルタのことお友達だと思ってるから」

にこにことコレットは応えた。

「……ところで、私はいつになったら正しい名前で呼んで貰えるのでしょうか」

テネブラエがぽつりとつぶやいた。

ときどき暗がりから襲ってくる魔物を退けながら、エミルたちは地下遺跡の奥へと進んだ。

「ここって、石舞台の下なんだよね？　遺跡の中に遺跡があるなんて不思議……」

あらためてマルタが感想を漏らすと、あちこち見回していたコレットが、

「……やっぱり似てる」

と、言う。

「え？　似てるって何が？」
「えっと、世界再生の旅でバラクラフ王廟って遺跡に行ったことがあるんだけど……そこにちょっと似てるみたい」
　コレットはエミルに答えた。
「なにか関係があるのかな？　調べてみようか？」
　マルタが壁際に置かれた調度品に近づこうとすると、
「マルタさま」
　と、テネブラエがすかさず制した。
「好奇心旺盛なのはよろしいですが、そういうことはやるべきことを終えてからにしましょう」
　マルタはムッとしてしまう。
「テネブラエってときどき口やかましい……」
「うん。ちょっとジジ臭いかも……」
　エミルが同意すると、センチュリオンは逆上した。
「か、加齢臭がするというのですか！」
　だが、そのときコレットが、
「だいじょぶ。テネブちゃん、カレーの匂いなんてしないよ」
　と、満面に笑みを浮かべる。

「……」

思わずマルタと顔を見合わせたエミルは、あわてて話題を変えた。

「と、ところでテネブラエ。バラクラフ王廟って、どこにあるの？」

「……たしか、この街から北東に位置する島だったと思いますが」

島か、とエミルは意外に思った。

「そんな離れた場所とこの様式が似てるって、変なの」

「世界がシルヴァラントとテセアラに分かれていたころは、アスカードのすぐ近くにあったから……」

コレットが説明すると、テネブラエは、

「いえ、世界がふたつに分けられる以前から、このあたりには大きな国があったんです。様式が同じなのは、その王国の領土がそれだけ広かったということですよ」

と、年の功を見せつけた。ふたりとも、加齢臭の話は忘れてしまったようだ。

「もしかして、ここととバラクラフ王廟が繋がってたりして」

マルタが面白そうに言うと、テネブラエは、

「可能性はありますね」

と頷いた。

もしそうだとしたら、世界はすごい変わりようだな、とエミルは思う。そして、いつか機会があったらバラクラフ王廟を見てみたい、と考えた。

ウェントスのセンチュリオン・コアの気配を追って進むにつれ、あたりに魔物が増えてきた。
「なんか、魔物、多いね。これってウェントスのコアのせい？」
スピナーを手から離せないマルタが、あたりを見回しながら言う。エミルも、いくら斬り捨てても出現する魔物の多さにうんざりしていた。
「センチュリオン・コアの状態だと力の制御ができなくて、魔物を呼び寄せちゃうんだっけ……」
そうですね、とテネブラエが頷いた。
「おそらく石舞台のインセインもウェントスの暴走に引き寄せられていたのでしょう」
石畳の通路の陰から、また魔物の荒い息づかいが聞こえてきた。エミルはぶるっと身を震わせる。
「うう……怖いけど……頑張ろう。勇気は夢を叶える魔法だ」
「それは？　センチュリオンの誓い？」
コレットが首を傾げた。
「あ……ううん。僕のお守りの言葉」

「いい言葉だね」
何も知らないマルタがにっこりする。
(リヒターさんの言葉のおかげで、マルタとも友達になれたんだ)
エミルはシノア湖での出会いを思い出す。
「男ならはっきりする！　……も、入れとこうか？」
一瞬ぽかんとしたマルタが、
「……もう……馬鹿！」
「痛てて！」
照れて思い切りエミルの背中を叩いた。

「あ、あれ……」
エミルが足を止める。行く手の奥に祭壇が見えた。その上に蕾のような形の、緑色に輝くコアが浮かんでいる。
「ウェントスのセンチュリオン・コアです。間違いありません」
テネブラエが断言したとき、コレットが「あっ」と声をあげた。
「あれは……シルフの偽者さん!?」

祭壇の前の天井近くに、巨大な魔物が出現したのだ。まるでセンチュリオン・コアを護(まも)るように、エミルたちを見下している。
「ええっ!? 前にコレットたちが倒したんじゃないの？」
エミルは驚いて訊ねた。以前、石舞台に風の精霊の偽者が現れたときの話をコレットから聞いていたからだ。
「うん……。ツァトグなら倒したはずだけど……」
鋭い角(つの)、こうもりのような翼、大きく曲がった一本の脚(あし)——。コレットの目には、やはりあのツァトグそっくりに映る。
だがそのとき、テネブラエがおかしなことをつぶやいた。
「……あれは……ウェントス……」
「どういうこと？ 偽の風の精霊じゃないの？」
いったいどっちなの、とマルタが言う。が、
「姿は違います。ただ気配はウェントスに似ている……」
テネブラエも困惑を隠せない様子だった。
どちらにせよ、この魔物を退けない限り祭壇に近づくこともできない。エミルたちは再生したツァトグ——ツァトグ・プライムに対峙した。
どこから現れたのかアックスピークが二体、エミルたちの邪魔をするように飛び回る。
「まずはこっちから片付けちゃおう」

マルタがアックスビークの注意を引くと、コレットももう一体を相手に天使術を使う。ラタトスクモードに変わったエミルは、翼で挑発してくるツァトグ・プライムを下から睨みつけた。

巨大な魔物は、意外なほどの敏捷さで、エミルと側にいるウルフを攻撃してくる。ツァトグ・プライムがサイクロンで起こした風は、ウェントスのコアまで吹き飛ばしてしまうのではないかと思うほど強烈だった。

エミルは切っ先を風に翻弄され、狙いを定めることができない。

「くっ」

剣を振るいながらも、彼はじりじりと壁際に追いつめられていった。息が上がる。

そのとき、アックスビークを倒したマルタがこちらへ走ってきた。ファーストエイドのおかげで持ち直したエミルは、ギリッと歯軋りすると床を蹴った。

「これで終わりだ！　魔王地顎陣――！」

大地の力が噴き上がり、魔物の巨体を包み込む。

石舞台の地下遺跡に、ツァトグ・プライムの絶叫が響き渡った――。

「いまの奴、どうしてまた復活してたんだろう」



呼吸を整えたエミルは、ツァトグ・プライムのいなくなった祭壇に目をやりながら首をひねった。
「もともとシルフの偽者とやらは、センチュリオン・コアの暴走から生まれた怪物だったのでしょう」
テネブラエが言い、コレットに向き直る。
「あなたがたに倒されて力を失ったものの、コアは長い時間をかけて、再び怪物を生み出した——そんなところでしょうね」
マルタは、ここへは届かない地上の風を思い出す。
「これで、アスカードの風の暴走は収まるかな？」
「はい。ウェントスを孵化させれば」
テネブラエが頷いた。祭壇では何事もなかったように、緑色のコアが美しく浮かんでいる。
「私、取ってくる」
突然走り出したコレットに、
「あ！　危ない！」
マルタがあわてて叫んだ。
「……なにが？」
きょとんとして振り向いたコレットの手には、すでにウェントスのコアが大切そうに

握られていた。
「センチュリオンはコアの状態だと休眠しています」
テネブラエがスーッとコレットの近くまで移動する。コレットは、
「……そうなんだ」
と、コアに目を落とす。
「故に、力が制御できずに暴走したりして、魔物を呼び寄せたり自然を狂わせてしまう――。それほどの存在を人間が持っていて正気でいられると思いますか？」
「え!?」
驚いて顔を上げるコレットに、マルタが駆け寄った。
「普通の人がセンチュリオン・コアを持っていると、その暴走に巻き込まれて心が壊れてしまうんだって。だから、触らない方がいいよ」
彼女はコレットに「ちょうだい」と手を差し出した。
「う、うん。勝手なことしてごめんね。でもマルタは平気なの？」
コアを手渡しながら、コレットが訊ねると、
「私はラタトスクの加護があるから平気。それにすぐ孵化させちゃうし」
と笑った。
「さあ、マルタさま。センチュリオン・コアの解放を」
「うん。わかってる」

マルタは深呼吸をひとつすると両手を広げ、持っていたコアを解放してやる。コアはふわりと上昇し始めた。

エミルもコレットも口をきかない。ただ幻想的な光景に見入っていた。

コアが輝きを増した。強烈な光に、エミルたちは思わずまぶたを閉じた。再び目を開けたとき、コアは透き通る球形の宝石に変わっていた。内包する文様を美しく輝かせながら、ゆっくりマルタの手の中に戻ってくる。

「これでウェントスが目覚めました――。あの者が力を取り戻せば、ラタトスクの騎士たるエミルも新たな力に目覚めるでしょう」

テネブラエは静かに、だが満足げにそう告げた。

あれだけ厚く垂れ込めていた雲は、一体どこへ消えたのだろう。石舞台を見下す空は青く、風は穏やかだった。

「やった！　もうインセインはいないみたい。これで変な突風も起きないね」

外の空気を思い切り吸い込んで、マルタは気持ち良さそうに体を伸ばした。エミルも

思わずその笑顔にひきこまれる。
「マルタ、よかったね」
「うん」
マルタはコレットにも笑顔を向けようとしたが、ふと真顔になった。
「……コレット。さっきから元気ないね？」
「……え？」
コレットは心ここにあらずといった様子でマルタを見た。エミルは、そういえばコレットは祭壇から戻る途中もずっと黙っていたっけと思い出し、
「……もしかして、コアを持ってると心が壊れるってこと、気にしてるの？」
と、訊ねた。
「大丈夫ですよ。あれぐらいの時間触っていただけなら……」
テネブラエの言葉に、
「違うの！　私じゃないの……」
コレットは激しく首を振る。
「ロイドのことなの……。ロイド、センチュリオン・コアを集めてるんでしょ？　だから……」
「……」
（ロイドの心が壊れてしまうんじゃないかって心配してるのか……）

エミルは胸が痛くなった。

「コレット。僕たち、ロイドを追いかけてるんだ」

心のどこかで「やめた方がいいよ」と声がする。

(マルタに相談もせずこんなこと……マルタはコレットをまだ許してない。勝手なことはしない方が……)

それでも、エミルの唇は動き続けた。

「センチュリオン・コアがどこにあるかわからないから、ロイドを追いかければその先にコアがあるはずだから……。だから……一緒に行こうよ」

「！」

コレットの顔に驚きが走る。だが、エミルは重ねてコレットを説得しようとした。

「それで、ロイドを見つけたら、ちゃんと危ないってことを説明してそれで……」

これは僕の意志なんだ、と彼は思う。

(マルタがコレットを許せなくても、いまはこの方がいいと思う……)

「……ありがとう、エミル。だけど……私、ここでふたりとお別れする」

えっ、と意外な返答にエミルは声を上げた。

「どうして？　ロイドのこと捜してるなら……」

マルタも目を見張った。エミルがコレットに同行を勧めたことは、なんとも思っていないようだ。エミルはほっと胸を撫で下ろす。

「ロイドはレアバードっていう空を飛ぶ機械を持ってるの」
コレットは、エミルたちの好意に、言葉を選んでいるように見えた。
「だからふたりみたいに陸路を旅するだけじゃ追いつけないかもしれないんだ……。だから私は私なりにロイドを捜してみる。ほら、私、空飛べるし」
そう言ってコレットは天使の羽根で石舞台の上をひとまわり、飛んで見せた。戻ったばかりの青空が羽根から美しく透けている。
「……うん……」
「コレット……」
マルタとエミルは、急に淋しくなってしまう。
「……あのね。いろいろ……ホントにごめんなさい」
コレットはふたりのところに舞い降りてくると、深々と頭を下げる。
「取り返しはつかないけど、せめてできる限りのことを……」
「これ以上謝らないで！」
たまらなくなって、マルタが遮った。
「……そりゃ、正直言うといまだってお母さんのこととか……許せない。だけど……あなたを見てわかった。悪意を持ってパルマコスタを巻き込んだわけじゃないって」
これがマルタなりの結論なんだな、とエミルは思う。
「マルタ……」

コレットの声が震える。
「だって、こんな天然のお人よし、見たことないもん」
「ありがとう……」
「友達でしょ」
「うん！」
ようやく友達同士になったふたりは、お互いの手を取ると微笑みあった。
「美しい光景ですね……」
「否定はしないけど……そういうところがジジ臭いって言われちゃうんだと思うよ」
エミルは苦笑し、テネブラエと並んでふたりを見守る。
僕もマルタのようになれる日が来るんだろうか、と彼はため息をついた。

「……それでは、これで石舞台は安全なのですな！　ありがとうございます」
「いいえ、お役に立ててよかったです」
にっこりするコレットの頬は、暖炉の炎の照り返しで上気しているように見える。

日

差しも無事戻ったので、これからは暖炉の出番も少なくなるに違いない。
「そこのふたりも、神子さまと共に街のために尽くしてくれてありがとう」
「い、いえ……」
礼を言われ慣れていないエミルは、ついもじもじしてしまう。
彼とマルタは、アスカードの町長に風の暴走の原因を取り除いた報告をしに行くと言うコレットについて来たのだった。
「あの、町長。ヴァンガードだちは……」
マルタが真剣な表情で訊ねる。
「……あらかた出て行ったが、まだ気をつけた方がよかろうな」
町長は窓の外にちらりと目をやり、
「恥ずかしい話だが、この街の住人もヴァンガードに感化されている。神子さまやマーテルさまをないがしろにする者が増えてしまって嘆かわしいことだ……」
と話した。
「……テセアラとシルヴァラントの文明レベルは……差がありすぎます。ヴァンガードが謳うシルヴァラントの解放は魅力的に聞こえるんでしょうね」
マルタが言うのに、コレットは肩を落とす。
「……マーテル教会もテセアラを偏重する人たちが増えました。ごめんなさい、私の力不足で」

するど町長はあわてて首を振った。

「……違います。それは違いますぞ。神子さまは二度もこの街を救ってくださった。どうかご自分を責めないでください」

ありがとうございます、とコレットは短く応えただけで、すぐに町長のもとを辞した。

「あ、それじゃ僕たちも……失礼します！」

エミルとマルタが急いで追いかけると、コレットは町長の家を出たところにふわりと浮かんでいた。

「……それじゃ、私、そろそろ行くね。ふたりともありがとう」

「もう行っちゃうの？」

エミルが見上げる。

「うん。ロイドのこと心配だから……」

「ヴァンガードに気をつけて」

マルタが手を振った。

「エミルとマルタもね」

「またお会いできるのを楽しみにしています」

テネブラエはコレットと同じ高さまで浮かび上がると、礼儀正しく別れを告げた。

「ありがとう、テネブちゃん！　それじゃあね！」

コレットはぐんと高く上昇し、一度だけエミルたちを振り返る。そしてとびきりの笑

顔を見せると、そのまま街を囲む山の向こうへと姿を消した。
「……さ、私たちも行こう」
「うん！　……って、どこへ？」
コレットが見えなくなってもまだ手を振っていたエミルは、あわてて聞き返す。
「とりあえずロイドの故郷で何か聞けないかなって思ってるんだけど」
「ロイドの故郷って……イセリア？　僕もそれでいいよ」
ふむ、とテネブラエが頷いた。
「そうなると、船に乗らなければいけませんね」
イセリアに行くためには、港町のパルマコスタからイズールド漁港まで船に乗る必要がある。まずはパルマコスタへ行くために、エミルたちはハコネシア峠を越えることにした。

ハコネシア峠は、かつてマーテル教の旅業をする人々で賑わっていた場所だった。今は関所も形ばかりで、旅人は通行証無しで行き来できるようになっている。

エミルは、パルマコスタからルインのアルバの家に向かったときのことを思い出していた。両親を亡くした悲しみと失望の中、ここを越えたときのことをまったく覚えていないのだ。竜車に乗っていたせいで、ハコネシアがどれ程の坂かもよく知らなかった。
「すごい坂なんだね……」
「でももう頂上だよ」
マルタは徒歩で移動することが多いのだという。
汗を滲ませているエミルとは対照的に、軽い足どりで関所にさしかかった。
「っ！　隠れて」
マルタに腕を掴まれ、エミルは建物の陰に押し付けられる。
「な、なに……!?」
「しっ。ほら」
エミルがそっと身を乗り出してみると、ガラクタを並べた小屋の前に、見覚えのある顔が見えた。
（あ！　サドの……）
ヴァンガードのアリスが鞭を手にして立っている。そこへ男がひとり、息を切らせて走り込んで来た。
（ホーク！）
「ただいま伝令がありました！」

ホークは直立不動で報告を始めた。
「神子はルイン方面に向かったようです」
「むー。そっちはデクスの担当じゃない。つまんないの～」
アリスはぷぅっと頬を膨らませる。
「じゃあこっちはセンチュリオン・コアに集中しなくちゃ……」
(もうコレットのことが知れちゃったんだ)
エミルはひやりとする。ということは、自分たちの情報も握られているのではないだろうか。案の定、ホークは続けた。
「あの、それでマルタさまはこちらに向かったそうなのですが……」
「マルタちゃんが！」
アリスは目を輝かせて飛び上がる。
「うう～ん、じゃあセンチュリオン・コアはホーくんに任せるわね♡」
鞭をぴしっと向けられたホークは、「はっ」と敬礼した。
「アリスちゃんはパルマコスタでマルタちゃんを待ち伏せしちゃうわ♡」
彼女はさっそく出発の準備をするつもりなのだろう。鞭をペチペチ鳴らしながら、うれしそうに行ってしまった。
「……マルタ。いまの聞いた？」
エミルは体から力が抜けてしまう思いだった。ロイドを捜す旅の、せっかくの再出発

だというのに、今からこれでは先が思いやられる。
仕方ないよ、とマルタもため息をつく。
「なるべくアリスに見つからないようにパルマコスタに行くしかないね」
「そうだね……」
ふたりはヴァンガード兵がすべて立ち去るのを待って、峠をそっとパルマコスタ側へ抜けた。

「うっ！」
突然、エミルの体を硬直が襲う。
「エミル？」
少し先を歩いていたマルタが振り返ったが、その声も姿も耳に入らない。目の前には薄闇が広がっている。エミルはどこか別の世界に放り込まれたような感覚にとらわれていた。
（う、うわ……）
左に斧、右に剣を持った男が、両手を振りかざして襲ってくる。男は、リヒターだった。

「うわあっ……！」
リヒターの顔が間近に迫った。彼の目に燃えているのは、間違いなく真剣な殺意だ。
「や、やめて……」
そのとき、マルタが駆け寄り、彼の両肩をがっちりと掴んだ。
「エミル！　しっかりして！」
がくがくと体を揺すられて、エミルはやっと正気に戻った。
「マルタ……」
（ぼ、僕、いったい——）
リヒターではない、マルタが見える。彼女の肩越しに咲く花、みずみずしい草が見える——。
「いきなりどうしたの？」
マルタに覗き込まれ、エミルは背を向けると俯いた。
「……わかんない。なんかへんな映像が見えて……。白昼夢、なのかな……」
テネブラエが姿を現し、エミルを見つめる。
「……白昼夢？　歩きながら夢見るなんて変だよ。少し休もうか？」
心配げなマルタの声に、
「……ううん、大丈夫。行こう」
彼は精一杯なんでもない風を装いながら振り向いた。だが、顔が強張（こわば）って笑うことが

できない。

「だけど……」

まだ納得がいかない様子のマルタの横から、テネブラエが口をはさんだ。

「見たところ、それほど顔色も悪くありませんし、大丈夫でしょう」

「ほら、テネブラエもこう言ってるし」

こんなところでぐずぐずしていたら、ヴァンガードに見つかってしまうかもしれない。それに、恐ろしい映像を見せたこの場所から、一刻も早く立ち去りたかった。エミルはようやく、ぎこちない笑みをうかべることに成功した。

「本当に、大丈夫だから」

「……うん。わかった。でも無理しないでね」

マルタはしぶしぶ承知したが、歩き出したエミルの横から離れようとしない。

ふたりの後ろに浮かんでいたセンチュリオン・テネブラエは、エミルの姿をじっと見つめていたが、やがてフッと姿を消した。

5

港の方角から吹いてくる潮風が、エミルの髪を撫でた。夜を待つ真新しい灯台が、日の光にまぶしく輝いて見える。
「……半年ぶりか……」
パルマコスタの街に入ると、エミルはぽつりとつぶやいた。
「……感傷に浸るのは後。まずはこの街にロイドが立ち寄ったか情報を集めなきゃ。でしょ？」
「そ、そうだね」
マルタに言われ、エミルはあわてて頷いた。
「お互い知らない街じゃないし手分けしていこう。あとで酒場で集合ね」
うん、と返事をしてから、エミルは用心深くあたりを見回す。いまいるのは見通しのいい街の広場だが、ヴァンガードは見当たらないようだ。
「でも、アリスには気をつけてね」
あの鞭を思い出してマルタを気遣ったのだが、彼女はエミルがまた怖がっているとカ

ン違いしたのだろう。
「あ、そっか。テネブラエ、一緒に行ってあげて」
側にいたセンチュリオン・テネブラエに気軽に頼み込む。
「マルタ、そういう意味じゃなくて……」
「いいの。それじゃあね！」
マルタは手を上げ、ふたりから離れて行く。
「昔のお友達にも会えるといいね！」
「……う、うん……」
（昔の、お友達……？　え……、あれ……？）
エミルが何かを思い出そうと試みたとき、
テネブラエが声をかけてきた。エミルの思考は止まり、ハッと現実に立ち戻る。
「では、参りましょうか」
「いいの？　マルタはラタトスク・コアを持ってるんだよ」
これが言いたかったんだとばかり、彼はテネブラエに一気に伝える。
「それに、これじゃあまるで僕が守られてるみたいだよ。一応、僕がマルタを守る役どころなのに」
だが、テネブラエはすまして言った。
「マルタさまはコアをお持ちだからこそ、どこにおられるかすぐわかります。それより

怖がりなあなたのほうが心配です」
「あ……そ、そう」
いつまでたっても進歩がないな、とエミルは情けなくなる。せめてロイドの情報を集めよう、と彼は歩き出した。
血の粛清以来、火をかけられたパルマコスタの街の復興はめざましいように見える。灯台だけでなく、焼け落ちてしまった家屋や破損した石畳もほとんど元通りに修復されていた。港町らしく、立ち話をしている漁師たちの姿も目に付いた。
リヒターの姿を見たのは、教会の前を通りかかったときだった。
「あっ！」
「おまえは……エミルか!?」
階段を降りて広場に出て来ようとしていたリヒターも、驚いて足を止める。
「リヒターさん！　どうしてこんなところに……」
「……それはこちらの台詞だ。こんなところで何をしている？」
にこりともせずに、リヒターは訊ねた。エミルは、
「旅を……センチュリオン・コアとロイドを捜して……」
と、応えたが、気安く歩み寄ることはできない。その場に突っ立ったまま、
「あ、あの、それより怪我は大丈夫なんですか？」
おずおず聞くのが精一杯だった。

「……まだ疼(うず)くがこの俺が無様(ぶざま)だったせいだ。仕方がない」
リヒターは背中の傷の存在を確かめるように肩を回してから、
「それにどちらかというと、あんな頭の悪そうな奴に負けたという心の傷の方が痛む」
と、苦い顔をしてみせる。
「……あ、すみません……」
「――冗談だ」
「え……。あ、すみません……」
エミルは重ねて謝罪の言葉を口にしてしまう。赤い髪の青年は眼鏡(めがね)を直しながら、ため息をついた。
「俺はむやみに謝るなと言わなかったか？」
「あ！　ごめ……じゃなくて……。そうでした……」
(ああもう！　なんでリヒターさんの前だといつもこうなっちゃうんだろう……)
エミルはすっかり自己嫌悪に苛(さいな)まれてしまい、灯台へ続く通路の方から歩いてくるアリスに気づくのが遅れた。
「あ、リヒター♡　みっけ♡」
エミルはぎょっとして顔を上げる。
(サ、サドの人……!?)
「リヒターもマルタちゃんを捜して……あ!!」

アリスもエミルを認めると、
「あなた……確か、マルタちゃんのペット！」
舌なめずりするような表情で近づいて来た。リヒターがひらりと階段を飛び降りると、エミルの前に立つ。
「アリス。こいつは俺の知り合いだ」
「かばうの？」
彼女は上目遣いにリヒターを見、エミルへちらりと視線を投げた。
「その子、ちょ～っと可愛がってあげたら、すぐマルタちゃんの居所を教えてくれると思うけど♡」
リヒターは冷たい眼差し(まなざ)をアリスに向け、
「――俺の知り合いだと言っている。その意味がわからないなら……」
と剣を抜き、上段に構えてみせた。
「……もう、怖いなぁ。わかったわよ。でもそのペットちゃんがマルタちゃんと一緒にいるときには容赦(ようしゃ)しないから」
唇を尖らせたアリスは、すぐにとろけそうな笑顔になる。
「それに、ここにマルタちゃんがいることもわかったしね。うふふ♡」
上機嫌で鞭を振りながらアリスは行ってしまう。早くこのことをマルタに知らせなければと思いながら、エミルはどうしてもリヒターに聞かずにはいられない。

「リヒターさん……。リヒターさんもヴァンガード……なんですか」
そうだ、とこちらに背中を向けたまま青年は答えた。
「……あなたたちはラタトスク・コアを使って何をしようとしているんですか」
エミルは一歩、リヒターに歩み寄る。
「シルヴァラント王朝の復活……だそうだ」
「シルヴァラント、王朝……？」
その言葉に、エミルは首を傾げる。
「学校で習ったことがありますけど、それって八百年も前に滅んだんじゃ……」
「──エミル。センチュリオン・コアのこともラタトスクのことも忘れろ」
「え？」
リヒターは振り向かない。彼の目には堤防の先の荒れた海が映っているはずだった。
「……ヴァンガードはラタトスク・コアだけではなく、センチュリオン・コアも探している。この一件におまえを巻き込みたくない」
「…………」
エミルは返事ができなかった。リヒターはただ自分のことを心配して言ってくれているのだろうか？　何故だろう、そんな単純なことではない気がする。
「ふん。素直に頷かなくなったのは進歩、か」
少年の沈黙に、リヒターは皮肉っぽく唇を歪めた。

「だが俺も退くことはできない。俺はマルタからラタトスク・コアを奪う。そのためにあいつが死ぬとしてもな」
とうとう一度もエミルを振り向くことなく、リヒターは足早に歩み去った。エミルはその背中を見送っていたが、
「いけない。すっかり話し込んじゃったよ。早くマルタにサドの人のこと知らせなくちゃ!」
と、テネブラエに言う。
「エミル、サドではなくアリスでは」
「なんでもいいよ。それより、マルタはどこ?」
ほんのわずかの時間、精神を集中してラタトスク・コアの気配を調べていたテネブラエは、
「……酒場のようですね」
と、告げる。
「わかった」
(もう酒場に行ってるんだ、マルタ。人目に付きやすい場所で待ち合わせなんかするんじゃなかったよ!)
エミルは、ヴァンガードに尾行されていないか注意を払いながら、テネブラエについて走り出す。

「ねえ、テネブラエは知ってたの？　リヒターさんがヴァンガードだってこと」
「はい」
「じゃあ、マルタとはもともとの仲間じゃない。それなのにラタトスク・コアのために命まで狙うなんて……」
エミルとすれ違った中年の女が、びっくりして振り返る。彼がひとりでしゃべっているように見えたからだ。
「マルタさまも言っていたでしょう。ヴァンガードは変わったと。彼らは今や敵なのです。それだけのことです」
「でも……」
テネブラエが急に空中で動きを止めた。
「ぶっ」
エミルは、嫌というほどセンチュリオンの横腹に顔を埋めてしまう。
「エミル！　彼はマルタさまを殺そうとしています」
「……わ、わかったよ……」
確かにそうだ、とエミルはわかっている。ヴァンガードは敵――。だから急いでいるのだ。
「わかったから早く酒場へ」
「もう着きました」

「え」
顔をあげると、くっくっと笑っているテネブラエと目が合った。

酒場の扉には、まだ新しい木の匂いが残っているようだった。エミルは少し緊張しながら店の中に入った。
驚いたことに、外はまだ日が高いと言うのに、旅人や漁師たちでけっこうな賑わいだ。
「あっ、エミル。情報は集まった?」
棚に並べられたパルマコスタワインを見ていたマルタは、すぐにエミルを見つけると、近づいてきた。
近ごろの天候不順のせいで、若いパルマコスタワインの評判は決して芳しいものではない。だがワイン職人は細々と仕事を続けており、世界再生や血の粛清を潜り抜けて来たものには高値がついているのだった。
「マルタ」
「こっちはぜんぜん駄目。ロイドが来た気配はないみたい」
エミルはマルタを酒場の隅に連れて行くと、
「それより大変だよ。サド……じゃなくてアリスに会ったんだ。リヒターさんにも」

と、早口で状況を説明した。
「本当？」
「ああ。それより……リヒターさんもヴァンガードだったんだね」
マルタは一瞬息をのむと、「ごめん」と素直に謝った。
「……なんかエミルってばリヒターのこと信頼してるみたいだったから……言えなくて」
「あ……ありがとう。気を遣ってくれて」
「ううん。はっきり言っておけばよかった。ごめん……」
マルタの落ち込みように、エミルは自分が悪いような気分になる。
「いいよ。……それよりアリスに見つかる前にイセリアに向かった方がいいんじゃないかな」
「オッケー。私もそう思う。じゃあ港に行かなきゃだね」
ふたりの相談がまとまりかけたときだった。
「あんたたち、港に行くって言ったかい？」
突然、背後から声がした。エミルは飛び上がる。
「え？　は……はい……」
（なんだ……。ヴァンガードじゃないや）
声の主は若い漁師だった。ワインではない、安酒の罎（びん）を手にしている。エミルはほっ

とした。

「船なら出ないと思うよ。この数週間、大シケでね」

そう言って若者は酒をあおる。

(そうか。だから街に漁師の人たちがたくさんいるんだな)

エミルは納得した。マルタは、

「そんな！　どうにかならないんですか」

と、昼の端から酒を垂らしている男を必死の表情で見上げた。

「さあねぇ」

漁師の若者は首を傾げ、

「どうしてもっていうんなら、総督府(そうとくふ)のドア夫人に頼んでみたらどうだい」

と言う。

「ドア夫人……ですか……」

急に勢いをなくしてしまったマルタに、

「マルタ、どうかしたの？」

エミルが訊ねると、彼女は力なく首を振る。

「……ううん、なんでもない。総督府に行ってみよう、か」

「う、うん……」

一体どうしたんだろうと思いながら、エミルは酒場を後にした。

総督府は幾たびもの災厄から逃れ、その堅牢な姿を保っていた。細かい修復のあとはみられるものの、パルマコスタの象徴のひとつであることに変わりはない。

総督亡き後、ひとりですべてを取り仕切っているドア夫人は多忙だ。エミルとマルタは執務室に通されたものの、しばらく待つことになった。

「……嫌なの？　総督夫人に会うの」

エミルは、元気のないマルタに思い切って訊ねてみる。

「え？」

「だって、さっきからため息ばっかりだよ」

「うん……いろいろ……迷惑かけたから」

マルタはまたひとつため息をつく。

「ほら、ヴァンガードがこの街で集会を開いたから……」

血の粛清か、とエミルは頷いた。

「けど、あれは確かにヴァンガードがきっかけかもしれないけど、結局は力で押さえつけようとしたロイドとマーテル教会が悪い……」

あのね、とマルタが遮る。

「あのね、エミル。私の」
パパ、と言いかけたとき、奥の扉が開いた。上背（うわぜい）のある、美しい女性が足早に入ってくる。ドア夫人だった。その髪は金髪で、鮮やかな緑色のドレスによく映えている。
「……あら、マルタ！　あなた、マルタ・ルアルディね？」
夫人はマルタの顔を見るなり、明るい声をあげた。
「総督夫人、お久しぶりです」
「……血の粛清以来ね」
しみじみと総督夫人はマルタの目を覗き込んだ。マルタは思わず顔を伏せる。
「あのときは……父がご迷惑をおかけしました」
「……あなたはなにも悪くないわ」
マルタを責めるどころか、夫人の口調（くちょう）は慈愛に満ちて優しい。エミルはほっとしながらも、マルタのお父さんが何かしたんだろうか、と疑問に思った。
（それでマルタはここに来るのが嫌だったのかなあ……）
「それより今日はどうしたの？」
「船……船を出して欲しいんです。私、彼――エミルとイズールドへ行きたくて……」
マルタの視線を辿り、
「エミル……」
夫人がエミルに目を向ける。マルタは、

「あ、そうか。エミルもここの生まれだからご存知ですよね」

と微笑む。

「エミル……というと、エミル・キャスタニエ？　レイソルの息子の……」

「そ、そうです」

エミルが頷いても、ドア夫人は怪訝（けげん）そうにエミルの顔を見つめるだけだった。

「どうかしましたか？」

マルタの問いかけに、夫人は額に手をあて、

「……嫌だわ」

とつぶやいた。

「私も歳をとったのかしら。なんだか印象が……。ごめんなさいね、エミル」

「い……いえ……」

（僕って存在感ないのかな……）

それとも誰かと間違えているのだろうか、とエミルは思った。

（きっと、ドア夫人はもっと活発で、うじうじしてない男の子と僕をカン違いしてるんだ）

総督夫人はすぐにマルタと話の続きを始める。

「それと船のことだけれど、このままでは私でもどうにもならないわ。ただ……」

「なにか方法があるんですか？」

マルタが訊ねる。
「ええ。エミルのお隣に住んでいた漁師のトマスさん、覚えているかしら」
夫人の問いに、
「トマス……さん……。漁師……」
エミルは口の中でもごもごと繰り返す。
「彼が、海のシケの原因がわかったといってカミシラ山地の王朝跡へ出かけたまま行方不明になってるの。トマスから話を聞ければ……」
「つまり、私たちがトマスさんを捜せばいいんですね」
話をまとめたマルタに、夫人はとんでもないといった表情になる。
「あら、カミシラ山地は危険よ。ちょうど、捜索隊を派遣するところなの。あなたたちはここで待っているといいわ」
だが、マルタは、
「どうしよう、エミル。ここで待っててもアリスと鉢合わせするだけだよね」
と、水を向ける。
「……え、もしかして……行くの？」
「え!?　行かないの？」
思いきりびっくりされて、エミルは後ずさる。
「わ、わかったよ。行くよ。……怖いの嫌だけど……」

マルタは「ごめんね」と彼に言ってから、夫人に向き直る。
「私たち、トマスさんを捜してみます」
「……止めても聞かないという顔ね」
ふたりのやりとりを見ていた夫人は苦笑し、
「わかったわ。でもくれぐれも無理はしないようにね」
と、エミルたちを執務室から送り出してくれた。

総督府から外に出ると、午後の日差しが強くなっていた。
「うわぁ、眩(まぶ)しい……！」
と、見上げようとした空から殺気が降ってきた。
エミルはハッとマルタの前へ出ると剣を抜く。金属のぶつかり合う音が響いた。
「……やはり、かばうか」
（リヒターさん……!?　待ち伏せしてたなんて……！）
リヒターの左手の斧を止めた剣に力を込めながら、エミルは驚きに目を瞠(みは)る。
「エミル！　ありがとう……」
リヒターは少年の肩越しに、頬を染めるマルタを見た。

「ぼ、僕はマルタを守るためにラタトスクの力を借りる契約をしたんです。だ……だから、たとえあなたでもマルタを傷つけさせるわけにはいきませんっ！」
ぐっと上目遣いに睨みつけてくるエミルの言葉に、
「……あんな奴と契約しただと⁉　馬鹿め！」
リヒターは思わず声を荒らげた。
「ば……馬鹿って……」
鼻白むエミルが唇をわななかせたときだった。リヒターは前を向いたまま、下ろしていた右腕をさっと動かした。抜き身の剣が、ほとんど同時に飛んできた別の剣を激しく弾く。弾かれた剣はほとんどもとの軌跡を辿り、石畳に刺さった。
「悪ぃ、悪ぃ。ちょっと手が滑っちまってねぇ～」
へらへらした口調に、三人はいっせいに声の主を見た。長く伸ばした赤い髪を潮風に遊ばせた、いかにも軽そうな若い男だ。
彼は真っ直ぐエミルたちに近づいてくると――途中で石畳から剣を抜くのは忘れなかった――、
「怪我はないかい？　愛しの子猫ちゃん」
男たちには目もくれず、マルタの手をとるとくるりと一回転させる。それから自分の胸のそばに引き寄せた。
「貴様はまさか……」

リヒターのつぶやきを、彼は聞き逃さなかった。
「おや、俺さまをご存知で？　まあ、野郎に知られてても、ちっとも嬉しかねぇけどな……ま、あれだ。レディのエスコートの仕方を勉強してから出直しなってこと」
男はスッと真顔になると、
「それとも、手負いの体で俺さまとこっちのガキンチョを相手にするのかい？」
と、リヒターをじっと見る。すると意外にも、あっさりとリヒターが引き下がった。
「やめておこう。おまえの相手は俺の管轄外だしな」
彼は港とは反対の方角に歩いて行きかけ、エミルに背中を向けたまま、単なるついでのように言う。
「エミル。アリスがなにか仕掛けようとしている。気をつけろ」
（リヒターさん……心配してくれているなら、どうして……）
複雑な気持ちのエミルは、黙ったまま彼を見送った。
リヒターが十分遠ざかってしまうのを確かめてから、マルタは、
「助けてくださってありがとうございました。あの、お名前は……」
と、男に訊ねた。
軽薄な男は趣味ではないけれど、助けてもらったことに変わりはない。
「俺さまはゼロス。ゼロスくんって呼んでね」
男は答え、とびきりの笑顔でマルタの顔を覗き込む。

「これからキミとデートしたいのは山々なんだけど、俺さまこれから総督府に用があるのよ。また後でね！」
そう言い置くと、ゼロスはエミルたちが出てきたばかりの総督府に入って行った。
「……ゼロスって……まさか」
マルタがつぶやく。
「え？　なに？　いまの人、知ってるの？」
エミルの問いに、彼女は真剣な面持ちで頷く。
「赤い髪のゼロスって、もしかしたらロイドの仲間だったテセアラの神子のゼロスかも……」
「え!?」
エミルは驚いた。と、マルタが頬を緩める。
「……って思ったけど、神子があんな風にちゃらちゃらしてる訳ないよね」
「そ、そうだよね。コレットと同じ神子とは思えないもんね」
コレットはいまごろどのあたりでロイドを捜しているのかな、とエミルは想った。
「そういうこと。さ、早くカミシラ山地の王朝跡へ行こう！」
「え。いまから？」
もう日差しは傾きかけている。せっかく故郷に戻って来たのだし、本当なら一泊して朝早く出かけたいところだ。が、アリスが何か企んでいるというなら、一刻も早く発っ

てしまうに越したことはない。
懐かしい友達にも、ひとりも会わなかったしな、とエミルは思った。

カミシラ山地は、パルマコスタの南に位置しており、特徴的ななだらかな尾根と豊かな自然を持っている。旧王朝の地下遺跡の入り口は、深い緑に隠された場所にあった。
(なんで海のシケの原因がこんな山奥にあるんだろう)
エミルは不思議に思う。
「……ここが、王朝跡?」
目の前には広大な神殿が聳え立っている。山に抱かれているというのに、圧倒的な水の匂いだ。窓や壁、いたるところに水の流れが認められる。神殿の奥には地底湖があるという噂まであるらしい。
「うん……。旧王朝——八百年前にこの辺りにあったシルヴァラント王朝の神殿のひとつ……なんだって」
ひんやりした空気の中で、マルタは答えた。

（シルヴァラント王朝……）

エミルは、道々ずっと気になっていたことを口にしてみた。

「マルタ……僕、リヒターさんから聞いたんだ……」

え、とマルタがこちらを向く。

「ヴァンガードはラタトスク・コアを使って、シルヴァラント王朝を復活させようとしてるって。僕、正直言うと、今回の事件が起きるまでヴァンガードのこと、少しだけわかるなって思ってたんだ……ヴァンガードはテセアラ人からシルヴァラント人を救うために戦っていて、テセアラの味方のロイドを敵視してるって。でも……」

エミルは足元を流れる小さな水脈に手を浸してみた。冷たくて清冽（せいれつ）な水だ。

「……シルヴァラントの人を救うために八百年も前の王朝を復活させて、なんの意味があるの？」

マルタはしばらく言い淀んでいたようだったが、

「……大衆には強い指導者が必要だっていうのが、ヴァンガードの総帥であるブルートの考えなの。あいつは自分が王様になりたいんだよ。……ばっかみたい」

と、最後は少し悲しそうに吐き捨てた。

「……じゃあ、マルタは、そんな馬鹿げたことが許せなくてヴァンガードを抜けたんだね」

「……う……うん……。そう……」

よかった、とエミルは笑顔になる。
「僕、マルタもそういう考えならどうしようかと思った」
「そんな訳ないじゃん！」
「だよね！」
ますますうれしそうなエミルとは対照的に、マルタの笑みはぎこちなかった。
「でも、ラタトスク・コアをどうやって使うつもりなんだろう」
エミルが首をひねると、それまでじっと控えていたテネブラエが口を開いた。
「魔導砲がどうとか言っていたと記憶していますが」
ラタトスク・コアがまだヴァンガードに置かれていたころ、ブルート総帥と幹部たちが話しているのを聞いたのだと彼は言った。エミルは、聞きなれない言葉に、
「魔導砲って、なに？」
と、訊ねる。
「古代の武器なんだって。私も詳しいことは知らないんだ」
マルタはそう説明すると、すっかり冷えてしまった体をぶるっと震わせた。
「それより、そろそろトマスさんを捜さない？」
「あ、そうだよね。脱線してごめん……」
エミルたちは薄暗い神殿の中を奥へ向かって進んだ。
永い年月の間に朽(く)ちてしまった石の柱の残骸(ざんがい)が転がっている。ひび割れた床、水の流

れる音――。
どれくらい歩いただろう。
「……あ、あの人！　あの人じゃない？」
マルタが叫んだ。指さした先に確かに若い男がひとり、仰向けに倒れている。服装も街にいた漁師たちのそれとよく似ていた。マルタと一緒に駆け寄ったエミルは、
「トマスさん！　トマスさん……ですよね！」
と、声をかけた。
（……？）
微かな違和感を感じたが、そのまま男の首の下に手を入れ、体を起こす。すると、トマスはうっすらと目を開けた。
「うう……あんたは……」
見たところ、幸いたいしたケガもしていない様子だ。エミルはできるだけはっきりした言葉で話しかける。
「僕、エミルです。お隣に住んでいたレイソルの息子の！　大丈夫ですか？」
すると、トマスは焦点の合わない目を細めるようにし、
「……レイソルの……？　あんたが……？　そんなはずは……うう……」
と、呻く。
（う……。僕、存在感なさすぎだよ……）

総督夫人に続き、トマスにまで忘れられてしまったらしい。エミルはさすがに落ち込んでしまう。
「あの、トマスさん。どうしてここにいらしたんですか？」
マルタの質問に、トマスは震える指を自分の足元の方に向けた。
「そいつを……海で見つけて……。多分これが……シケの……原因……」
それだけ言うと、男の体から力が抜けた。
「トマスさん！」
「……大丈夫。気を失っただけみたい」
マルタはエミルに、トマスをそっと横たえるように言うと、テネブラエに目をやった。
彼は先ほどから少し離れたところに転がっている魚に似た魔物を調べていたのだった。
「……これはレモラの死骸ですね」
テネブラエは言い、
「彼らは海の魔物ではありません。この辺りの淡水に棲む魔物です」
と、説明した。
「どういうこと……？」
エミルは聞いたが、
「推測の前に、この人を街まで運ばないと」
と、マルタはトマスを振り返る。そのときだった。

「その必要はないと思うな♡」
聞き覚えのあるあの甘ったるい声が神殿に響き渡る。
「だって、マルタちゃんはここでペットちゃんと一緒に死ぬんですもの」
奥の暗がりから、レイシーのジローに乗ったアリスが、ゆっくりと現れた。レイシーは尻尾に可愛らしいリボンを結ばれている。いかつい体にはおよそ似合わないが、彼女の趣味なのだろうとエミルは思った。
「……アリス……」
マルタに睨まれてもアリスはまったく意に介さず、鞭を手に余裕の笑みを浮かべている。
「今日はホークんがいないから、特別にアリスちゃんが自ら相手してあげる」
その瞳が残酷に光った。
「さ、死んじゃって♡」
「はっ、二度目の敵なんか目じゃねぇよ！」
ラタトスクモードになったエミルは、レイシーと物陰から飛び出してきたエルシーのタローを見て、不敵な笑みを浮かべる。
「そういうこと！」
スピナーを構えたマルタがタローに向かって走る。
「天翔舞(てんしょうぶ)っ！」

タローは可愛らしい声をあげてのた打ち回った。
エミルはジローを十分に痛めつけると、ウルフたちに囲まれて詠唱を始めたアリスを振り返った。
魔術の発動を待たずにエミルの剣は細い体を斬り上げる。そのまま崩蹴脚で蹴りを繰り出すと、とどめの一刃を浴びせた。

「いやーん」
ジローの上に落ちたアリスは、素早くその体によじ登る。
また魔物に乗って逃げるつもりだな、とエミルが思ったときだった。
突然、レイシーのジローが暴れ出した。
「きゃっ！」
アリスはその背中から投げ出され、床に激しく叩きつけられる。
「うそ、壊れちゃったの？」
彼女はなんとか上半身を起こすと、後ずさった。
その様子を見たテネブラエが冷たく言い放つ。
「……機械で誇り高き魔物を操った報いでしょう」
「えっ、そうなの？」
（機械で……。どうりで魔物をあんな風に使えるわけだよ）



アスカードで出くわしたときにも魔物（ティシー）に乗ってたもんな、とエミルは思い出していた。
「と、止まりなさいっ！　止まれっ！」
可愛がっていたはずの魔物に、アリスはためらうことなく鞭を振るう。
ヴオォォォォォォォォォォォォ――――ッ！
割れるような咆哮（ほうこう）が響き渡った。目覚めたレイシーは、アリスに襲いかかろうと後ろ脚で立ち上がりかけた。逃げられる距離ではない。アリスは思わずぎゅっと目をつぶる。
が、魔物の巨体は急にバランスを崩したと思うと、轟音を立てて崩れ落ちた。かわりにその場に立っていたのは、剣を手にした若者だった。
(ゼロス⁉)
エミルとマルタは思わず顔を見合わせた。
「……だ、誰……」
片目を開けたアリスは訊ねる。
「可愛いお嬢さん。ここは見逃してあげるから、さっさと消えな」
「……あなた……テセアラの神子（みこ）！」
そう言いながらアリスはゆっくりと立ち上がり、服についた汚れを払い落とす。
エミルとマルタは驚いて再び顔を見合わせてしまう。ゼロスが、まさかと思った神子だったからだ。
赤い髪の神子は、

「そう、神子さまが見逃すって言ってるんだぜ。さっさと行きな。ヴァンガードのアリスちゃん」

と、にやりとする。が、その目は少しも笑っていない。

「……んふ♡　アリスちゃん、あなたみたいな人嫌いじゃないカモ」

アリスはつんと顎を上げ、ゼロスの横を微笑みながら通り抜ける。

「ま、今回は借りにしておくわね♡　神子さま♡」

可愛らしい仕草で鞭を振り、彼女はもと来た暗がりへと消えて行った。

「やあ、キミがマルタちゃんだったのか」

満面の笑みを浮かべたゼロスが、両手を広げてマルタに近づく。

「麗(うるわ)しのドア未亡人の依頼で助けに来たぜ。ついでになんとかっていう漁師と、キミの連れのなんとかくんも」

「……エミル、です」

エミルが自分の名前を言うと、

「うんうん、なんとかくんね」

ゼロスはにこにこと頷く。男はどうでもいいらしい。

「で、マルタちゃん、ケガは？」

マルタは、俯いたまま言う。

「……あなたがテセアラの神子だったんですね。ロイドの仲間の」

ロイドの名を聞いたとたん、ゼロスの顔色が変わった。エミルも、
「ロイドは……あいつはどこにいるんだ？」
と訊ねる。
「……おまえら、なんでロイドを捜してる？」
ゼロスは腰に手を当て、エミルとマルタを等分に見ながら訊ねた。
「あいつは……あいつはお母さんたちの仇だ！」
「復讐のため……ってか？」
「あいつは私たちが探している宝石を盗んで逃げた大罪人よ」
ふたりの言い分を聞いたテセアラの神子は、
「……ふん。もの知らずのガキどもに話すことは何もねぇよ」
パチン、と指を鳴らした。すると、近くに控えていたパルマコスタの街の兵士たち――ドア夫人が手配したのだろう――が、トマスを抱き起こして連れて行った。
「悪いが、ロイドを仇呼ばわりする奴とはつきあわないことにしてるんでね。これで失礼させてもらうぜ」
一刻も早くこの場を立ち去りたいという様子で、ゼロスはさっさと行ってしまった。
「……あいつもロイドを信じてるんだね。コレットみたいに」
「……コレットとは違うよ。あいつは、僕たちのこと全然信用してないって顔してた」
ふたりはゼロスの後ろ姿をじっと見つめる。

「きっとあいつは、目の前でロイドが人を殺してもロイドを信じるようなぼんくらなんだ！」
「……エミル。気持ちはわかりますが落ち着いてください」
感情的になっているエミルに、テネブラエが訊ねる。
「海のシケの件はどうするんですか？　トマスさんの話では、ここに棲むレモラが原因だということでしたが」
エミルはハッとし、
「……あ……そうだったよね。どうしよう……」
と、マルタの顔を見た。
「せっかくここまで来たんだし、もう少し奥まで行って調べてみようよ……だめかな？」
上目遣いのマルタに、彼は優しく笑ってみせた。
「ううん。どのみちシケの原因は調べなきゃいけないんだもん。行こうよ」
「……うん。エミル、ありがと。私、エミルのこと大好き！」
マルタがエミルに飛びつき、腕を絡ませる。
（えぇっ!?）
なんでこういう展開になるんだろう、と困惑しながらも、ふりほどくほどの勇気はない。エミルはマルタに密着されたまま、再び神殿の奥へと歩き始めた。

黙って歩いていると、水の音に飲み込まれそうな気がする。エミルは、ようやく離れてくれたマルタの後ろを進んでいたが、

「……なんか……暗いところで水の音がするのって、怖いね」

と、声をかけた。マルタは振り返り、

「そうかな。私はロマンチックだなって思うけど」

と、どこかぽーっとした表情で応える。

「そ、そう？」

彼女はこんどはもじもじし始め、恥ずかしそうに訊ねた。

「……ねぇ、エミル。私って、エミルから見たら、どうかな？」

「な、な、何が……」

思わず声がうわずってしまう。

「私、よく勝ち気すぎるって言われるんだ。思いこみ激しくて、重い……とか……。やっぱ、重い？」

なんだそんなことか、とエミルはほっとした。

「マルタは痩(や)せてるから別に重くはないと思うけど……」

「……そ、そういう意味じゃなかったんだけど……」

期待はずれの返答に、マルタはがっくり肩を落としたが、

「まあいいや。エミルの好みのタイプに近づけるよう頑張るから、なんでも言って

ね！」
と、拳を振って先を急ぎ始めた。
「もてる男はつらいですね」
いつの間にか目の前にいたテネブラエが、笑いを含んだ声で言う。
「それ、本気で言ってる？　どう考えても、マルタのアレってなんか勝手に僕の理想像作ってるでしょ」
エミルが眉を寄せると、テネブラエは、
「おや、意外と聡（さと）いですね」
と感心したように頷いた。突然、
「ふたりともなんか言った？」
マルタが振り返る。
「な、なんでもないよ」
「な、なんでもありません」
ふたりは同時に答え、あわてて走り出した。

「それにしても地下なのにこんなに水があるなんて……」

エミルは足を止め、耳を澄ませる。

しばらく行くと、水音はさらに大きくなった。通路の先には川といってもいいほどの流れができており、薄闇の中に白く渦巻く水が見える。

「地下水脈なんじゃないかな？」

ふたりが話し合っていると、流れを見ながら何ごとか考えていたテネブラエが、顔を上げた。

「なるほど、わかりましたよ。シケの原因が」

「ほ、ホント？」

「ええ。おそらく原因は魔物同士のなわばり争いでしょう」

「そんなことで海がシケるの？」

意外そうに、マルタが聞く。

「はい。トマスさんは淡水系の魔物であるレモラを海で見かけたと言っていた。本来はあり得ないことです。魔物はあまり生息圏を変えませんから。後天的な理由で、この辺りの海とここの地底湖が連結したのではないかと」

「ええっ⁉」

(海と地底湖が連結って……⁉)

そんなことがあるのだろうかと、エミルは驚いた。水が混ざってしまって大丈夫なのだろうか。マルタも同じ疑問を持ったようだった。

「ねぇ。淡水系の魔物って海でも暮らせるの？」
「レモラに代表される種族は海水にも耐性があると思います」
テネブラエは答える。
「そもそも海はセンチュリオン・アクアの領域。センチュリオンは自分の属性の魔物と契約の縁を結び、バランス管理をしなければなりません。あれが、リヒターなどという男にうつつを抜かして職務を放棄しているせいで、水属性の魔物たちが野放しなのでしょう」
まったく嘆かわしい、と聞こえよがしなため息をついた彼に、
「テネブラエって、小姑（こじゅうと）だよね」
「うんうん」
マルタとエミルはひそひそ言って頷きあう。
「なんですと!?」
「男なら細かいことは気にしないの！」
マルタがぴしゃりと言った。

やがて、流れの音が次第に小さくなった。水は勢いよく動くことをやめて、神殿の最深部に静かに横たわっている。

「地底湖だ……」

神秘的な深い青に、エミルは目を奪われた。

(本当にこんなところに湖があったんだ！)

「じゃあこの湖が海につながってるのかな」

マルタが湖に近づこうとしたときだった。

バシャ——————ンッ!!

水の中から鯨に似た巨大な魔物が、ぬらぬらした白い腹を見せて跳ね上がった。カッと開けた口の中には尖った歯がずらりと並んでいるのが見てとれた。

「うわああっ！」

たっぷり水をかぶったエミルが悲鳴をあげる。魔物はすぐに湖の中に消えた。

「今のは……マニトウ！」

マルタが叫んだとき、再びマニトウが姿を現した。テネブラエにも緊張が走る。

「あいつは人一倍なわばり意識の強い奴です。奴なら海の種族と対立しかねない」

「ってことは、こいつがシケの原因？」

「おそらく」

テネブラエがエミルに答えた。
「うわ！　く、来るよ！」
マニトウは明らかにエミルたちをなわばり荒らしと認識しているようだ。滝のような大量の雫を垂らしながら、巨大な体が迫る。
「うわあああああっ！」
エミルは夢中で剣に手を伸ばした。
マニトウが湖に潜る前に、最初の一撃を加える。湖の中で戦うというのはエミルたちにとって初めての経験だった。
浮上したマニトウをできるだけ岸に近い浅瀬に誘うと、マルタが燕舞斬(えんぶざん)で攻撃すると、マニトウは回転しながら、彼女を空中に巻き上げた。
「きゃあああっ！」
「マルタ、正面から行くなっ！」
エミルは派手な飛沫(しぶき)を上げながら走り、マニトウの背後に回ろうとする。が、それより早く巨大な魔物が跳ねた。
「うわああっ！」
マニトウが湖面に飛び込む際の衝撃で、エミルも岸まで飛ばされる。
「くそうっ！」
髪から水を滴らせ、歯軋(はぎし)りする彼の赤い瞳の輝きが強くなった。

「穿孔破(せんこうは)！」
魔物の横腹を突き、背後から魔神閃光断(まじんせんこうだん)を浴びせる。間髪を入れず、マルタのスピナーが閃(ひらめ)いた。苦しがって跳ねるマニトウに、最後は魔王地顎陣(まおうちがくじん)を叩き込む。
巨大な魔物は、ズブズブと湖水に沈んで行った。
「……終わったな」
テネブラエの待つ岸に上がり、エミルがようやく剣を収めたときだった。
最期(さいご)の力を振り絞り、マニトウが再び湖面に顔を出した。と、その瞬間、三人はあっという間に魔物の口の中に引き込まれてしまった。
「うわあああっ！」
「きゃあああああっ！」
(マルタ――――！)
激しい衝撃と揺れを感じながら、エミルの意識は途切れた。

穏やかな波の音が心地よく響いている。さっきまで冷たかったはずの体が、じりじり

と温まってくる。
瞼（まぶた）を閉じているのに、どうしてこんなに眩（まぶ）しいのだろう——。
ハッと気がつくと、強い太陽が目に飛び込んできた。あわてて起き上がると、マルタとテネブラエもそばにいる。
「エミル……大丈夫？」
「な……なんとか生きてる……」
（そうか……僕たち、マニトウに飲まれて……）
マニトウは王朝跡の地底湖から連結する海まで来て、エミルたちを吐き出したのだろう。彼らは砂浜の上で気を失っていたようだった。
「マルタは？　怪我してない？」
エミルがマルタを立ち上がらせてやると、
「うん、平気。優しいね、エミル。ありがとう」
と、うれしそうに微笑む。
「……でも、ここってどこなんだろう」
「うん……」
きれいな場所だな、とあたりを見回したエミルは思う。
抜けるような青空に、濁りのない白い雲が流れている。海水は透明で、なだらかな海岸線に寄せる波は静かだった。

そのとき、

「……誰か来ます！　私は隠れますよ」

と、テネブラエが姿を消す。確かに海岸をこちらに向かって歩いてくる人影が見えた。

マルタは躊躇うことなく、人影に向かって手を振った。

「すみませーん！　ちょっとお聞きしたいことが……」

「なんでぇ？」

だが、近づいてきたその男の姿を見るなり、エミルは内心とまどってしまった。

短く刈り込んだ髪とは対照的に、鼻から下は濃い髭に覆われいて、顔がよくわからないほどだ。ひどくがっちりした体躯で、背が低かった。魔物を一体、従えている。

（……人間……じゃない。この人、何なんだろう……。ハーフエルフじゃないよな……。それに一緒に連れてる魔物も……なんか……変……）

ロバほどの大きさでいかにも攻撃性の低そうな、見たこともない種類の魔物だ。濃淡のある優しい緑色の毛皮と、魔物にしては穏やか過ぎる瞳を持っていた。

「あ、あの……、道に迷ってしまったんですけど、ここはどこでしょう」

マルタが訊ねると、男は気安く答えた。

「ここはイセリアの北でぇ。なんなら村まで送ろうか？」

ワフ、ワフ。

長い耳を揺らして、魔物が鳴く。

「乗っけてってやろうかっていってるぜ」
男は笑った。
「い、いいえ、大丈夫です。ありがとうございます」
丁重にマルタが断ると、
「おう、それじゃあな」
男はあっさりと魔物を従えて行ってしまった。
ふたりはしばらく黙ったまま彼らを見送っていたが、
「……えっと、イセリアの、北……？」
エミルが男の言葉を思い出す。
「ってことは……私たち……」
「……海を渡ったってこと⁉」
彼らは顔を見合わせて驚いた。
「そのようですね」
テネブラエが空中に現れる。
「……ま、いいか。船代が浮いたと思えば」
マルタは、ゆったり尻尾を振っているテネブラエを見上げると、笑った。
「ええ。それにお金では買えない貴重な体験もしましたしね」
エミルは、

「ふ、ふたりとも前向きだなあ」
と、圧倒される。
「だって、もうここまで来ちゃったんだもん。仕方ないでしょ」
「……そうだね」
イズールドに向かうつもりでいたが、むろんイセリアに早く着くに越したことはない。
(マルタって、明るくていいな)
その明るさで、うじうじしていた自分を引っぱってくれるのだと思うと、エミルは素直にうれしかった。
(それもこれも、お守りの言葉のおかげだ!)
——勇気は夢を叶える魔法。
エミルはリヒターの言葉を胸の内でそっと反芻(はんすう)する。
神殿の遺跡で微かに感じた違和感のことなど、すっかり忘れてしまっていた。
「では、気を取り直してイセリアへ行きましょうか」
テネブラエに促され、
「うん!」
エミルとマルタはロイドの故郷へ向かって、南に歩き始めた。

クゥ～ン、クゥ～ン。
村の近くまで戻って来ると、ノ、イ、シュ、が鳴きだした。
「どうしたんでぇ。もう家はすぐそこだぜ」
ごついグローブをはめた手で、ノイシュの背中をぽんぽんと叩いてやる。この茂みを抜ければ、もう村の入り口だ。
キュウウウウ……ン。
どうも背後を気にしているようだ、と気がついた。
「そうか。あいつじゃなくて残念だったな」
突然息子が戻ってきたあの日から、もう半年が経つ。
〝親父、俺、友達を助けに出かけることになったんだ。こいつをしばらく預かってくんねーかな？〟
そう言ってノイシュを置いて行ったのだった。
クゥ～ン？
ぼんやりしていたのを気にしたのか、ノイシュが鳴く。
「はは、心配ねぇよ」

と、にっと笑ってみせ、
「待ってろ。きっとすぐ帰って来るさ、ロイドの奴――」
誰にともなくそうつぶやいた――。

【『テイルズ　オブ　シンフォニア-ラタトスクの騎士-世界(とき)の願い②』に続く】

あとがき

こんにちは、矢島さらです。

『テイルズ オブ シンフォニア―ラタトスクの騎士―』メインシナリオ編第一巻です。今回は全三巻の予定です～。

シンフォニアの世界再生から二年後の世界。

ゲームの序盤、ルインでのエミルのあまりの虐げられようには胸が痛くなりましたが、だんだん成長してきてくれているのでとりあえずは安心？ な一冊目です。

前作をプレイしたみなさんは、ロイドたちがその後どうしていたのかもとっても知りたかったですよね？

この先、エミルにマルタにテネブラエたちがどうなっていくのかも興味津々ですし、それに加えて旧キャラのみなさんもそれなりに大人になって（たぶん）登場するので、とてもにぎやかなことになりそうで楽しみです。

さて、いつものかえる日記。

アビスとラタトスクの間に、私は引越しをしまして、もちろんかえるも新居に連れてきました。一時期は満室だったかえるマンション（ただの温室ですが）は引越しの際に処分してしまったので、いまはキッチンの出窓に置いたプラスチックケースに住んでます。知らない人が見たら食材だと思うかも……それはないか。

実はかえるの他に年とったハムスターも連れてきたのですが、引越しのストレスか、すぐに力尽きてしまいまして……。

で、家の前のちょこっと土のあるところに埋めたんですよ。

そしたらそこにキノコがどーんと生えました。カサがあみあみで、ものすごくブキミなやつ。怖いので調べたら、『アミガサタケ』っていうヨーロッパではなかなかに高級なおいしいキノコだそうです（ただし生だと毒あり）。

もしかしたらハムからのプレゼントだったのかもしれないですけど、食べませんでした。三本もあったんですけど。

ちなみに、今までかえるのお墓からなにか生えてきたという経験はありません。怖いから生（は）やさなくていいからね。

あ、あんまりかえる日記じゃなかったですね。

最後になりましたが、今回ステキなオリジナルイラストをバンダイナムコゲームスの奥村大悟氏に描いていただきました。そして、シナリオの実弥島巧先生にもまたまた大変お世話になりました。ありがとうございます！

それでは、第二巻でまたお会いしましょうっ。

二〇〇八年八月

矢島さら

矢島さらの著作リスト

テイルズ オブ デスティニー
運命をつぐもの上下
青の記憶
蒼黒の想い上下

テイルズ オブ ファンタジア
はるかなる時空上下
真紅の瞳　紺碧の絆
琥珀の回廊　瑠璃の夢

テイルズ オブ エターニア
永遠のきざはし全3巻
蒼天の星上下　暁の約束上下
リッドのとかげ　キールの希望

テイルズ オブ デスティニー2
蒼黒の追憶上中下
朱鷺色の風

テイルズ オブ シンフォニア
久遠の輝き全4巻
青翠の器

テイルズ オブ リバース
第一話 落日の瞬間上下
第二話 偽りの再誕上下
第三話 新たなる時代

テイルズ オブ ジ アビス
緋色の旋律上中下
真白の未来上下
黄金の祈り上下

テイルズ オブ シンフォニア-ラタトスクの騎士-
世界の願い①

ISBN978-4-7577-4373-1
C0193 ¥640E

定価 本体640円 +税

発行◯エンタープレイン

Famitsu Bunko

ふたつの世界がひとつになってから2年——ロイドは英雄と呼ばれていた。が、そのロイドに両親を殺されたと信じるエミルは、ある日、マルタという少女と出会う。彼女はエミルを命の恩人と慕ってくれるのだが、エミルにその記憶はなく……。人気の『テイルズ オブ シンフォニア』の続編が登場。ラタトスクの騎士・エミルの冒険が今、始まります!!